

弥生中期・栗林式土器編年の 再構築と分布論的研究

弥生交易論の可能性を視野に入れて

Reconsidering the Chronology of Pottery Styles of Mid-Yayoi,
and Theories of Distribution:
Putting into Perspective the Possibility of Yayoi Period Trading

馬場伸一郎

BABA Shin'ichiro

はじめに

①研究史と問題の所在

②栗林式土器編年再考

③栗林式土器と周辺地域型式の併行関係

④小松式土器と栗林式土器の分布論的検討

⑤考察

おわりに

【論文要旨】

本稿の目的は、中部高地に分布する弥生中期・栗林式土器編年の再構築と広域編年上の位置づけ、分布と動態の明確化を行うことで、人の「うごき」を具体化することである。弥生社会・文化の研究という総合的研究を射程とするならば、まず土器型式の設定や細分、広域編年の作成は必須である。

分析の結果、弥生IV期前半である栗林2式新段階は栗林式の分布域が最大化する時期であり、またその時期には、栗林式の中心地から離れた上越高田平野の吹上遺跡と北武蔵妻沼低地の北島遺跡で、栗林式およびその系統の土器が多量に出土するという現象を確認した。さらに同時期、小松式関連の土器分布のあり方から、高田平野から北関東へ抜ける主要交流ルートが「白根山－吾妻川ルート」から「千曲川－碓氷川ルート」へ転換することが判明した。そして千曲川流域内で最大級の集落遺跡である松原遺跡に、小松式関連土器の出土が偏る。

まさにそうした土器分布の動態のあり方は人々の往来の仕方の変化であり、特定の場所で生産される物資の互酬性的交換活動のあり方の変化を示すと考えられる。栗林2式新段階は折しも佐渡産管玉の流通が明瞭になり、また長野盆地南部の榎田遺跡と松原遺跡の間で磨製石斧生産の分業が確立する時期である。異系統土器を多量に出土する複数の遺跡は、異系統土器集団間の「交易場」であると考えられる。

すなわち、IV期前半の栗林式集団による広域ネットワークの形成と「交易場」の設定、長野盆地南部の磨製石斧分業生産の確立は、パラレルに進展した歴史的事象であり、集団間の互酬性的交易活動の極度の発達を示す歴史的意義をもつと考えられる。

【キーワード】 弥生中期、栗林式、小松式、分布の動態、人の「うごき」

はじめに

先史考古学において交易論とは永遠のテーマなのであろうか。かつて八幡一郎は1938年に「先史時代の交易」という傑作を発表した[八幡1938]。そこで八幡は交易論を論じるには物資の生産地、あるいは材料の原産地を特定し、その分布の範囲を特定することが必要である、という視点を示し、今日の流通論の視座をつくった[馬場1999]。

しかし、そもそも「交易」という言葉には、物資と物資を交換するという意味のみならず、物資を交換することで利益を得るという意味も内包されており、「商人」の存在さえも用語の背後に見え隠れする。それを先史時代の記述に用いること自体、ためらいを感じることもある。本田勝一が記述したニューギニア高地人[本多1973]や、クックの描いた南太平洋諸島の原住民[クック(増田訳1992・1994)]、サーリンズが記述したパプア・ニューギニア諸島民[サーリンズ(山内訳1984)]のように、交易する民族の姿が、はたして日本列島の先史時代に存在していたのであろうか。たとえ民族誌で事実であったとしても、考古学の分析は考古資料をもって現象を証明することしかできず、厳密には「交易」は当然のこと、物資と物資を取りかえる「交換」という事実さえ、考古資料から直接証明はできない。

しかし、そうした考古学という学問的性質が故に苦境に立たされていた交易論の分野で、いくつもの事例分析を積み重ね、極力「分厚い記述」をめざすことで交易論を展開しようとする研究が、縄文時代の特に黒曜石製石器研究では続いている。多くの研究があるなかでも注目したいのは古城泰・大工原豊・池谷信之の研究である。古城は、特定石材・石器の比率の、特に高い地点がそれぞれ場所を違えていること、また最も比率の高い遺跡を中心に同心円状に比率が低減していく姿を明確にした[古城2000]。故に、物資を集積するようなセンター的機能は東京都西部の縄文中期には認められず、各集落が黒曜石石材など遠隔地産物資を含む専門の交換物資をもち、それらの交換によって必要物資を得ていた社会[古城2000:194頁]であるという。大工原は長崎元廣の研究結果[長崎1984]を受け、原産地推定分析・黒曜石石材の集積事例・原石の重量・流通ルート上に存在する集落規模を総合的に分析することで、縄文前期から晩期の中部高地・関東における黒曜石石材流通の変動を明らかにした。大工原は縄文前期末から中期初頭(の第3段階)、信州産黒曜石の分布圏が最も拡大するその時期、石材の選別などが徹底され、交易集団を介在した交易段階に発達していたとする[大工原2002・2007:167頁]。池谷信之は伊豆諸島と相模の縄文中期を例に、神津島産黒曜石の原産地推定分析のみならず、土器産地の分析や集落の定住性をも参照することで、中期後半に見高段間遺跡が神津島産黒曜石石材を寡占し分配する交易モデルを提示した[池谷2005]。

すなわち、三氏により示された研究手法とは、考古学的に「交換」・「交易」は直接実証できないものの、多くの理化学的分析や考古学的資料の分析を積み重ね、「特異な現象」を比較検討の結果抽出し、それが集団間のなんらかの「交換」なり「交易」ではないと達成できないという「蓋然性」の高さを訴えることである。「交換」・「交易」研究とは、結局のところ先史社会考古学の総合的研究が唯一の手法なのである。

さて、弥生時代研究の場合、「特異な現象」を考古資料の比較検討で抽出することはしたとしても、大規模集落が交易の場であったとする広瀬の弥生都市論を除き「生産・流通」論へと展開するのが学史的な流れである。その場合、首長権力が石器・青銅器・鉄器などの手工業生産をどのよう

に掌握・編成するのか、また生産された物資を如何に分配するのか、その点に視点が集中する特徴がある〔近藤1962・都出1989・広瀬1998〕。貢納的性格の強い玉類などの威信財、武器・武具、須恵器、製塩などの手工業生産を首長権力が掌握・編成するという観点から、古代国家形成の一側面を明らかにするという手法は古墳時代〔和田2003〕のみならず、律令時代以後〔櫛木2004〕なども盛んに研究が行われている。

つまり、弥生時代における集団間の物資の交換が交易論へと向かわず、物資生産のあり方やその物資の分布範囲へと関心が強く向かうのは、古代国家形成へと向かう前史として弥生時代の手工業生産・流通が位置づけられていることに他ならない。都出の「考古学からみた分業の問題」という記念碑的論文はまさに弥生時代をそのような観点から描いた論文である〔都出1968〕。弥生時代の生産・流通論の多くは都出の路線の延長線上にあるといっても過言はなからう。

しかし、物資の生産や交換・交易活動が強大な首長権力による掌握となんらかの関係をもっているという図式は、はたして弥生時代に敷衍できるものなのか、一度見直してみる必要はあろう。それを行うには、畿内など政治的中心地から外れた地であり、なおかつ原産地が特定できる石器・石製品・石材が豊富な北陸・中部高地が良好なフィールドとなる。

筆者もすでに、中部高地でも特に千曲川流域の弥生中期栗林期を対象として、磨製石斧・玉類生産およびその流通論的研究〔馬場2004・2006b・2007a〕、黒曜石石材流通の復元〔馬場2007c〕、集落構造研究〔馬場2006a・2007b〕に着手している。しかし、交換・交易にも関与するなんらかの人の「うごき」を最も具体的に示す、栗林式土器の分布動態の研究は未着手である。ただし、それを議論する前に、まず基礎研究である栗林式土器の編年や、その広域編年上の位置づけ作業は必須であり、本稿ではまずそれを示した上で弥生交易論に資するための土器論を展開したいと考える。

①……………研究史と問題の所在

1. 研究史

ここでは栗林式土器の研究史を大きく①編年・②分布・③成立・④広域編年上の位置づけに分け、問題の所在を明らかにする。

①栗林式土器の編年

栗林式編年の基本路線を形作ったのは桐原健・笹沢浩・上田典男・贅田明・青木一明・寺島孝典・安藤広道・石川日出志である。特に笹沢浩による一連の研究〔笹沢1968・1971・1974a・1974b・1978・1987〕は栗林式編年の基礎を確立した研究である。まず本稿の論旨に関わる笹沢の研究を整理しよう。

笹沢は1970年に発表した2本の論文で「吉田式－箱清水Ⅰ式－箱清水Ⅱ式」という後期土器編年を確立し〔笹沢1970a・1970b〕、その直後、栗林式編年の再検討に着手する。1971年、桐原の栗林式編年を批判し、桐原〔桐原1963〕の取り上げた栗林遺跡第2類・第3類土器を栗林Ⅰ式、長野市北西部中学校西遺跡・国鉄車両基地第2類土器・栗林遺跡D地点出土土器を栗林Ⅱ式、旭幼稚園遺跡・百瀬遺跡竪穴出土土器を百瀬式として新たに設定した。笹沢の編年方法は、一括資料に乏しいなかで遺跡単位を1時期とみなし、器形・文様の種類・文様帯構成の3属性の変遷を点検するとい

うものである。ただし百瀬式とした旭幼稚園遺跡出土土器には、百瀬遺跡竪穴住居出土土器のように頸部に櫛描波状文・櫛描簾状文をもつものがなく、それが後の百瀬式の編年的位置づけをめぐる論争の発端となる。笹沢は旭幼稚園遺跡と百瀬遺跡竪穴住居出土土器に櫛描文採用の差違を認めつつも、口唇部と頸部に篋描沈線文や縄文を施す土器が顕著である共通性が一方で認められる点を評価し、双方の土器群を百瀬式として括った。

1974年には、良好な土坑一括資料が出土した長野市平柴平SKY03・05出土土器を栗林I式とし、SBY04出土土器を栗林II式に充てる。栗林I式の壺は胴部下半以外の多くの部位に文様が施文される特徴を有することを改めて指摘するいっぽう、前年まで百瀬式に含めていた旭幼稚園出土土器を百瀬式から外し、「百瀬式併行土器」と位置づけを変更した。また、新諏訪町式と栗林I式の間を埋める土器として、太い篋描山形文の間の空白部に刺突を充填する細頸壺や条痕文甕を含む、国鉄車両基地遺跡出土土器を提示した。

ここまでの研究で栗林式土器の特に壺の文様が、栗林I式から栗林II式そして百瀬式併行期に進むにつれて口縁部もしくは頸部へと収斂し、文様が一層単純化するという変遷観がほぼ固まった。

笹沢は栗林式編年を確立すると同時に、栗林式以前の土器の位置づけにも積極的に言及した。1968年には長野市新諏訪町B地点と旧更埴市反町遺跡の土器を栗林I式直前に置く考えを示していたが、藤森栄一が野沢I式と関係があると指摘し、庄之畑式と栗林式の間の型式として「荒山式」を再び登場させたことを受け〔藤森1968〕、1974年に荒山式土器を再提唱した〔笹沢1974b〕。笹沢は長野市荒山遺跡出土土器の編年的位置づけを決める重要要素として、①頸部の刺突文・②磨消縄文をもち、なおかつ太い篋描沈線で描かれた文様モチーフを挙げた。特に②の属性は栗林式には未発見であり、須坂市須坂園芸高校校庭遺跡の筒形土器と佐久市町田遺跡出土の筒形土器と荒山式が同系列にあるとする藤森の指摘を支持した。

そして1977年、笹沢の弥生土器編年の集大成とも言える論考が発表された〔笹沢1977〕。ここでは再び旭幼稚園出土土器が百瀬式土器として扱われ、百瀬式の壺の内湾する口縁形態と頸部の簾状文の採用に天竜川流域の北原式土器の強い影響をみる新たな見解を示した。また百瀬式の甕の頸部には簾状文の採用が顕著であるのに対し、長野盆地南部では櫛描直線文・波状文が一般的であるという地域性を指摘した。また、天竜川上流域にあたる諏訪盆地の天王垣外式土器は千曲川流域の栗林II式そのものか、あるいは非常に密接な関係にある土器型式であるとし、後続する海戸式土器は甕の器形や頸部の簾状文の採用が顕著であるため、天竜川下流域との共通性があるとした。

さて、笹沢が確立した「栗林I式－栗林II式－百瀬式」という編年に対し、疑問を提示したのは山下誠一・設楽博己・小山岳夫である。折しも飯田市では恒川遺跡群、佐久市では北西の久保遺跡という大規模集落が調査・報告された時期で資料が増加した時期である。三県シンポジウムで中期後半の弥生土器が長野・群馬・埼玉の間で比較検討されたことにより、笹沢自身も位置づけが揺らいでいた百瀬式問題が再燃することになった。

山下は縦走羽状文甕の類似性と栗林式系土器の共伴関係を基に、北原II式（恒川II期）・栗林II式・百瀬式が併行関係にあることを指摘した〔山下1986a・1986b〕。設楽は、①同じ内容をもつ土器を地域が違うことから別型式として扱ってきたこと、②海戸式と百瀬式の内容の差、③栗林II式と百瀬式併行土器群との関係の不明瞭さ、④櫛描文採用率の高低差が長野盆地南部の百瀬式併行土器と松本盆地の百瀬式には明瞭であり、それを一括して百瀬式とすることへのためらい、という4つの疑問を示した〔設楽1986〕。石川日出志は笹沢の栗林I式・栗林II式・百瀬式編年を採用しつつも、笹

沢が基準とした平柴平遺跡資料は真相の土器である可能性を示唆し、同年に報告された長野市牟礼パイパスD地点資料を栗林I式の古相と考えた〔石川1986〕。また中期初頭の新諏訪町式と栗林I式の間のギャップを埋める好材料として、1985年に調査された塩崎遺跡群松節地点木棺墓資料を挙げた。北信濃の編年を整理した千野浩は、笹沢編年をほぼ踏襲するものであったが〔千野1986〕、石川と同様に牟礼パイパスD地点資料を栗林I式の古相に位置づける〔千野1986〕。佐久盆地の栗林式編年を進めていた小山岳夫は、栗林II式に後続する土器が百瀬式ではないことを支持するいっぽう、百瀬式ではない別型式が佐久盆地に存在することを認めざるを得ないとし〔小山1986〕、「深堀遺跡住居跡（栗林I式併行）－北西ノ久保I期（栗林II式前半併行）－北西ノ久保II期（栗林II式後半併行）－北西ノ久保II期の一部と西裏遺跡18号住居跡（栗林II式直後型式併行）」という4段階を設定した〔小山1987〕。なお、1980年代後半以後、遺跡出土の土器に対し栗林式・百瀬式という型式名を冠せず、遺跡単位の段階設定がそれに代わって頻出するようになる。

栗林式編年の議論が再燃した直後、1989年から1991年まで発掘された長野市松原遺跡の発見は信濃の弥生時代文化と社会像を大きく一変させるものであった。栗林期に環濠を伴う10万㎡クラスの大規模集落が存在すること、そして大陸系磨製石器の生産・流通機構の存在が明らかとなった。1993年に発表された寺島孝典の編年は、1986年の石川・千野編年を基本的に踏襲した編年となったが、松原遺跡出土の豊富な遺構一括資料を使用することで栗林式を松原I期からII期に分けた。また松原遺跡にはない一群として、牟礼パイパスD地点遺跡〔千野1986〕と新たに浅川端遺跡出土土器を松原I期の前段階に置いた。これにより栗林式古段階・中段階・新段階古・新段階新という編年を提示した〔寺島1993〕。

いっぽう、笹沢浩は、かつての荒山式を牟礼パイパスD地点資料とともに栗林I式古段階とし、栗林I式新段階に従来の栗林I式の基準資料であった平柴平遺跡の資料を置いた〔笹沢1987・1996〕。荒山式はここで栗林式の範疇に入ることになる。

松原遺跡出土土器を用いた寺島編年はその後、上田典男〔上田1995〕・青木一男〔青木1996〕・賛田明〔賛田2000〕により文様帯構成の変遷案が加わることでより実証性を増す。1999年に寺島は1993年の編年の古段階をさらに二分し、新たに古段階古・新、中段階古・新、新段階の5段階編年を提示した〔寺島1999〕。またシンポジウム『長野県の弥生土器編年』において長野県各地の栗林式編年の併行関係が示され〔和田1999〕、寺島の栗林式古段階に併行する土器が飯山・中野・大町の各地以外に見あたらないか、もしくは不明瞭であることが明らかになった。

さて、寺島の栗林式編年を基礎に、上田らの文様帯構成の変遷という観点をより大幅に用いた編年を石川日出志は新たに発表した〔石川2002a〕。その手法は、寺島の4段階編年案を「装飾帯構成⁽¹⁾」の組み合わせから点検する方法である。その概略を説明すると、壺の口縁端部から外面、頸部、胴部の各装飾帯を1・2・4とし、2装飾帯と4装飾帯の間に配置される単位文帯を3装飾帯、4装飾帯の下にある単位文帯を5装飾帯とする（図1-1・2）。2装飾帯と4装飾帯は器面を分割する性格が強く、沈線1条であったも装飾帯としている。また、2装飾帯と4装飾帯間に同種の装飾が重畳している場合、2+4装飾帯とする（5）。そして2装飾帯から分岐した装飾帯として2a装飾帯を設定し（2）、それぞれ装飾帯が無文の場合、0と表記する（3・4）〔石川2002a：55頁〕。

石川は寺島の編年と装飾帯の変遷に矛盾がないことをまず示した上で、器形、器種構成、成形・整形技術を編年根拠とした編年案を提示した。特に成形・整形技術はこれまでになかったオリジナルな観点である。また、栗林式を3型式4段階とする根拠を明確にし、型式学的研究の意義をより

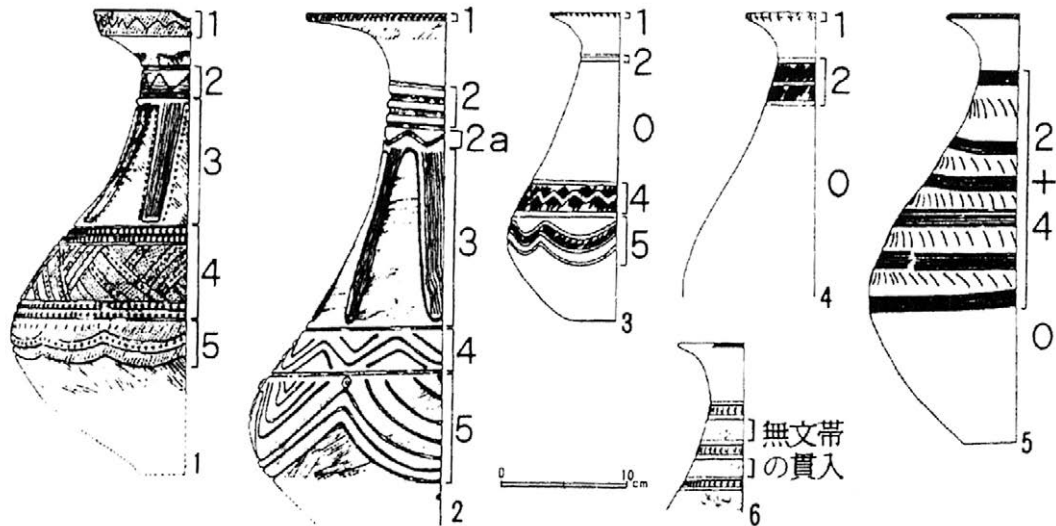


図1 栗林式土器の装飾帯構成のその表記方法[石川2002aより]

鮮明にした。実はこれまでの研究ではそれが不明確なため、栗林式から異型式を分離するという根拠が薄弱となっていた。3型式4段階とする根拠については、 $[2+4\cdot0] \cdot [2+4\cdot5] \cdot [2\cdot3\cdot4\cdot5]$ のわずか3種類の装飾帯構成のみで構成される第1段階の壺と、2a装飾帯が著しく発達し、また4装飾帯が残存するものの胴部の無文化が進行し、なおかつ2装飾帯に途切れる沈線を充填する施文法や口縁部が水平に拡張する特徴をもつ第4段階の壺は、他の段階との差が明瞭であると指摘する。そして第2段階と第3段階は「属性の多寡で判断できるレベルである」[石川2002a: 58頁]とした。甕は壺ほど差は明瞭ではないと指摘しながらも、第1段階の甕は個体レベルで識別でき、第4段階の甕は羽状文がまばらに施文されるなど、壺と同様に判別できる特徴が明瞭である。それぞれの段階を栗林1式・2式古段階・2式新段階・3式と石川は設定した。そして栗林式として3型式をまとめる理由に、栗林1式に成立した装飾帯構成の3類型が順次分解・分派していく過程が明瞭であること、栗林式と栗林式以前の区分の要点となる2装飾帯と3装飾帯が栗林3式まで明瞭に存続すること、栗林1式に新たに定着する無頸壺・蓋・高坏・鉢が栗林3式まで持続する点を挙げた。

また、筆者は石川の編年手法を採用し、佐久盆地の栗林式土器に1期から5期の段階を設定した[馬場2006a]。そして他地域との併行関係を試み、松本盆地南部には栗林1式・栗林2式古段階に該当する土器が不明瞭であることを改めて指摘した。

②栗林式土器の分布

分布論的研究でも編年研究を進めた笹沢浩の指摘が今なお有効である。笹沢によれば、栗林I式土器は千曲川流域に濃密に分布し、栗林II式には長野盆地南部で遺跡数が特に増加し、諏訪盆地にほぼ同じ土器内容をもつ天王垣外式を生み出す。さらにその段階、千曲川下流域を下り新潟県十日町市境界の中越地方へ、また上野へ栗林II式の影響が及び、上野では竜見町式を成立させたとする。また百瀬式とそれに類似する土器型式は下伊那を除く信濃一帯に分布し、また群馬県の競馬場遺跡、埼玉県秩父市の藪遺跡に見いだすことができるとし、さらに愛知県朝日遺跡・静岡県有東遺跡からも百瀬式が出土していることを指摘した[笹沢1977]。また、長らく出土が不明瞭であっ

た甲斐では、中山誠二により編年研究が進められたことにより、栗林式土器の存在が明らかとなり〔中山1993〕、櫛形町油田遺跡で栗林2式土器とともに有東式が相伴することが確認された〔坂坂1997〕。

異型式土器分布圏出土の栗林式およびその系統の土器⁽²⁾が発掘調査増加期の1980年代以降、急激に増加する。それを集成した研究に、北陸では久田正弘〔久田1991・1999〕・石川日出志〔石川1997〕、南関東では安藤広道〔安藤1991〕・柿沼幹夫〔柿沼2003〕、駿河湾では佐藤由起男・萩野谷正宏・篠原和大〔佐藤ほか2002〕の論考がある。

さて、栗林式古相の土器の分布に偏りがあることは石川も追認し、栗林式前段階の境窪・松節段階資料が長野盆地北部・松本盆地の北部と南部に広く分布している点とは対象的である点を指摘した。そして栗林1式の偏在性の背景に、北陸の櫛描文土器の影響が強く関与していることを考慮すべきであるとした。また、栗林2式土器が信濃・上野・越後にまで分布を拡大するのみならず、金沢市界隈にまで達する背景に、栗林式集団と小松式集団の関係の変化を示唆した〔石川2002a〕。

③栗林式土器の成立過程

栗林式土器の成立には櫛描文土器が関与すると指摘されていた〔笹沢1977〕。笹沢は、栗林式以前のいわゆる条痕文系土器の櫛描条痕文を「先中部高地型櫛描文」と呼び〔笹沢1978〕、栗林式以後に顕著となる先中部高地型とは異質な簾状文・波状文・直線文の系譜を小松式土器⁽³⁾に求めた〔笹沢1987〕。しかし、栗林式成立の問題について十分に議論されることは永らく遠のいた。

その問題を初めて体系的に採り上げたのは安藤広道であり、長野県考古学会主催のシンポジウム『長野県の弥生土器編年』で議論不十分とし指摘した栗林式成立期の問題に絡めて小松式との関係に触れる〔安藤1999〕。それは石川・千野の言及〔石川1986、千野1986〕以来、定着した「栗林式の古相＝牟礼バイパスD地点」という暗黙の了解が、実はなぜ栗林式の古相資料なのかを議論していないことへの批判でもあった。

安藤論文発表の2年前、簡潔ではあるが石川は栗林式土器の成立に関与する小松式土器の影響として「刷毛目整形・櫛描文・受口状口縁・壺頸部の幅広突帯の採用等」〔石川1997：57頁〕とやや具体的な指摘を行い、寺島も栗林式成立のメルクマールにハケ整形と口縁部横ナデの定着を挙げた〔寺島1999〕。

しかし安藤は石川・寺島の着眼点に賛同しつつも、栗林式の成立を考える上で外すことのできない属性として別途「①壺形土器における口縁部文様帯の消失または口唇部への収縮、②甕形土器口縁直下の無文化、③壺形土器における小松式的な櫛描文の定着、④文様単位の沈線区画の定着、⑤高坏形土器や無文の鉢形土器・甕形土器の定着」を挙げ〔安藤1999：4～5頁〕、また小松式土器の影響は牟礼バイパスD地点土器とその前後を含む幅広い時期に浸透していたとした。特に①・②は栗林式土器の成立を画する重要な属性とする。そうした画期的要素を指摘するいっぽうで、在地系統の要素に目を配り、壺の頸部・胴部に分かれる文様帯構成、壺胴部上半の懸垂文、刺突充填の三角連繫文、甕にみられる縦方向の分割原理等、栗林式以前の要素が数多く残存している点を指摘する。そうした材料から栗林式とは、小松式の影響が関与しつつも実際は在地要素が主体になることで緩やかな変化を遂げた型式と評価した。

石川は安藤の指摘と基本的に合致点が多いとしつつも、新たな編年案とともに成立期の問題を検討した〔石川2002a〕。重視したのは、牟礼バイパスD地点など寺島が栗林式古段階とした資料の装

飾帯構成と、その系譜である。安藤の指摘と共通点はあるながらも、さらに具体的な論証を展開する。まず牟礼パイパスD地点・浅川端・篠ノ井遺跡群などの栗林1式土器の前段階に塩崎遺跡群松節地点と境窪遺跡土器を置き、「松節21号木棺墓→松節16号木棺墓・境窪資料」という編年を立てる。黒沢川右岸土器は太い沈線内への櫛歯充填手法の欠落と沈線が細くなっている点を挙げ、栗林1式併行に位置づけを変更した。そして栗林式とそれ以前を画する特徴に、①壺の[2+4・0]・[2+4・5]・[2・3・4・5]という装飾帯構成の成立、②壺の3装飾帯への懸垂舌状文の採用、③壺・甕の口縁部の横ナデとこれによる口縁部外反および口縁部の無文化を挙げた。栗林式を特徴づける器種組成では、特に無頸壺の存在を重視している。

石川は、栗林式成立期の土器属性に以前の在来要素から連続する点を認めつつも、栗林式以前の土器が実に内容多彩であり、それが整理統合されることにより成立する栗林1式には大きな土器型式構造の変革があったとした。そして小松式やその系統である丹後櫛描文土器の関与がなければそうした変革は説明がつかない点を強調した。

④栗林式土器の広域編年上の位置づけ

笹沢浩は、朝日遺跡にて百瀬式が畿内第IV様式併行の高蔵式と共伴することから、中期末に百瀬式を置く。また栗林I式については、具体的材料は示されていないが、畿内第III様式の櫛描文と関係があるため、中期中葉に置くことができるとした〔笹沢1977〕。

石川日出志は伊勢湾・北陸・中部高地・関東・東北の広域編年を発表した〔石川1986〕。ただしその時点では中部高地と関東北西部編年の対比において、重要な材料となる埼玉県池上遺跡出土の栗林式甕が池上式の幅の中のいずれと接点をもつことを示す材料なのか、判断を保留した。また池上・小敷田遺跡出土の条痕甕と黒沢川右岸遺跡の共通性を指摘し、湯倉洞窟遺跡に栗林II式あるいは百瀬式と共に小松式新段階の土器が出土している点に注意を促した。異系統土器の共伴資料がわずかな時代に、それを取り込みつつ、不足な点は土器整形技法や施文手法の共通性にて共伴資料情報を補う石川の広域編年は、その後の原型となる。

その後石川は、1994年に畿内第III様式の終末と栗林式の前段階の併行関係を示し、また畿内第IV様式と栗林式の新段階を併行させ、同時期に宮ノ台式が併行する編年案を発表した〔石川1994〕。1996年の広域編年では、北陸・中部高地・神奈川・福島出土の土器が池上・小敷田遺跡を重点的に分析した。そこでは以前保留していた中部高地系土器と池上式の併行関係が検討された。池上・小敷田遺跡出土の中部高地系土器には黒沢川右岸段階から栗林式古段階の二段階の資料が含まれ、栗林式古段階に対応する在地土器群に小敷田遺跡1号方形周溝墓資料を挙げた。また同遺跡出土の小松式土器は、増山編年の4期ないし3期から4期の中間と対比可能とし、新潟県下谷地遺跡に栗林式古段階が出土していることで交差年代が確認できるとした〔石川1996：159頁〕。ここに「池上式（池上・小敷田遺跡出土土器）－黒沢川右岸段階－栗林式古段階－小松式増山編年4期前後－南御山2式－中里式」という併行関係が提示されることになった。1996年では池上・小敷田遺跡出土土器の細別について明確な提示はなかったものの、2001年にそれは3段階に細分された。外来系土器と池上式の対比に関する見解は1996年と変化なく、池上式の新段階に小松式・栗林式が共伴する可能性が高いと言及した〔石川2001：86頁〕。

安藤は1999年に栗林式土器と周辺地域型式の併行関係に触れ、池上式古段階と栗林式古段階の併行関係は池上遺跡1号環濠の共伴関係に示されていると強調し〔安藤1999：12頁〕、栗林式古段

階の併行関係をめぐり、石川の見解との違いをみせる。そして栗林式前段階の塩崎遺跡群松節地点・来見原・境窪・黒沢川右岸の各遺跡出土土器は池上式以前に位置づける。静岡市有東16次調査SK05出土土器に概ね境窪段階併行の土器が伴い、貝田町式・瓜郷式土器の古相と境窪段階が接点をもつとする。小松式との併行関係では、壺の頸部幅広突帯と櫛描直線文・簾状文の重畳を根拠に増山編年3期と黒沢川右岸段階が併行し、池上・小敷田遺跡の古・新段階と増山編年4期が併行すると指摘した〔安藤1999〕。

2002年の石川編年では、同年に発表した栗林式土器編年を用い、「八日市地方様相8期－尾張III-3－栗林1式」,「八日市地方様相8期～磯部運動公園段階－尾張III-4－栗林2式古段階－宮ノ台1期」,「磯部運動公園段階～専光寺段階－尾張IV-1～IV-2－栗林2式新段階」,「戸水B式－尾張IV-3－栗林3式」という併行関係を提示した〔石川2002b〕。唐古・鍵遺跡で嶺田式もしくは阿島式の壺破片が大和II-3と共伴したことを受け、かつて濃尾III-3と阿島式を併行させていた点〔石川1996:157頁〕を濃尾II-3期からIII-1期の中間期併行に改めている。また、播磨から西摂のIII-1期の壺片と中里式（池上式に併行）が共伴した新たな編年材料を採用した。その結果、2002年の石川編年では中部日本の型式は全体的に2段階近く遡上する結果となった。

そのほか、栗林式と小松式の併行関係に触れた久田正弘〔久田1999〕・坂上有紀〔坂上2000〕・笹沢正史〔笹沢2006・2007〕の論考がある。いずれも佐渡の平田遺跡と上越の吹上遺跡という新たな発見により提示された研究成果である。それについては後述したい。

2. 問題の所在

栗林式とその前段階の編年を安藤・石川の見解にもとづき整理すると、「松節地点木棺墓資料→栗林1（篠ノ井遺跡群高速道資料）→栗林1式（牟礼バイパスD地点）→栗林2式古・新→栗林3式」という変遷となる。土器整形技法の差違・器種組成・装飾帯構成の変遷により裏打ちされたその序列に筆者も異論はない。

しかし、これまでの編年研究に課題が全くないわけではない。問題点を挙げれば、①具体的な論証を伴った栗林式編年案の作成と、②栗林式土器と他型式との併行関係である。①については、1999年の寺島編年の栗林式中段階古相・中段階新相・新段階の資料の位置づけには異論はないものの、その変遷の論証は必ずしも充分とはいえず、装飾帯構成の変遷により寺島編年の妥当性を指摘した石川編年でも、論文の目的が栗林式成立期の問題を解決するものであるためであろうが、寺島編年の中段階古相から新段階（石川編年栗林2式古段階から栗林3式）に関する説明は装飾帯構成に変遷を簡潔に触れているに留まっている。特に「栗林式中段階・栗林2式」とされた段階は細分とその論証という課題が残されていると考えている。

また②については、上越市吹上遺跡出土の栗林式土器に栗林1式が含まれ、なおかつ小松式との土坑内にて共伴する事例が明確となった今、吹上資料を介して改めて「石川－富山－新潟－長野盆地南部」の併行関係を再論すべきと考える。そこでの併行関係は栗林式土器分布圏の信濃・甲斐・上野のみならず、栗林式土器が外来系土器として分布する北武蔵・南関東・駿河の他型式の併行関係へも影響を及ぼす。先学が指摘するように、弥生社会・文化研究という総合的研究を射程とするならば、まず土器型式の設定や細分、広域編年網の作成は必須である。

さらに編年研究の問題点以上に、分布論的研究の課題点も挙げたい。近年、北陸各地における栗林式土器の新資料が増加し、なおかつ信濃での小松式要素をもつ土器の存在が指摘されている〔久

田1999, 石川2002a]。笹沢・石川が指摘した栗林式土器分布圏の動態は今なお有効であるが、分布の動態の歴史的背景の、特に人の「うごき」の具体化が未解決の課題である。ただし、歴史的背景の解明となると、より多くの考古資料の分析を踏まえつつ議論すべき課題でもある。まず本稿では歴史的背景解明のための支柱的分析のひとつの土器論に議論を限定し、分布の動態の背景を追究する手がかりを得ることにしたい。

②……………栗林式土器編年再考

本稿にて栗林式編年を再考するにあたり、まず時間の単位となりうる内容が豊富な資料を集め、その特徴を把握することから始めたい。そこでは資料の同時期性がある程度保証されている必要があるため、同一遺構内や同一の層位出土の土器を対象とするように努める。そうした時間の単位となりうる資料を「単位資料⁽⁴⁾」と本稿では呼ぶことにする。単位資料を比較検討し、類似点・相違点を指摘しながら壺・甕の装飾や整形技法の変遷を明らかにしていく。

さて、単位資料を選定するときに、地域性や遺跡差が可能な限り排除できるよう、狭い空間的範囲の中から選択するのは一般的な手法である。先学により、篠ノ井遺跡群高速道地点・牟礼パイパスD地点・浅川端・平柴平・本堀など各遺跡の住居跡・土坑・溝が単位資料として登場するが、長野盆地南部内の別々の遺跡で単位資料を点検する有効性を見つめつつも、個別遺跡間の比較では型式断続の不安が多少なりとも存在するため、他方で時間的連続性の高い単位資料が豊富な一遺跡で細分を検討することも必要と考える。また、問題の所在として指摘した栗林2式の細分をする上でも、当該期の土器が豊富に出土する有効な遺跡でもなくてはならない。そうした問題解決のための資料が長野盆地南部最大の集落遺跡である松原遺跡には豊富に存在する。

以下、松原遺跡出土土器〔青木・賛田ほか1998・2000, 飯島・寺島1993〕の単位資料を分析し、松原遺跡の栗林式土器の段階設定をすることから始めよう。

1. 松原遺跡の単位資料集成

千曲川右岸地域で最も単位資料が豊富な遺跡が300棟以上の住居跡を検出した松原遺跡高速道地点である。1遺跡で栗林式土器の大半の時期をカバーできる遺跡である。以下、SB・SK資料は高速道地点資料、SA資料は長野市のIII次調査資料に該当する。

SB450出土土器(図2)は球形胴部で2+4装飾帯をもつ壺(1)、口縁の外反度が弱く口縁部から頸部の間に縦羽状文が施文される甕(2・3)、甕胴部に列点が付加されるもの(2・3・4・6)がある。甕の横走羽状文の施文幅が狭いのが特徴で、胴部下部にまでは及ばない。6の縦羽状文甕は型式学的にはやや後出する。7の台付甕は胴部にコの字重ね文が配置され、間に列点が付加される。SB450は覆土上層から床面まで厚さ10cmに満たない。

SB260(図2)は床面直上より20個体が出土した良好な単位資料である。壺は細頸のものが主体である。壺口縁の形態は短い口縁部で外反が弱いもの(10・11)が目立ち、8のようにやや強く外方へ開く壺は極わずかである。2+4装飾帯をもつ個体が13個体中7個体は確実にあり、その比率が高い。ただし、2+4装飾帯の幅が均等ではなく広狭が目立ち、8・10は2+4装飾帯間に広い無文帯が貫入している。また10のように2+4装飾帯の痕跡である篋描沈線は残るが、縄文施文が欠落するものも含まれる。このように壺は2+4装飾帯とその手法が全体的に崩れはじめており、2+4装飾

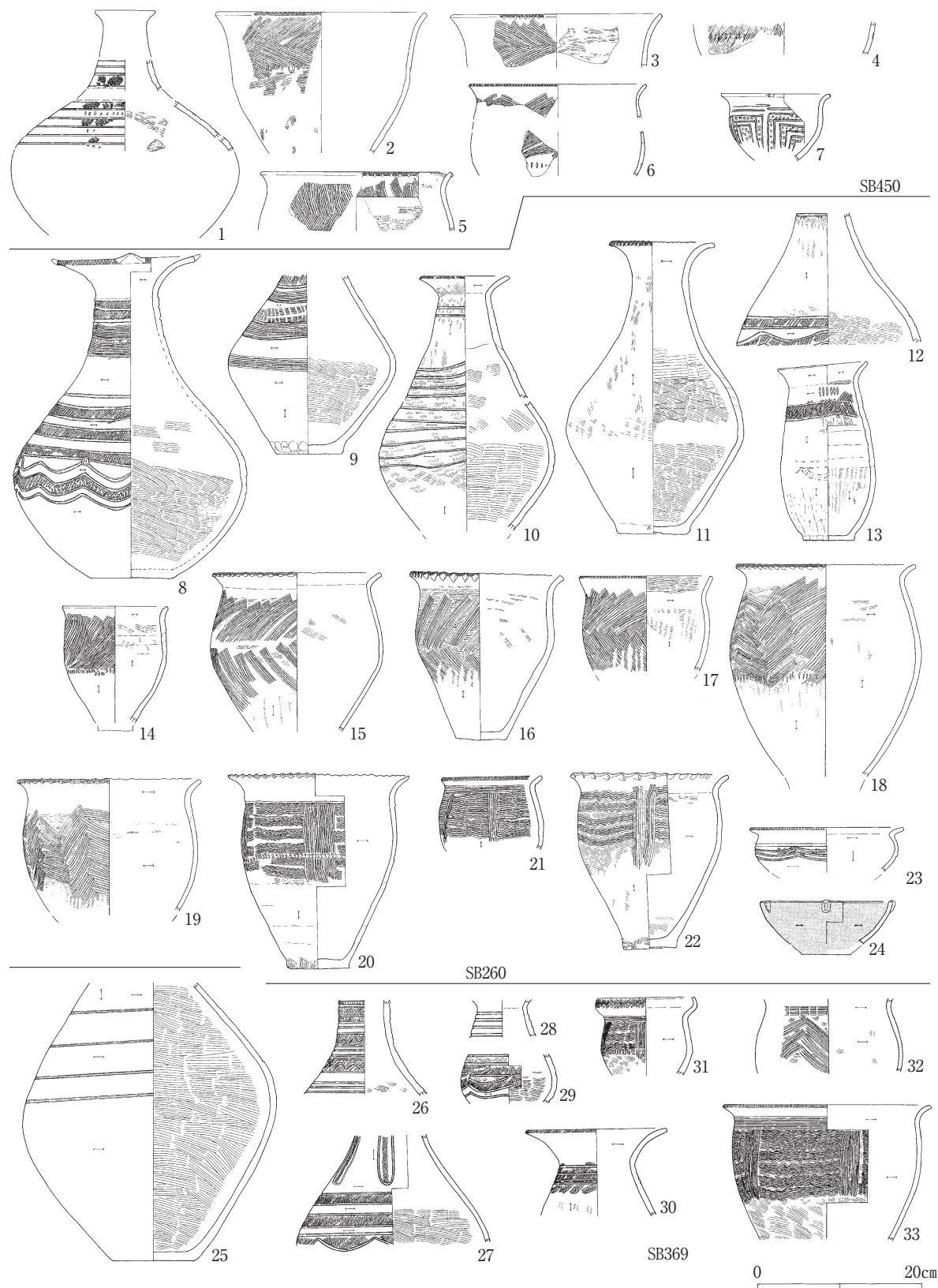


図2 松原遺跡出土の単位資料(1)SB450・260・369

帯の痕跡を一部留めるのみの資料も見受けられる。また5装飾帯に注目すると、8の連弧文では縄文帯のなかに刺突が付加されており、図2-1ではそれが刺突帯と縄文帯の重畳であった。そうした手法の変化は5装飾帯の幅が狭まることによる変化と理解できる。

甕の特徴は、口縁部に最大径をもつものが目立ちながらも頸部の屈曲と胴部の張りが顕著であり、頸部の部分は一部14のように頸部付近まで施文が達しているものが存在するものの、無文化がほぼ完了していることが特徴である。頸部文様の比率は半数に届かず低い。胴部文様は、施文部位の幅が胴部上半のみならず下半にまで明瞭に及び、横走羽状文（15・16・17）のみならず縦走羽状文（18・19）と縦スリットを伴う波状文甕（20・21・22）が加わる。そのほか器種として有文鉢（23）・赤彩鉢（24）・筒形土器（13）がある。

SB369（図2）は住居跡床面から覆土下層で出土が見られた。壺には細頸壺が少なくとも2点（26・27）含まれる。装飾帯構成は2+4装飾帯（25・26）があり、27は2装飾帯と4装飾帯の間隔がさほど広くはなく、短い舌状文が3装飾帯に施文される。5装飾帯の連弧文は縄文帯と無文帯の交互施文である（27・29）。

甕は素口縁と受口状口縁があり、32のように胴部に最大径のあるものは少数である。受口状口縁部は屈曲が明瞭な上、内湾する（31）。頸部文様は直線文と簾状文、胴部文様は間隔が密で小振幅の波状文+縦スリット（33）またそれに列点文が付加された例（31）がある。

SK156（図3）は土坑内西側から土器が集中して出土した。壺の器形は胴部中位に最大径のあるものがおよそ半数あり、それには胴部球形のものが含まれる（3・4）。装飾帯構成は2+4装飾帯が半数近くあり、一方で頸部装飾帯のみの壺が5に限られる。文様では1のように2+4装飾帯でありながら縄文が完全に欠落する例、6のように胴部状半無文部の拡大は認められつつも、直接文と櫛歯刺突文が重層する例がある。5装飾帯の文様は、2のような重山形文が縄文帯と無文帯の交互施文で成り立つものや、3のように太描沈線で区画された内部を櫛描文で重点する手法が認められるいっぽう、1・4のように縄文が欠落した連弧文が存在する。3の胴部上半には短い舌状文が施文される。

甕は、胴部に最大径をもつ比率が低く、口縁部か、あるいは口縁部と胴部かほぼ同等の最大径をもつ甕が大多数である。受口状口縁は上方に向けて垂直に屈曲する（11）。頸部文様は9のように等間隔止めの簾状文がみられるが、頸部に単体で文様を施文する比率自体、極めて低い。胴部文様は横走羽状文3点（8）、縦走羽状文1点、縦スリットを伴う大振幅波状文3点（11）、小振幅波状文1点（10）であり、波状文は全て間隔が広い。そのほか器種に鉢・短頸壺がある。

SA125（図3）では、住居跡西部の一部で土器が集中して出土した。壺は、口縁部の外反の度合が弱く、また口縁部が短いのが特徴である。壺胴部最大径の位置は、胴部中位と下位にそれぞれ半々である。胴部中位に最大径をもつものが低い割合ながらみられる。装飾帯構成はわかるもので2+4装飾帯が含まれ（13・14）、12の胴部無文帯の拡大傾向はSB260・SK156と共通する。また17の5装飾帯の重三角文は無文帯と列点帯が交互が概ね交互に施文される。

甕は胴部に最大径のあるものが約1/3あり、大多数は口縁部に最大径が認められる。受口状口縁は、20のように屈曲が明瞭で垂直に立ち上げる。頸部の単帯文様は直線文が2点で、その割合は低い。19・20の胴部には列点文が横走し、さらに20には段が認められる。そのほか器種に高坏・無頸壺・甗がある。

SB1135出土土器（図4）は、住居跡床面からやや浮いた位置で水平堆積をなし、破片が多いもの

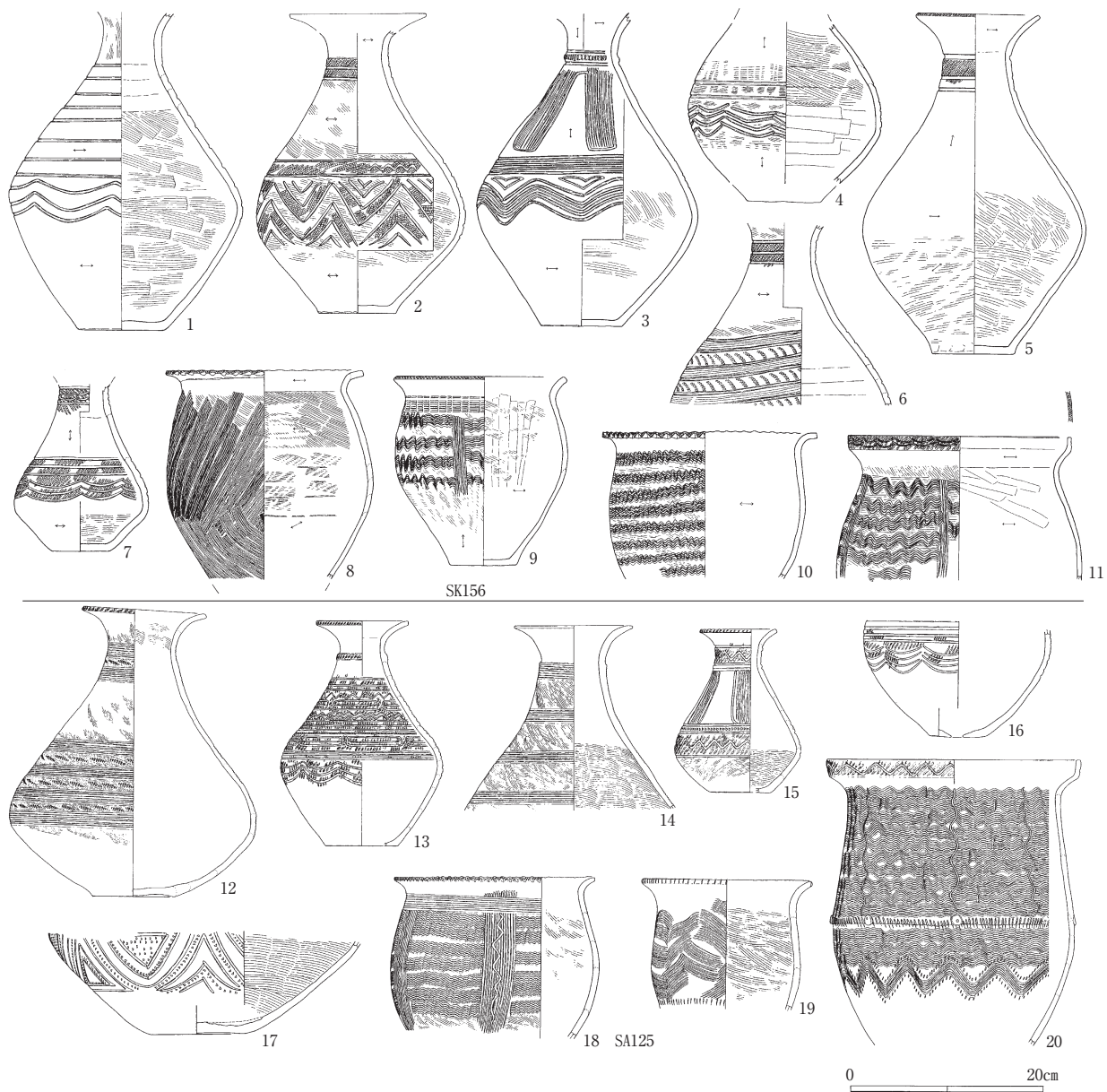


図3 松原遺跡出土の単位資料(2)SK156・SA125

の完形個体への復元率が極めて高い。廃棄前に破碎され投棄された可能性が高い土器群と報告されている。

壺口縁部の外反の度合いはSB260より強いものが占め、5のように受口状口縁壺が伴う。いっぽう4のように細頸のものがわずかに残存する。また8・9のように胴部下半に最大径が認められる資料と、4のよう胴部が球形となるもの、1・2・3のように胴部中位より最大径が存在するものが混在する。装飾帯構成では[2+4・5] 類型(6)、[2・3・4・5] 類型(9)、[2・0・4・5] (7・8)の各類型がわずか1点から2点程度で、そのほかは[2・0・0・0] 類型が占める。壺頸部に装飾が集中している点が顕著であり、2のように頸部に簾状文施文も認められる。また5装飾帯の重山形文に刺突が付加される9や、幅広の櫛歯により描かれた山形文を伴う重三角文の6はその施文幅も広く、単位文様もしっかりしている。ただし5装飾帯の連弧文系文様はSB260例より簡略化が進み、連弧文の弦に相当する部分が直線気味となっている(7・8)。

甕の器形は口縁部に最大径があり胴が張らないもの(12)、口縁部径と胴部最大径がほぼ等しいもの(13)、明らかに胴部に最大径があるもの(14)が混在する。SB450に比べ、胴部が最大径となる比率が高い。そして胴部文様では縦走羽状文が大多数を占め、頸部への直線文・波状文・簾状文の施文率がこれまでみた単位資料と比べ明らかに上昇している。器種ではそのほか赤彩壺(11)・高坏(10)・蓋・鉢がある。

SB1102(図4)はSB1135と類似した内容の土器を出土した。床面より10~20cm上の覆土中から集中して土器が出土した。

壺は、口縁部の外反の度合いが強い壺が多数を占める。壺の胴部最大径は15を除き胴部中位もしくはそれに近い位置にあり、16のように球形のものが含まれる。装飾帯に注目すると、[2・0・0・0] 類型が目立ち、15・18のように2a装飾帯が成立した壺が伴う。5装飾帯の連弧文は、17のように連弧が天地逆となり、縄文地文の上に簡略的に施文されているものがあるいっぽう、16のようにしっかりと連弧文が幅広の装飾帯にある。ただし刺突は欠落している。15の重山形文は幅広の装飾帯に施文され、さほど簡略化は窺えない。

甕は、胴部文様で縦羽状文の比率が高く、頸部淡々文様の施文率が中程度である。また縦スリット文様がやや形骸化した21の甕がある。そのほか器種として甗・赤彩壺・鉢・鉢・高坏がある。

SB1142出土土器(図4)は住居跡中央に列状にまとまって出土した。壺では胴部欠損資料が多いものの、胴部最大径が胴部下位にあるものが多くみられる。細頸壺の例として25などの2例があるが、その他多くは口縁部の外反の度合いが強く、また口縁部が長い資料である。装飾帯構成は2+4装飾帯構成が2点あり(26・27)、また[2・3・4・5] 類型が3点(24)認められるが、断片資料ながらも[2・0・4・5] (22)・[2・0・0・0] の各類型の比率が半数を超える。全体的に胴部上半の無文化が明瞭である。2+4装飾帯構成をもつ26・27は縄文帯と無文帯の交互配列の崩れや帯幅の不均一性からより新しい様相である。なお、22のわずかに残存した5装飾帯には縄文帯と無文帯が交互に配列された重三角文が確認でき、24の5装飾帯は縄文地文の施文の後、篋描の連弧文を施文した例である。

甕は胴部に最大径のあるものが約半数あり(28)、口縁部に最大径があるものなどと拮抗している。縦羽状文の比率は高く、また頸部の単帯文様の施文比率も高い。「コの字重ね文」台付甕は縄文地文が欠落し、受口状口縁部は屈曲ののち、垂直に立ち上がる。そのほか器種として鉢・高坏がある。

SB246(図5)は焼失住居であり、覆土最下層の4層と3層に土器がブロック状に集中して出土した。壺は、細頸壺がみられなくなり、口縁部の外反の度合いはSB1102・1135と同様に強い一群が占

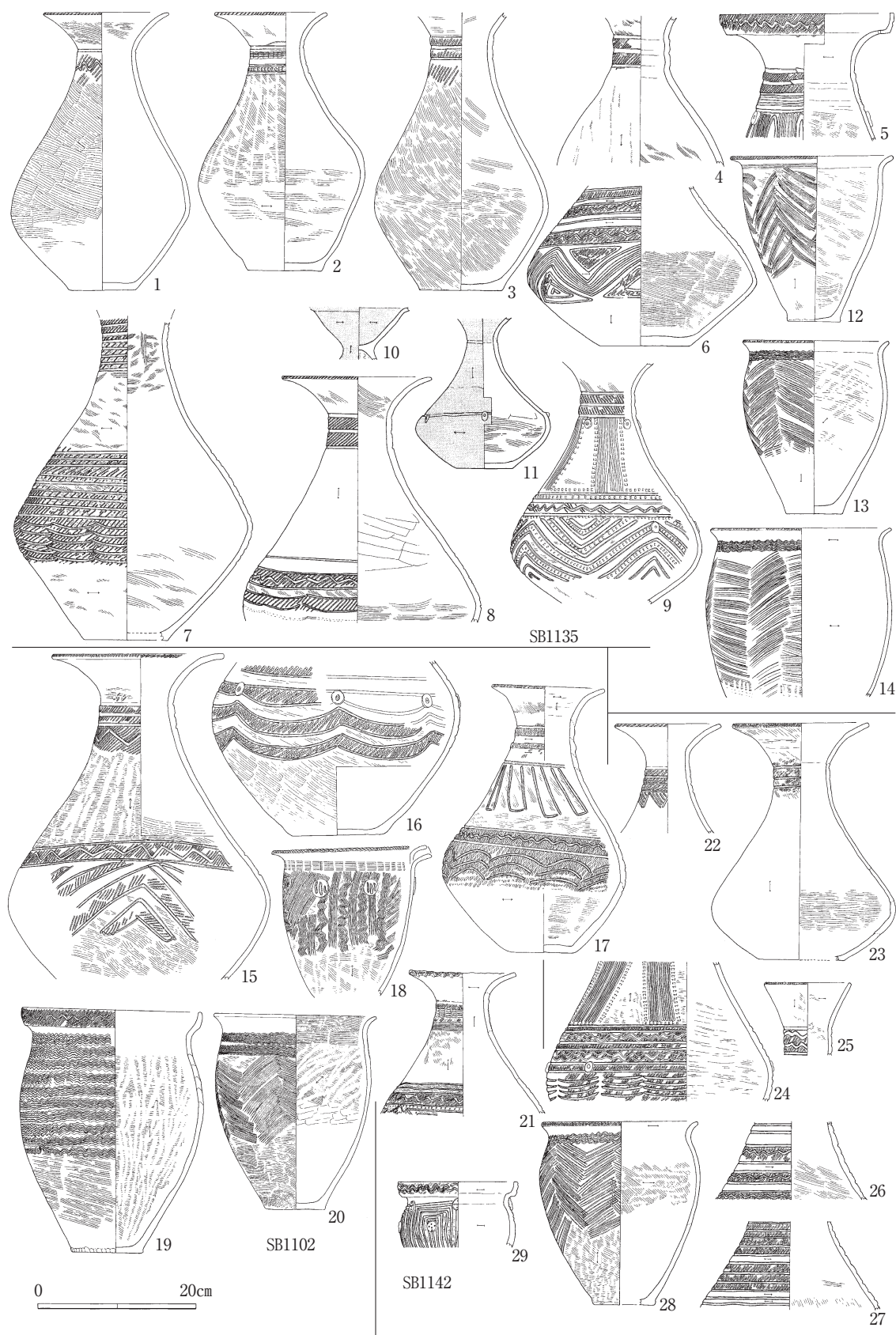


図4 松原遺跡出土の単位資料(3)SB1135・1102・1142

める。また7のように壺の受口状口縁部は屈曲後、垂直に立ち上がり、外反する。装飾帯構成は[2・3・4・5] 類型(1・2)と[2・0・4・5] 類型(4)・[2・0・0・0] 類型(5~8)があり、3の小形壺1例を除き2+4装飾帯はない。赤彩壺も比較的目立つ。3装飾帯の舌状文は明瞭だが、4・5装飾帯の簡略化が目立つ(1・2)。1は、4装飾帯が幅狭となった結果、沈線のみ施文となり、5装飾帯の連弧文の施文は地文の縄文上に連弧文を施文する。2は1と同様な傾向が4・5装飾帯にみられ、5装飾帯は地文の縄文が欠落する上に元来重三角文の単位文様であったものが横に連結し、一つの文様の帯へと変化している。

甕は胴部に最大径のあるものが圧倒的多数を占め、頸部文様は小振幅波状文1点、大振幅波状文4点、直線文1点、無文4点である。胴部文様は縦走羽状文(9)が大多数で、波状文・横走羽状文・斜格子文は各1点に留まる。そのほか器種は注口土器と高坏が出土した。

SB319(図5)は住居跡中央部の覆土2層から集中して土器が出土した。壺には細頸壺はなく、太頸壺が含まれる。装飾帯構成は[2・2a・0・0・0] 類型(11)、[2・0・4・5] 類型(10)、[0・0・0・0] 類型があり、2+4装飾帯はない。10の5装飾帯の連弧文は縄文地文が欠落し、装飾帯幅も狭く、文様の簡略化が進んでいる。

出土した甕は、出土がわずかで全体像が捉えにくい、9の縦羽状文甕の羽状の単位が粗雑化する点、13・14の「コの字重ね文」台付甕は縄文地文が欠落する点でより新しい例と理解でき、また14の場合、受口部の屈曲が弱い点もその見解を支持する属性である。そのほか器種として高坏・鉢が出土した。

SB360(図5)では住居跡床面直上から押しつぶされた状態で土器が出土した。壺は受口状が2点、素口縁が少なくとも2点あり、細頸壺は認められない。15・16が示すように、壺の受口状口縁部の屈曲は弱く、外反する。装飾帯構成は判明する個体の範囲で、1点を除き[2・0・0・0] 類型に限られる。頸部の文様は縄文地文に篋描沈線あるいは波状文を施文するもののほか、16・18のように篋描簾状文あるいは直線文を施文する例が少なからず認められる点が注目点である。

甕は平底・台付があり、数個体が口縁部に最大径もつが、半数以上は口縁部・胴部に最大径か、あるいは胴部に最大径がある。頸部文様は直線文1点、波状文4点、等間隔簾状文5点、無文2点の割合であり、胴部文様は縦走波状文7点、横走羽状文1点、斜格子1点、間隔のある大振幅波状文3点の割合で、縦羽状文が目立つ(19)。縦羽状文は施文単位の間隔が開き、粗雑観を増す。そのほか器種には高坏・短頸壺・無頸壺(21)がある。

SB364(図5)は覆土上層から土器の出土が多い。壺は[2・3・4・5] 類型が2点(22)、[2・2a・0・0・0] 類型が2点(26)、[2・0・0・0] 類型が3点(24・25)出土した。2+4装飾帯構成は認められない。2装飾帯は縄文地文に沈線・波状文を付加する一般的な手法のほか、24・25のように篋描を用いた擬似簾状文が認められる。22はやや小形の壺だが、5装飾帯から縄文地文が欠け、重三角文は三角の一辺が閉じず、簡略化されている。甕は破片資料のみだが、胴部の文様には縦走羽状文が認められる。そのほか短頸壺・高坏・鉢が出土した。

SB1160(図6)では住居跡西側の覆土中層から上層にかけてブロック状に土器が出土した。壺は口縁部が欠損しているものが多いが、胴部下半に最大径のあるものが目立つ。装飾帯構成は[2・0・4・5] (3・4)・[2・0・0・0] (1・2)の各類型が認められ、3装飾帯をもつ土器は欠落する。全体的に無文化が顕著であり、1・2・3のように縄文地文が欠落し、篋描沈線のみで文様が描写されることが多い。また3・4の5装飾帯では単位文様の連結と横帯化がより一層顕著である。

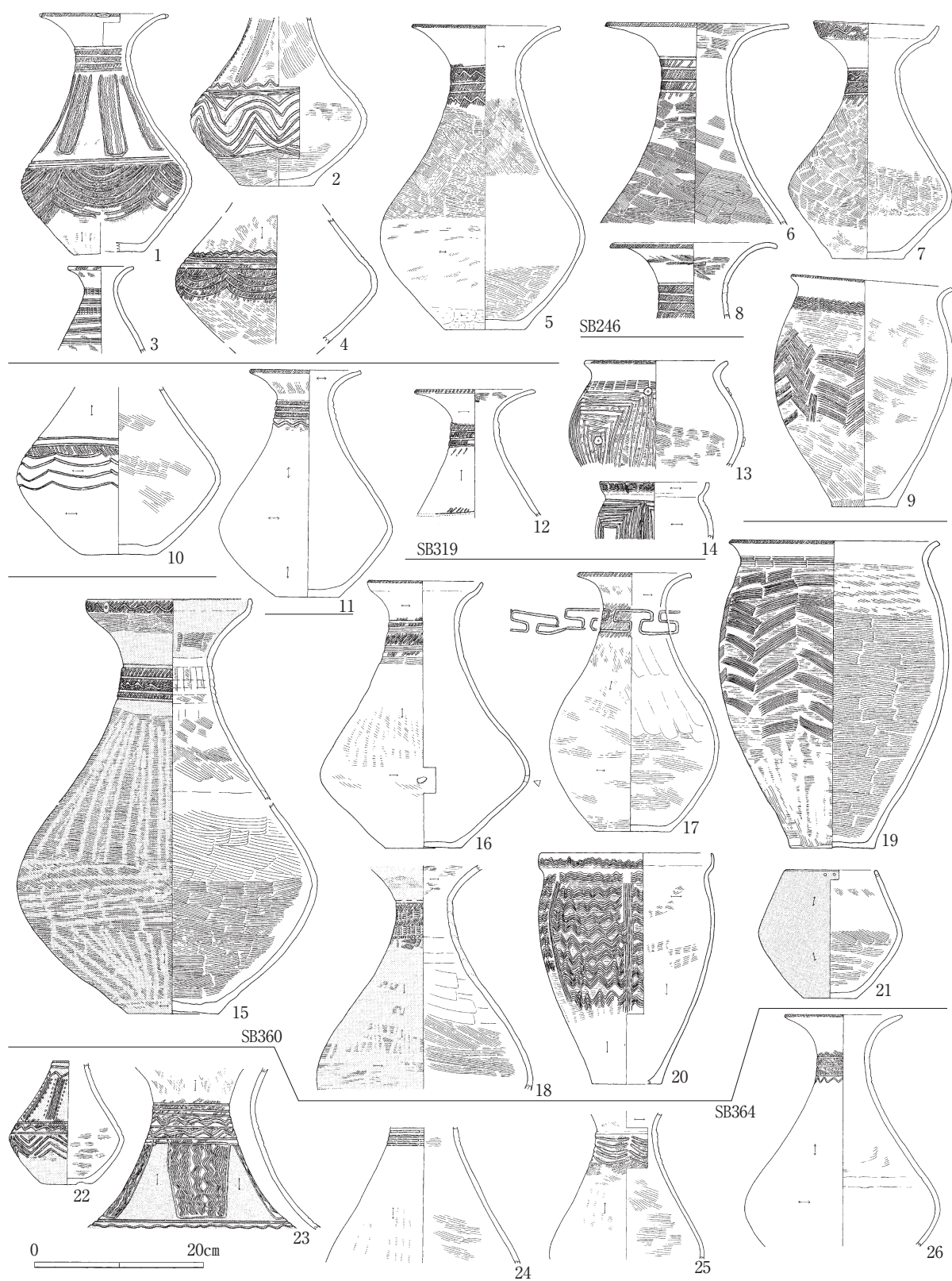


図5 松原遺跡出土の単位資料(4)SB246・319・360・364

甕は、胴部に最大径があるものが全てを占め、受口状口縁甕も2点出土した。7の受口状口縁部は屈曲がわずかに認められる程度で、頸部から緩やかに湾曲することで受口状口縁部を形成する。胴部文様は縦羽状文が3点（6・7）、横羽状文が4点（5）と、横羽状文の存在が比較的明瞭である。頸部文様は直線文1点、波状文3点、簾状文1点、無文1点、不明1点である。そのほか器種に高坏・鉢・蓋がある。

SK191（図6）からは壺・甕13個体が土坑最下層の3層から出土した。壺は、11・12のように大方が胴部下半に最大径をもち、口縁部の短い壺がわずかに1点含まれるが、大半は外反の度合が強く、また口縁部も長い。10・12の受口状口縁部は屈曲がわずかで、13に至っては屈曲が消滅し、口縁先端の内湾という痕跡を留める程度である。また11・13のように細頸壺は、少数派ではあるが本段階まで継続する。装飾帯構成は[2・2a・3・4・0]（8）・[2・2a・0・0・5]（12）・[2・0・0・0]（11・13）・[0・0・0・0]の各類型がある。2a装飾帯には篋描による充填文様が、2装飾帯には篋描による擬似簾状文（8・10）・矢羽根文（9）・波状文（12・13）がある。縄文施文の比率は壺12点中6点とやや低い。8の3装飾帯の舌状文が篋描の外郭線のみとなる点、また全体の縄文施文率の割合が中程度となる点、2a装飾帯の文様が4・5装飾帯に繰り返される点（8・12）が特徴的である。

甕はわずか1点の出土のため、全体像を窺うことはできないが、胴部に最大径のある受口状口縁甕が出土した（14）。受口状口縁部は屈曲が認められず、頸部から緩やかな内湾することで受口状口縁部を形成している。また頸部文様は等間隔簾状文であり、胴部文様は横羽状文である。

2. 栗林式土器の変遷の道筋

これまでの単位資料の比較検討を踏まえ、特に重要な属性であると確認できた壺の器形・装飾帯・文様、甕の器形・器面調整・文様について組列を検討することにした。

①壺の器形・装飾帯・文様

壺の器形は口縁部外反の度合、口縁部の長さ、受口状口縁部の屈曲度と立ち上がりのあり方、胴部最大径の位置の4属性に顕著な変化がみられた。SB450出土土器では口縁部外反の度合は弱く、口縁部が短い。また胴部最大径は中位にあり、やや球状胴部気味で、頸の細い細頸壺である。いっぽうSB260では、口縁部外反が弱く口縁部が短い壺と細頸壺とともに、明らかに口縁部の外反の度合が高く、口縁部も長い壺が共伴する。口縁部の横ナデ処理の発達が生じた外反の度合と長さを助長させていることは予測がつく。また、胴部下半に最大径のある土器もSB260には一定量伴う。SK156では1点ないし2点を除き9個体全てが胴部中位に最大径がある。

SB1102・SB1135・SB1142では、胴部下半に最大径のある壺が、胴部中位に最大径のある壺を明らかに上回る。そして口縁部の外反の度合が高く、口縁部が長い壺が目立つ。細頸壺は比率が下がりながらも共伴する。また、壺の受口状口縁部は屈曲が明瞭で、外反せず垂直に直立する。対照的に、SB246・SB319・SB360・SB364・SK191の壺は、胴部下半に最大径があるものが高程度となる。口縁部の外反の度合はさらに強まり、口縁部先端部の傾きが平坦になるほどまで発達する場合が多い。受口状口縁部は屈曲がやや弱まり、口縁部先端は外反気味となる。

装飾帯構成については、SB450で2+4装飾帯構成がみられ、SB260ではその比率は中程度ながら顕著である。またSB260では2+4装飾帯の装飾帯の幅が拡大傾向にあり、また帯と帯の間隔が不整となっている。SB450の2+4装飾帯の変形であることは容易に予測がつく。SB369やSA125でも比

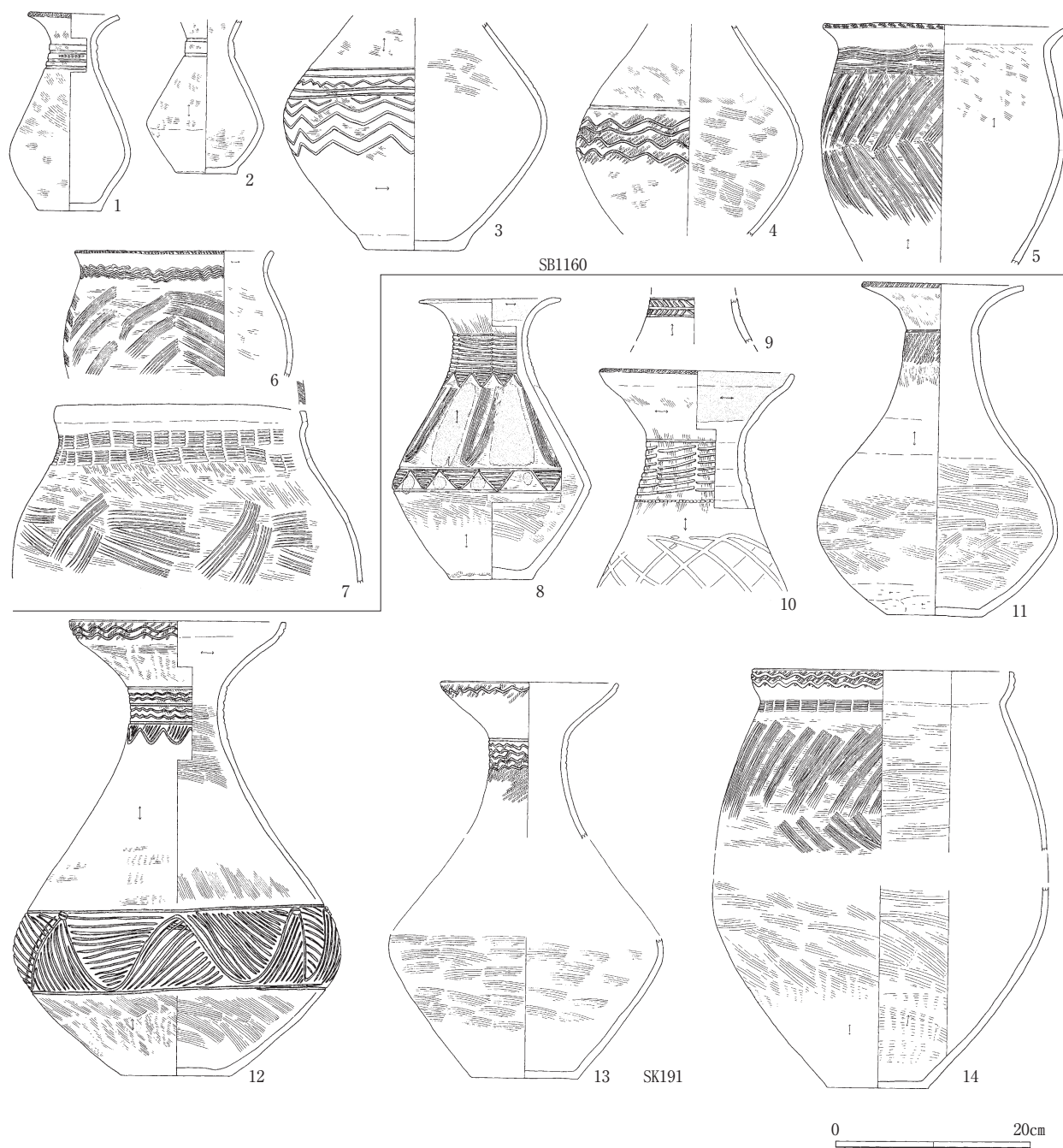


図6 松原遺跡出土の単位資料(5)SB1160・SK191

率はSB260とほぼ同様であり、 $[2\cdot0\cdot4\cdot0] \cdot [2\cdot0\cdot0\cdot0]$ の各類型の割合は低い。それら二つの装飾帯構成は、SB1135やSB246・SB360・SB364などで確実に高い比率を占める。

これまでの属性の検討で、器形・装飾帯構成の変化からある程度古相と新相の土器を推定することが可能である。2a装飾帯は古相・新相のいずれの土器にも確認できるものであるが、新相により頻度高く認められる。

では文様はどうか。栗林式の壺は基本的に縄文地文に篋描沈線を施文し、器面を装飾する。器面からの縄文欠落の割合が顕在化するのにはSB1160・SK191の資料であり、ここでは舌状文の形骸化等も見られた。また篋描による擬似簾状文の施文はSB360・SB364にあり、SK191では壺の頸部の2装飾帯に縄文地文を伴わない擬似簾状文に変化する。擬似簾状文の存在は新相の土器に限られる。また、SK191では2a文様帯の鋸歯沈線文が胴部の4装飾帯ないし5装飾帯にも繰り返し施文され、特徴的なあり方を示す。また、SK191の矢羽根文は吉田式へのつながりを示唆する属性であり、栗林式の最新相を示す属性である。

さて、頸部への櫛描文の採用は、笹沢のいう「百瀬式」の影響とも考えられるが、在地要素としても系統を追うことは可能である。例えばSB260の図2-9のように、2+4装飾帯を構成する櫛描直線文・簾状文が、無文帯の貫入により崩壊・一部残存することで、SB260出土の図2-8、SB1135出土の図4-2、SB360出土の図5-16の例が登場する。したがって、櫛描文自体は栗林式の古相へも系統を追うことが可能であるため、一概には新相の要素とは決められない。

次に5装飾帯の単位文様の変遷はどうか。そこには連弧文・重三角文・重山形文・複合鋸歯文・変形工字文が施文されるが、施文の多くを占めるのは前三者である。

連弧文の変化からみると、SB260の図2-8は縄文帯と無文帯の交互配列とともに縄文帯内に列点文が付加される。SB260と同じく古相のSB369出土土器27も交互配列を採用すると推定される。それら住居跡よりやや新しい時期のSB1102出土図4-16でも、縄文帯と無文帯の交互配列は明瞭である。SB1135の8も装飾帯幅は狭いが交互配列例とみてよいであろう。

しかし、より新相のSB246出土土器では、図5-1・4のように交互配列を採用せず、縄文地文施文の後に連弧文を施文する手法が顕著であり、2に至っては縄文地文が欠落する。5装飾帯上の連弧文において交互配列の消滅するのはSK156の図3-4が示すように、やや古相の土器群の段階から始まっているが、図3-2のように5装飾帯の山形文にまだ交互配列が明瞭であることを考慮すれば、SK156とSB246の間に時間差を認めることは妥当であろう。

では5装飾帯の頻出する重三角文・山形文の変化はどうか。縄文の有無、重三角文のかたちの変化という観点から分析すると、古相の土器に相当するSA125では図3-17のように重三角文に沈線で区画される列点帯と無文帯がほぼ交互に配列されており、重三角文と同系統の山形文例でSK156の2やSB1102の図4-15でも交互配列は明瞭である。SB1135の6では幅広櫛条痕帯を中央に配置し、その上下に縄文帯のある重三角文を配列する古手の手法がみられ、9は列点帯と無文帯を交互に重畳した山形文である。

そうした異なる装飾の帯を交互に配列する手法が崩れ、縄文の欠落が一層顕著となるのがSB246など新相の土器である。図5-2では装飾帯幅は広いものの、重三角文が横方向に連結し横帯化が著しく、また縄文が欠落する。そうした様相はさらに新相の土器を出土したSB1160出土土器で明瞭である。図6-3は重三角文あるいは山形文の横方向の連結が著しく、4は縄文地文を伴う例だが3と同様のあり方が推定され、いずれも横帯化が著しい。

②甕の器形・器面調整・文様

次に甕の属性の変遷を検討する。器形の変化から点検すると、胴部最大径の位置に明瞭な変化が認められる。SB260・SB369・SA125・SK156では胴部が最大径になる甕の比率は全体的に低いが、SB1135・SB246・SB360・SB1160では胴部に最大径のある甕が、口縁部に最大径かあるいは口縁部と胴部がほぼ同じ径の甕を明らかに上回る。胴部最大径の位置の比率の変化は、壺の古相・新相の流れと整合する。なお受口状口縁甕は松原遺跡の古相の土器に既に登場し、新相の土器まで見られる。

胴部文様では、縦羽状文と頸部単帯文様の比率、胴部中位への列点付加の有無において変化が顕著である。縦羽状文の比率はSB260・SB369・SA125・SK156出土の古相の土器では全く無しか、存在しても低い割合であるのが、SB1135・SB1142・SB360・SB1160出土の新相の土器で比率が高い。そうした変化とともに、頸部単帯文様として直線文・波状文・簾状文を施文する比率がSB1135のほかSB246やSB360などで高まる傾向を確認できる。また口唇部の縄文施文は栗林式成立期当初からの一般的な手法であるが、新相の土器でもその手法は多くの甕で確認できる。

いっぽう、古相の土器に特徴的にみられるのは胴部中位の列点と「波状文+縦スリット」の2属性である。新相の土器に全くないわけではないが、頻度は確実に古相の土器で高い。

このように甕にも器形の古相・新相に対応する胴部文様・頸部文様の変化が認められた。なお、胴部に間隔の開く振幅の大きい波状文を施文する手法は、SK156で中程度に見られた以外、一部の新相の土器で若干認められるだけで、事例にやや不足の観がある。だが、型式学的には新出する手法であることは予測がつくため、新相の特徴として理解することは許されよう。

3. 長野盆地南部の栗林式土器の段階区分

以上の分析の結果を表1の属性集計に示す。それを踏まえ、単位資料の分析を行った松原遺跡にまず段階設定を試み、長野盆地南部の諸遺跡との対比の上、長野盆地南部の栗林式土器編年を確立する。

①松原Ⅰ期

SB450住居跡出土土器が相当する。松原遺跡では本住居跡以外に該当する資料が明らかではない。壺の出土は1点と限られているが、それは胴部が球形の細頸壺で、2+4装飾帯構成をもつ。甕は口縁部に最大径があるものにほぼ限られ、口縁部外反の度合も弱い。また口縁部直下の無文化が徹底されていないものが散見される。胴部文様は大方横羽状文に限られ、その施文範囲も胴部上半に限定され、狭い。胴部中位の列点の施文率は高い。またコの字重ね文の帯内に列点を充填する台付甕があり、その後充填は省略されることを考えると、本例は最も古相の土器であることがわかる。

②松原Ⅱ期

SB260・SB369・SK156・SA125の単位資料が該当する。そのほかSB351（図7-2）・SB1146（図8-14）・SA131（図7-7）も含めることができる。壺は、胴部最大径が胴部中位に顕著であり、細頸壺を伴う。また2+4装飾帯構成が半数を占め、胴部上半が無文である割合は低い。ただし2+4装飾帯の帯幅に不均一さが目立ち始め、3装飾帯である胴部上半への無文帯の貫入が明らかである。また縄文帯と無文帯がかならずしも交互に配列されることもない。5装飾帯の連弧文・重三角文・山

表1 松原遺跡の単位資料と属性

時期	単位資料	壺													甕							
		胸部最大径が胸部中位の比率	2＋4装飾帯比率	[2・0・0・0]・[2・0・0・4・0]の比率	縄文施文率	2a装飾帯	2装飾帯に擬似簾状文	2装飾帯に櫛描文	5装飾帯の連弧文・縄文・無文交互配列	縄文地文↓連弧文の施文	5装飾帯連弧文からの縄文欠落	5装飾帯の重三角文・重山形文（縄文欠有）	5装飾帯の重三角文・重山形文（縄文欠）	5装飾帯の重三角文・重山形文（縄文欠・横連結）	胸部に最大径比率	受口状口縁	頸部単帯文様の施文率	縦スリット共伴	胸部列点文の付加	縦走羽状文の比率	間隔あく大振幅波状文比率	縄文・文様付加地文コの字重文
松原Ⅰ期	SB450	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－					●			
松原Ⅱ期	SB260	中	中	低	高				●列						低		低	●	●	低		－
	SB369	高	中	低	高				●						中	●	中	●	●			－
	SB1146		中	低	高	●							●		－	－	－	－	－	－	－	－
	SA125	中	中	低	高					●		●列			低	●	低	●	●	低		－
	SK156	中	中	低	高					●	●	●			低	●	低	●		低	中	－
松原Ⅲ期	SB1102	低		高	高	●			●			●			中	●	中	●		高		－
	SB1135	低	低	高	高			●	●			●列			高	●	高			高	低	－
	SB1142	低	低	高	高			●	●	●					中	●	高			高		
松原Ⅳ期	SB246		低	高	高	●								●	高		高			高		－
	SB319			高	高	●					●						－					
	SB360			高	高	●	●	●							高	●	高	●		高	低	－
	SB364			高	高	●	●						●			－	－	－		高	不明	－
松原Ⅴ期	SB1160	低		高	低									●	高	●	高			中		－
	SK191	低		高	中	●	●								－	－	－	－	－	－	－	－

—：母数不足のため対象外
 低：1～39%
 中：40～59%
 高：60～100%
 列：列点文の付加あり
 ●：属性あり
 空欄：属性なし

形文のいずれも縄文帯と無文帯が交互に配列されることが基本であるが、若干、その簡略化も始まっている。

甕は口縁部に最大径をもつか、もしくは口縁部と胴部の最大径がほぼ等しい器形が大多数である。胴部に最大径をもつものはまだ少ない。受口状口縁甕は本段階から明確に伴う。胴部文様は縦羽状文と頸部単帯文様の割合が低く、逆に縦スリットと胴部中位の列点を施文する割合が高い。また本段階では、間隔の開く振幅の大きい波状文を胴部に施文することは認められない。壺・甕以外の器種では台付甕・鉢のほか、古相であることを示す筒形土器に伴う。

ところでSK156は松原Ⅱ期の単位資料として挙げた土器群と共通する属性を多くもちながらも、壺では5装飾帯の連弧文から縄文地文の欠落する資料が3点認められ、全体に占めるその比率が高い。また甕には間隔の開く振幅の大きい波状文の比率が中程度認められ、やや新しい要素を看取できる。そうした理由から、遺跡内で類例をはっきりと確認することができれば将来的にⅡ期の単位資料をさらに細分できる余地がある。ただし、現状での細分は説得力に乏しいため無理に細分することせず、本稿では松原Ⅱ期に含めておきたい。

③松原Ⅲ期

SB1102・SB1135・SB1142の単位資料が該当する。そのほかSK164・SD18・SB1136・SB1156とSD12出土土器の一部（図7-9）、SA114（図7-10、図8-22・23）も本段階に相当しよう。松原Ⅱ期と比べ、壺は胴部下半に最大径のあるものが高い割合となり、胴部中位に最大径のある壺を上回る。壺の受口状口縁部は屈曲が明瞭で、屈曲後、口縁先端が直立する。装飾帯構成は、2+4装飾帯構成の比率がさらに減少した結果、低程度になり、逆に3装飾帯の無文化が特徴的な[2・0・4・0]・[2・0・0・0]の各類型が高い割合を占める。それら点が松原Ⅱ期の壺と最も大きな違いである。なお、5装飾帯の連弧文・重三角文・山形文のあり方には松原Ⅱ期と大きく変化する点は見出せない。

さて、2装飾帯への直線文・簾状文といった櫛描文の採用は本段階から明確になるが、櫛描文自体は外来要素ではなく、無文帯が大きく貫入する以前の2+4装飾帯の頸部相当部分に認められた櫛条痕手法に系譜を追うことも可能である。また2a装飾帯がSB1102出土土器に確認できるが、それもSB1146出土資料〔青木・賛田1998：報告書図版101-193〕のように2+4装飾帯の頸部部分の篋描山形文が残存したと考えれば、特定の時期の属性とすることは難しい。

甕は、胴部に最大径のあるものが半数以上を占めるようになり、頸部に単帯文様を施文する割合も同様に高い割合となる。いっぽう、胴部の縦スリットや胴部中位の列点の施文率は激減する。胴部の波状文は密で振幅の小さい種類の甕とともに、間隔の開く大振幅波状文もわずかにだか存在する。松原Ⅱ期で高い割合で存在した縦羽状文は本段階でも引き続き存在するが、羽状間の間隔がやや開き始める。

そのほか器種では台付甕・高坏・鉢・蓋・無頸壺・注口土器がある。コの字重ね文をもつ台付甕・無頸壺は本段階から共伴が明確になる。

④松原Ⅳ期

SB246・SB319・SB360・SB364の単位資料が該当する。そのほか、SB409（図8-32・33）・SB1124（図8-35）・SB1175（図8-34）・SB1189（図8-36）・SK1714（図8-29）が本段階に相当する。松原遺跡において単位資料が最も豊富な段階である。

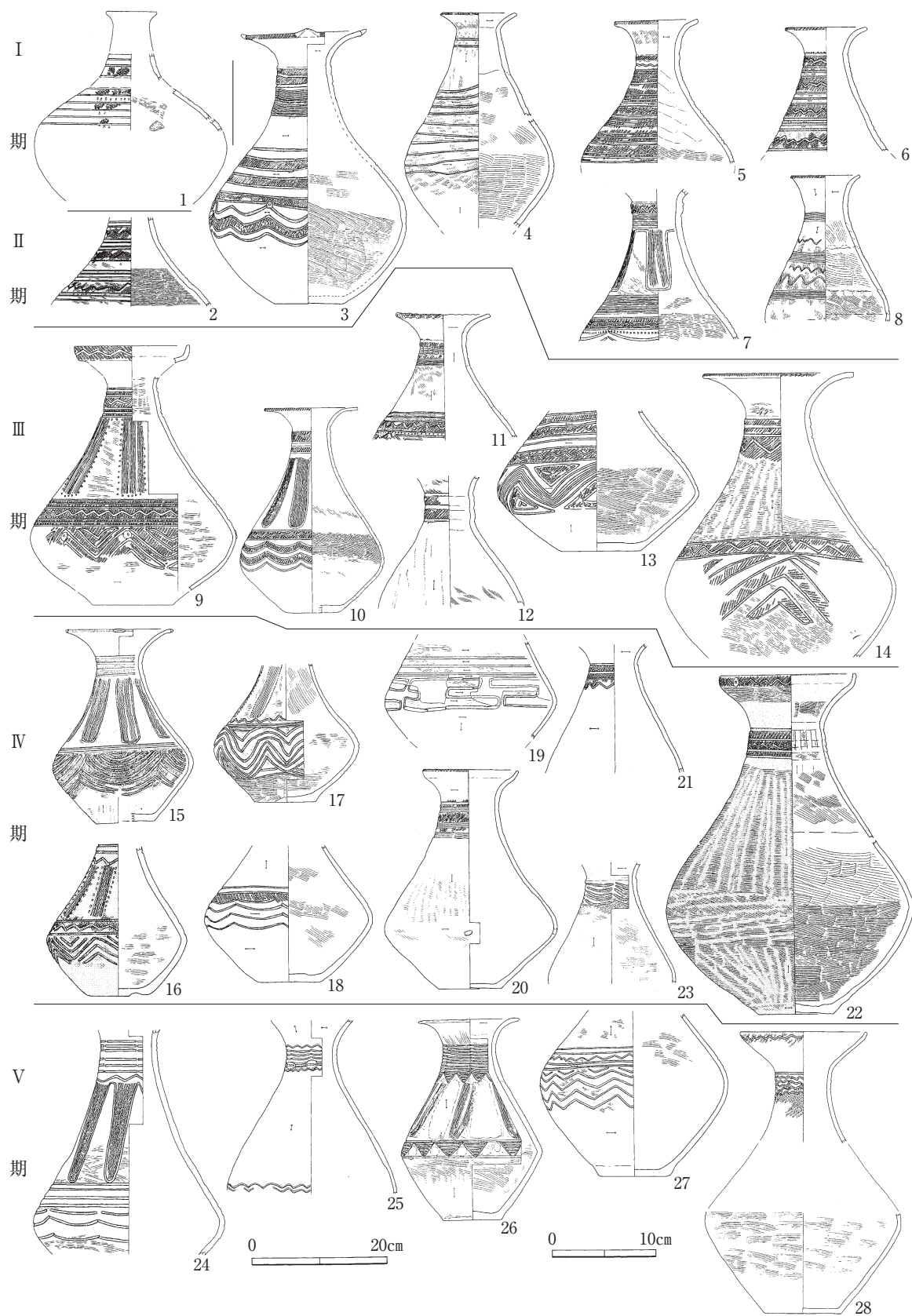


圖7 松原遺跡編年(1)壺

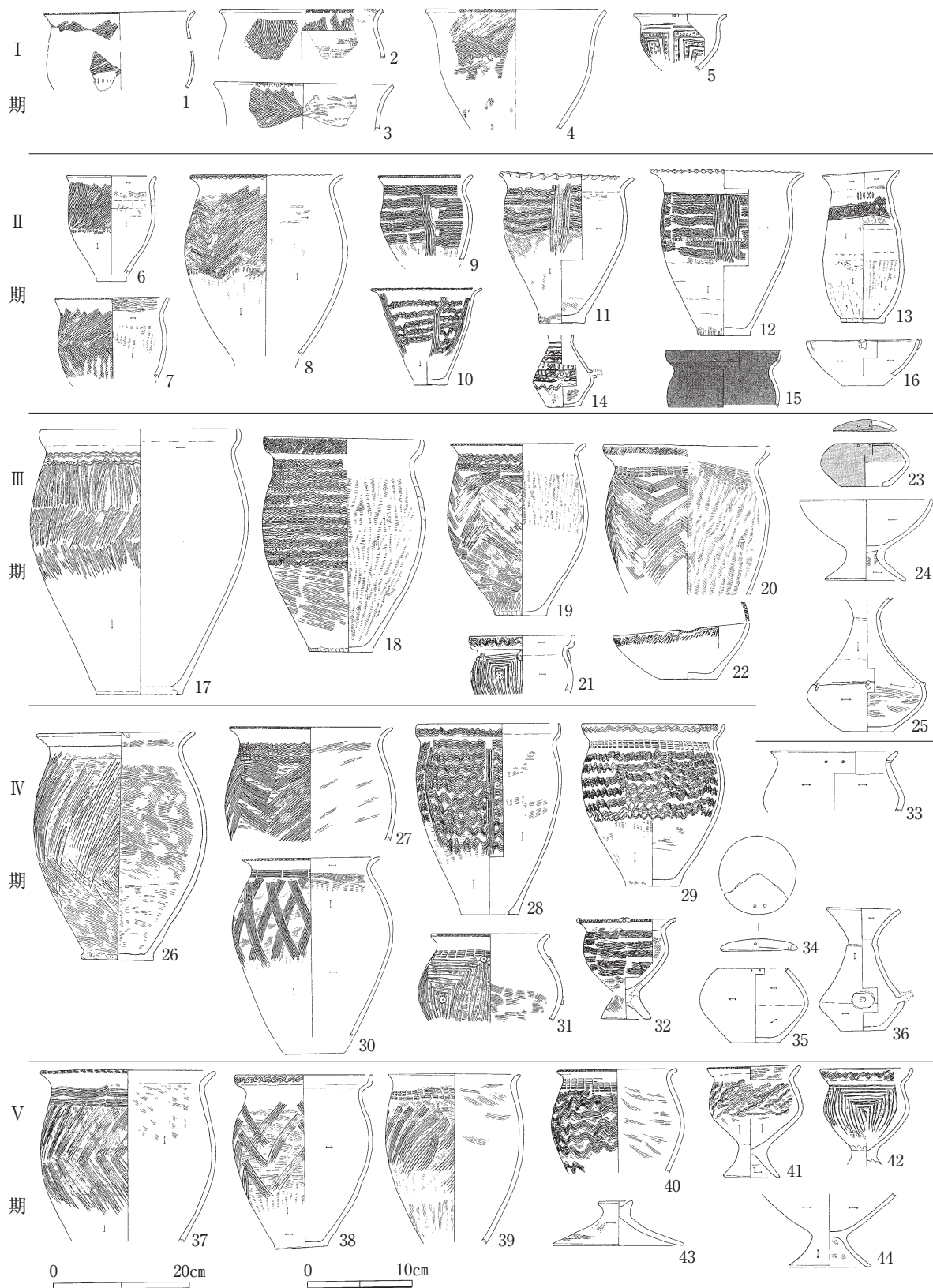


図8 松原遺跡編年(2)甕・高坏・無頸壺・鉢・蓋など

松原Ⅲ期の器形と比較すると、胴部中位を最大径とする壺がほとんど認められないのが特徴的であり、また壺の受口状口縁部の屈曲が弱まり、口縁部先端が直立せず外反気味となる。また図7-20のように、最大径は胴部下半にあるながら胴部が「くの字」状に強く張り出すものが本段階に出現することに注意したい。装飾帯構成では、2+4装飾帯構成をもつ壺の消滅、5装飾帯の縄文帯・無文帯の交互配列の消滅、同じく連弧文・重三角文・山形文からの縄文地文の欠落が顕著となる。また重三角文・山形文では単位文様相互が連結し、横帯化が著しい。壺頸部の縄文施文率は以前まで高く維持されているが、本段階は胴部の縄文施文の欠落が明瞭となる段階である。また、頸部文様に篋描による擬似簾状文が採用されるのは本段階からである。総じて、本段階から壺の文様の崩れや簡略化、器面の表面の無文化が顕著になる。

甕の胴部文様では松原Ⅲ期に比べ縦羽状文の間隔がさらに開き、粗雑化する。また波状文も間隔が開き、図8-28のように一部に振幅の大きい波状文が施文される。30のように斜格子文も本段階では明瞭である。そのほか台付甕・高坏・鉢・無頸壺の蓋・無頸壺・注口土器の器種が本段階には伴う。

⑤松原Ⅴ期

SB1160とSK191の単位資料が本段階に該当する。そのほか、SB245（図7-25・図8-38）・SB326（図8-40・41）・SB331（図8-42・43）・SB404（図7-24）・SK132出土の資料も本段階に含めることができる。

壺の器形は、胴部下半に最大径がある図7-24・25のほか、図7-26・28のように胴部中位に最大径が認められ、なおかつ胴部最大幅の箇所が「くの字」状に強く屈曲するものが目立ち始める。松原Ⅳ期の20の系譜にある器形とみてよいであろう。また図7-24のように細頸壺は本段階まで比率はわずかだが伴う。受口状口縁甕も本段階まで明瞭に残存する。

本段階は壺が頸部・胴部とも徹底して無文化が進展している点に特徴がある。壺の縄文施文率は5割程度であり、SB1160では3割を下回る。文様表現でも簡略化が進行しており、5装飾帯にはもはや単位文様は原型を留めておらず、横帯化が著しい。SK191では頸部装飾帯に篋描による擬似簾状文・矢羽根状文があり、次の吉田式へとつながる属性が明確である。また、2a装飾帯の文様が胴部文様として繰り返し施文されていた。また甕では胴部文様に縦スリットを伴う例が認められなくなり、縦羽状文は松原Ⅳ期以上に粗雑となる。

そのほか本段階に伴伴する器種は高坏・蓋が確認できるが、松原遺跡では本段階に該当する土器が少なく、無頸壺や注口土器が伴伴するか否かは不明である。

⑥長野盆地南部に所在する単位資料との対比と栗林式土器編年の再構築

では、これまでの研究史において、長野盆地南部の諸遺跡から基準資料として抽出された単位資料と松原各時期を対比させながら、松原編年が長野盆地南部の編年としても有効である点を確認しよう。

これまで数多くの研究者が指摘するように、牟礼パイパスD地点〔田中ほか1986〕、（図9-1～5）と浅川端遺跡出土土器〔千野ほか1998a〕、（図9-6～10）は、長野盆地南部において古相の土器群である。2+4装飾帯のみで壺が構成される点、胴部の張り口と口縁の外反が弱い甕が主体であり、胴部が横羽状文に限られる。そのため明らかに松原Ⅱ期以前に位置づけられる資料である。松原Ⅰ期と

したSB450出土土器は牟礼パイパスD地点資料などとおおむね特徴が一致する資料である。

では、安藤が栗林式土器成立期に限定できる資料であるとした篠ノ井遺跡群高速道地点SD7110資料〔西山編1997〕、(図9-11~13)との関係はどうか。SD7110からは浮線文・条痕文系土器とともに栗林式土器の壺・甕・蓋が出土した。壺の口縁部はわずか1点を除き全て無文化しており、甕の口縁部直下は無文化しているものと有文のものが数量的に拮抗する。壺の装飾帯構成は2+4装飾帯に限られ、11の壺の5装飾帯には上下に重三角文を配列し、重三角文内に刺突が充填される。12と13の壺には工字文系列の文様が施文される。刺突充填は浅川端遺跡1号溝址にもあり、松原Ⅱ期以降そうした手法が確認できないことから、時期が限定できる手法である。

いっぽうで篠ノ井遺跡群資料と、牟礼パイパスD地点や浅川端遺跡出土の甕の相違点は、後者が口縁部直下が全て無文化する点である(図9-5)。篠ノ井遺跡群資料には口縁直下にまで施文がある土器が少なからず認められる(図9-14)。口縁部直下の無文化は新しい属性であるため、SD7110資料の栗林式土器は安藤の指摘どおり、牟礼パイパスD地点資料よりさらに古い栗林式成立期の土器に位置づけることができる。

次に松原Ⅱ期と同じ内容をもつ資料として、石川が栗林2式古段階の基準資料とした本堀遺跡16号溝出土土器や同7号住居跡出土土器〔千野ほか1992〕のほか、春山B遺跡SB07・SB34・SB36出土土器〔臼居・町田1999〕を挙げることができる。ここでは2+4装飾帯構成以外の壺が共伴し、甕の胴部文様にも縦羽状文や波状文が施文され、多様になる。また春山B資料では胴部中位の列点の施文率が中程度の割合で認められる。また胴部の張るものが、低い割合だが組成する。

松原Ⅲ期は春山B遺跡のSB26・SB33・SB37が該当する。特にSB37は良好な資料である。ここでは2+4装飾帯をもつ壺が3装飾帯が無文の壺と共伴し、5装飾帯の連弧文が縄文帯と無文帯の交互配列となる壺が認められる。縦羽状文は不明瞭であるが、胴部に最大径のある甕が半数以上を占めるいっぽう、胴部への列点文の付加や縦スリットといった古手の要素が明瞭であり、新相の要素である斜格子文甕もある。

松原Ⅳ期と対比できる資料は豊富であり、千曲川左岸では本村東沖遺跡43号住居跡出土土器〔千野1993〕、千曲川右岸では春山B遺跡SB01出土土器、賛田編年の基準資料である榎田遺跡SK3277出土土器のほか榎田遺跡の住居跡出土土器の大半〔広田・賛田1999〕が松原Ⅳ期と特徴が一致する。2+4装飾帯構成の壺が共伴せず、壺胴部の無文化が顕著である。甕では胴が張り、縦羽状文甕が卓越する。

松原Ⅴ期の資料は千曲川右岸では希薄であり、千曲川左岸でより多く確認できる。二ツ宮遺跡A区7号土壙出土土器〔千野ほか1992〕、中俣遺跡27号住居跡出土土器〔千野ほか1991〕、吉田古屋敷遺跡SK1出土土器〔遠藤2005〕のほか、樋爪遺跡遺構出土土器〔矢口ほか2004b〕が松原Ⅴ期と同じ内容を有する。壺では縄文の欠落が著しく、施文率は半数以下である。また5装飾帯からは完全に縄文地文が欠落し、単位文様も横方向への連結が進んでいる。また、松原遺跡では資料が少ないこともあり、器種構成の論じるのに不十分であったが、千曲川左岸の諸遺跡では台付・平底いずれもコの字重ね文をもつ甕が一定量含まれ、また高坏・蓋・無頸壺も共伴する。

これまでの分析の結果、松原遺跡の諸段階と長野盆地南部の諸遺跡出土の栗林式土器が対応関係にあることを受け、先行研究を踏まえながら段階を新たに設定したい。

かつて石川が言及したように〔石川2002a〕、栗林式の最古相と最新相の土器は比較的容易に抽出することが可能であり、中相に相当する土器は属性の多寡で判断が可能である。また栗林Ⅰ式に成

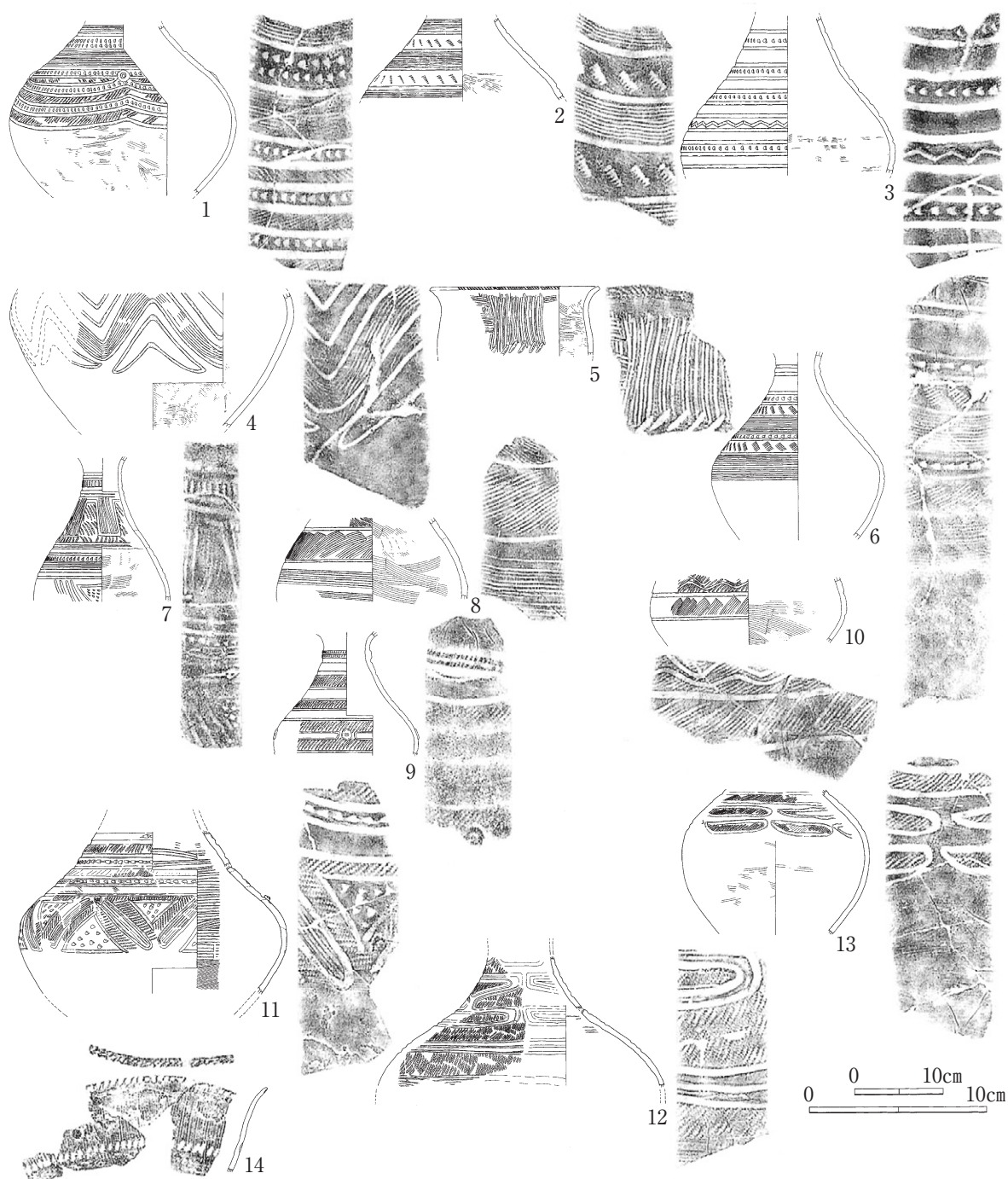


図9 牟礼バイパスD地点・浅川端・篠ノ井遺跡群高速道地点出土の栗林式土器
1～5: 牟礼バイパスD地点 6～10: 浅川端 11～14: 篠ノ井高速道

立した装飾帯構成が栗林式最終末期まで順次分解・派生していく過程、そして栗林1式に成立した器種構成が栗林3式まで継続する点からしても、松原遺跡出土土器は栗林式としてまとめることが妥当である。

また、以前、長野盆地南部にて「百瀬式」存否の問題が議論されたが、壺の2装飾帯（頸部装飾帯）に櫛描文が採用されることは松原Ⅲ期から確認できる。それは前段階の2+4装飾帯構成から派生した文様と理解することが可能である。したがって、長野盆地南部に関しては櫛描文採用の有無をもって百瀬式を設定する根拠がきわめて薄弱である。

以上の観点から段階を設定すると、壺の装飾帯構成と甕の文様が限定される松原Ⅰ期と、それと特徴が一致する牟礼パイパスD地点・浅川端遺跡出土土器で1つの段階を構成する。そしてその直前に篠ノ井遺跡群高速道地点SD7110出土土器が置かれ、栗林式の第1段階・第2段階が設定可能である。

次に、松原Ⅱ期からⅤ期がそれぞれ第3段階から第6段階に相当する。設定した6段階は、第1段階・第2段階と第3段階の間に、壺の装飾帯構成、甕の文様構成において明確に線を引くことができ、第5段階と第6段階の間も縄文施文率の著しい低下を理由に線を引くことができる。それぞれの境界を基準に栗林1式・栗林2式・栗林3式が設定できる。さらに、第1段階と第2段階は、甕口縁部直下の無文化進行の差が見られる程度で、あくまで属性の多寡で前後関係が理解できる程度である。第3段階から第5段階の間も同様に、2+4装飾帯構成の壺の比率、壺と甕の器形・文様属性の多寡により時間差が確認できる程度であり、栗林1式と栗林2式の差、栗林2式と栗林3式の差とは明らかに異質である。これらを根拠に、栗林1式（古・新）・栗林2式（古・中・新）・栗林3式の3型式6段階を新たに設定する。

さて、先学の編年研究との対応関係も記しておく必要があろう。本稿栗林1式新段階は石川編年の栗林1式、寺島編年の栗林式古段階に相当する。栗林2式古段階は石川編年の栗林2式古段階、寺島編年の栗林式中段階古、賛田編年の松原第1段階に相当する。栗林2式中段階は石川編年の栗林2式新段階と寺島編年の栗林式中段階新のより古相と対応する。栗林2式新段階は石川編年の栗林2式新段階と寺島編年の栗林式中段階新のより新相と対応し、賛田編年の松原第3段階におおむね一致する。栗林3式は石川編年栗林3式、寺島編年栗林式新段階、賛田編年松原第4段階と対応する。

4. 他地域の栗林式土器との併行関係

前項で設定した長野盆地南部の編年を基軸に、信濃各地の栗林式土器との併行関係を確認したい。筆者は2006年に佐久盆地と松本盆地の栗林式編年を整理し、長野盆地南部との対比を試みた。今回、石川編年「栗林2式新段階」を古相・新相に細分したため、それとの整合性をも含め検討を行うことにする。

①佐久盆地

筆者は以前、信濃東部の佐久盆地における編年を整理し、佐久盆地1期から5期の5段階を設定した。栗林式特有の装飾帯構成・器種構成が佐久盆地5期まで常に主体であることから、栗林式として括ることのできる段階である。

佐久盆地1期は、根々井芝宮遺跡9号住居跡など出土土器 [羽毛田1998]、(図10-1・2)と深掘遺跡H50住居跡出土土器 [小林2002]、(図10-3)が該当する。壺の装飾帯構成が2+4装飾帯に限られる。

しかし、根々井芝宮遺跡では甕の胴部文様は横羽状文のみならず、振幅の小さい密な波状文も含まれる〔羽毛田1998：報告書第182図〕。また横羽状文は胴部下半にまで施文の範囲が及ぶ。それらを甕のあり方を考慮すれば栗林1式のなかでも新相の土器に位置づけることが可能である。

佐久盆地2期とした根々井芝宮遺跡14号住居跡出土土器は、壺の胴部が球形で、最大径が胴部中位にあるものが半数以上を占めている（4・5）。また胴部中位最大径の壺の比率が高い上、胴部上半への施文率も高く、〔2・0・0・0〕類型などの胴部が無文化する割合がまだ低い。そして、胴部に最大径のある甕の割合は低く、胴部の波状文に縦スリットが伴う土器が顕在である（6）。また、受口状口縁をもつ「コの字重ね文」台付甕は縄文地文が認められ（7）、それら甕の属性は古相のあり方である。したがって栗林2式古段階とするのが妥当である。なお、佐久盆地の場合、コの字重ね文をもつ甕は本段階から明瞭で、長野盆地南部より一段階早い可能性がある〔馬場2006a〕。

佐久盆地3期とした五里田遺跡土坑25出土土器〔三石1999〕は、壺の最大径が明らかに胴部下半にあるものが多数を占め、〔2・0・0・0〕類型が過半数を占める。ただし、〔2・3・4・5〕類型の5装飾帯の重三角文（8）は、縄文帯と無文帯を交互配列しており、簡略化がみられない。また9の5装飾帯の山形文は、縄文地文こそ欠落するが横方向への連結はなく、単位が明瞭である。甕は資料が少ないが縦羽状文甕と「波状文+縦スリット」を胴部文様とする台付甕（12）が出土した。それらを根拠に栗林2式中段階に位置づけることができる。

次に、佐久盆地4期とした西一本柳遺跡Ⅲ・Ⅳ次M8溝出土土器〔小林1999〕は、壺は〔2・0・0・0〕類型が圧倒的多数で（13～15）、胴部上半の無文化が著しい。甕の胴部文様には列点文や縦スリットなど古手の要素はなく、縦羽状文が目立ち、それとかなり施文単位の間隔が開き、方向等も粗雑なものである（16）。栗林式古相に特有であった文様が大きく崩れ、簡略化が顕著となるのは長野盆地南部で確認したとおり、栗林2式新段階の特徴であり、本資料もそれに一致する。

佐久盆地の栗林式終末期の土器は直路遺跡H1住居跡出土土器〔森泉ほか2003〕が相当し、佐久盆地5期とした。直路遺跡H1出土土器は壺の縄文施文率が3割程度にまで落ち込み（17）、形骸化した舌状文の存在や頸部に採用される櫛描文の比率が4割と顕在である（18・19）。甕は平底の場合、縦羽状文（21）・波状文（20）が主流で、台付甕では複合鋸歯文やコの字重ね文、波状文が施文される。

注目したいのは壺の器形で、17のように胴部中位で「くの字」状に胴が張るものが目立つことである。また甕頸部の単帯文様は等間隔止めの簾状文にほぼ統一される（20・21）。本遺跡出土土器は、栗林2式新段階より新相の属性を出土土器は持っていることは明らかであり、長野盆地南部の栗林3式の特徴と多くの共通点をもつ資料である。また、栗林式系の高坏・鉢が顕在である。

ただし、長野盆地南部と違うのは、壺に擬似簾状文の採用例がないこと、5装飾帯に横帯化した重三角文・山形文が確認できないことである。逆に、壺の頸部に直線文・波状文・簾状文を組み合わせ、単帯で数段にわたり施文する手法（18）は長野盆地南部では認められない。本遺跡出土土器は、既に栗林式を脱却し、吉田式併行に位置づけられるとの見解もあるが、縄文施文が完全に欠落する吉田式に積極的に比定できる土器は認められない。したがって栗林式の範疇と考えたい。

②松本盆地南部

次に松本盆地南部の栗林式土器との併行関係を整理しよう。現在の松本市・塩尻市一帯のこの地域では栗林1式に相当する明確な土器が認められず、栗林2式以降の資料に限られる。

栗林2式古段階相当の土器は宮淵本村遺跡4号住居跡出土土器〔直井1999〕である。正式報告が

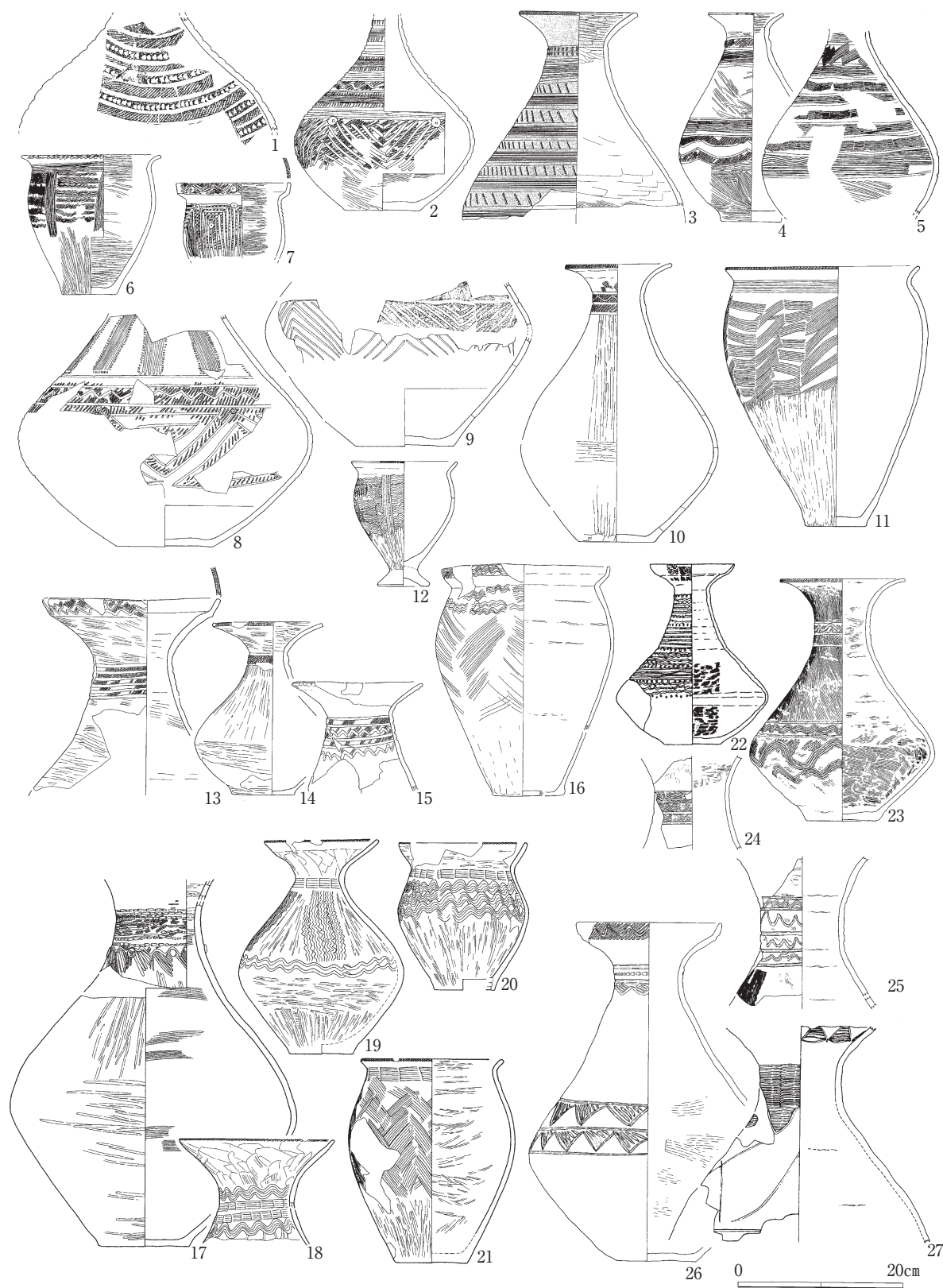


図10 佐久・松本南部出土の栗林式土器

1・2・4・5・6・7:根々井芝宮 3:深掘 8~12:五里田 13~16:西一本柳Ⅲ・Ⅳ
17~21:直路 22:宮渕本村 23~26:県町 27:百瀬2次

未刊行ではあるが、2+4装飾帯構成の壺（22）と口縁部に最大径のある甕が出土している。栗林2式中段階相当の土器が不明瞭であるが、栗林2式新段階と栗林3式に該当する土器は豊富である。県町16号住居跡出土土器〔直井ほか1990〕は、2+4装飾帯構成の壺が認められず、壺の5装飾帯には施文の乱れた櫛描波状文が施文され（23）、胴部の無文化が進行していることは明らかである。また、24・25のように壺頸部への櫛描波状文の採用が認められる。そして壺胴部が「くの字」状に強く屈曲する器形が散見される。甕の頸部単帯文様は波状文・簾状文の数が拮抗しており、胴部文様は縦羽状文より波状文がやや数的に優勢である。甕の口唇部を含む縄文施文率は7割程度である。そのほか、コの字重ね文をもつ台付甕、鉢、高坏、注口土器が伴う。県町遺跡24号住居跡出土土器は壺頸部への装飾の集中、その文様に崩れが見られないことから16号住居跡と同時期に位置づけられる。両住居跡出土土器は栗林2式新段階の内容に一致する。

県町遺跡7号住居跡出土土器では、壺26の2a装飾帯にある鋸歯沈線文と同構図が4装飾帯に2段に渡って繰り返して施文される。また頸部に櫛描波状文のみが採用される壺もあり、全体的により新相の内容をもつ。甕の胴部文様は縦羽状文と波状文を主とし、口唇部を含む縄文施文率が2割弱とかなり低くなる。

そのほか百瀬式の標式資料とされた百瀬遺跡堅穴住居跡出土土器〔藤沢1951〕は、頸部文様へ櫛描文が採用される割合が確かに高い〔馬場2006aの図10-1など〕。いっぽう、百瀬遺跡2次8号住居跡出土土器は頸部に擬似簾状文を3段にわたって施文し、口縁内部に鋸歯沈線文を施す（27）。県町遺跡7号住居跡・百瀬遺跡堅穴資料・百瀬2次8号住居跡の各資料は、縄文施文率が急減する特徴のみならず、文様の特徴からしても栗林3式との共通点が多い。

さて、笹沢浩が以前、百瀬式の指標として考えていた櫛描文採用率の上昇について触れておかなければならない。筆者は前項で明らかにしたように、壺頸部への櫛描文の採用は長野盆地南部でも栗林2式中段階から確認でき、百瀬式特有とはいえない属性であると筆者は考えた。また、長野盆地南部の栗林3式とそれに併行する土器群が、特に壺の器形や文様において地域性を顕在化させる点は確かに看取できるが、いっぽうで装飾帯構成や文様の多くが栗林式系統の要素を採用している点、そして栗林3式に共通する文様の存在や縄文施文率の低減が佐久・松本南部の各資料に認めることができた。したがって、積極的に栗林式から松本南部・佐久の各盆地の土器を「百瀬式」として分離する根拠はないと考える。さらに、笹沢が是認する天王垣外式・海戸式についても、壺・甕の器形・装飾帯構成・文様のいずれも栗林式の範疇で、時期は栗林2式新段階に概ね位置づけることが可能である。双方の型式についても栗林式から積極的に分離する根拠はない。

次に、設定した栗林式編年を基軸に、信濃以外の地域の異系統土器との併行関係を論じたい。

③……………栗林式土器と周辺地域型式の併行関係

ここでは北陸の小松式、北関東の北島式、南関東の宮ノ台式と栗林式の併行関係を点検することにした。

1. 栗林式と小松式・戸水B式の併行関係

栗林式と小松式の併行関係の分析には吹上遺跡〔笹沢編2006・2007〕が欠かせない。吹上遺跡では栗林式・小松式・貝田町式・川原町口式・凹線文系土器の共伴が認められ、併行関係を決定でき

る非常に重要な遺跡である。まず、吹上遺跡出土土器のなかから編年上の定点資料を確認し、併行関係を吟味する。

① 笹沢編年「吹上Ⅰ期」とされた資料の検討

笹沢正史編年〔笹沢2006〕によれば、吹上Ⅰ期古段階は福海貴子編年〔福海2003〕八日市地方様相7期、吹上Ⅰ期中・新段階は八日市地方様相8期に併行するという。笹沢の編年は型式組列を作成し、その時間的単位の裏付けとして土坑一括資料を重視する。福海編年の八日市地方様相7期は高坏の出現という器種組成上のメルクマールとともに、櫛描直線文・波状文・簾状文を重層させる手法が特徴的である。八日市地方様相8期は、様相7期の施文帯が拡張傾向にあり、さらに斜行短線文の採用が明瞭であるという。

小松式と栗林式の併行関係を検討する上で基準となるのが吹上遺跡のSK38B・SK159・SK423・SK441出土土器である。

SB38B資料のうち、図11-1は幅6mmもある太い沈線区画を採用し、横帯化した櫛条痕、斜行櫛条痕、押し引き列点文が交互に施文される。また刷毛調整が底部に明瞭である。区画に太い沈線が採用されている上に大形壺であることは、松節・境窪段階の土器の直後であることを想起させる。まさに2+4装飾帯構成をもつ栗林式最古段階の土器である。2も同様に大形壺で、太描沈線が区画文として採用され、栗林式特有の〔2・3・4・5〕類型が明瞭である。特に5装飾帯は幅広く、そこでは縄文帯・列点・横走櫛条痕が交互に波状となり、三角文が単位文様として配置される。

そうした栗林式に共伴する小松式は、櫛描直線文と斜行短線文が間隔を開けず施文される例（5）や、胴部中央に櫛描簾状文・波状文が間隔を開けず施文される土器（6）である。施文単位間が比較的密であるにもかかわらず、斜行短線文を、施文帯の最下段に、それも2段伴う5を八日市地方様相7期とするか8期とするのか、判断は難しい。

次に、SK423資料では、10の壺が太い沈線を区画文様として採用し、頸部に単位文様が上下二段にわたり施文され、遊ヶ崎式特有をよく残す例である。胴部最大径の部位の施文は、頸部と同様の構図をとらず、遊ヶ崎式を崩した構成である。そこでは太い沈線で区画された波状の櫛条痕文が横走し、波状の櫛条痕文の上下に山形文・半月文を列点文を付帯しつつ介在させる。すなわち、10は部分的ながら櫛描文特有の横帯化の影響を受けており、遊ヶ崎式の直後、すなわち信濃の境窪段階直後に位置づけられる。10と2には時間差が認められない。また、SK423には11という明らかに八日市地方様相7期に該当する壺が共伴する。SK187の19も八日市地方様相7期に相当する壺で、1・2・10と同内容の壺20が伴う。

SK38B・SK423・SK187の各土坑から出土した栗林式大形壺に時間差が認められないことをもつとすれば、それら3土坑資料は同一時期として理解するのが妥当である。

このように笹沢編年Ⅰ期古段階のSK38B・SK187・SK423資料のうち、小松式系土器は大方、八日市地方様相7期に相当することが複数例から確認できる。また、それら土坑出土の栗林式土器は、壺の装飾帯に〔2+4・0〕類型と〔2・3・4・5〕類型が存在し、壺のハケ整形が明瞭で、壺・甕とも口縁部の横ナデが共通して認められた。また壺・甕・高坏・鉢・無頸壺・蓋といった栗林式の器種が出揃う。

それら3土坑から出土した栗林式壺の装飾帯構成は、前章で設定した栗林1式に相当する。問題は、その古相・新相のいずれかという点である。吹上遺跡から出土した栗林式甕は、口縁部直下の無

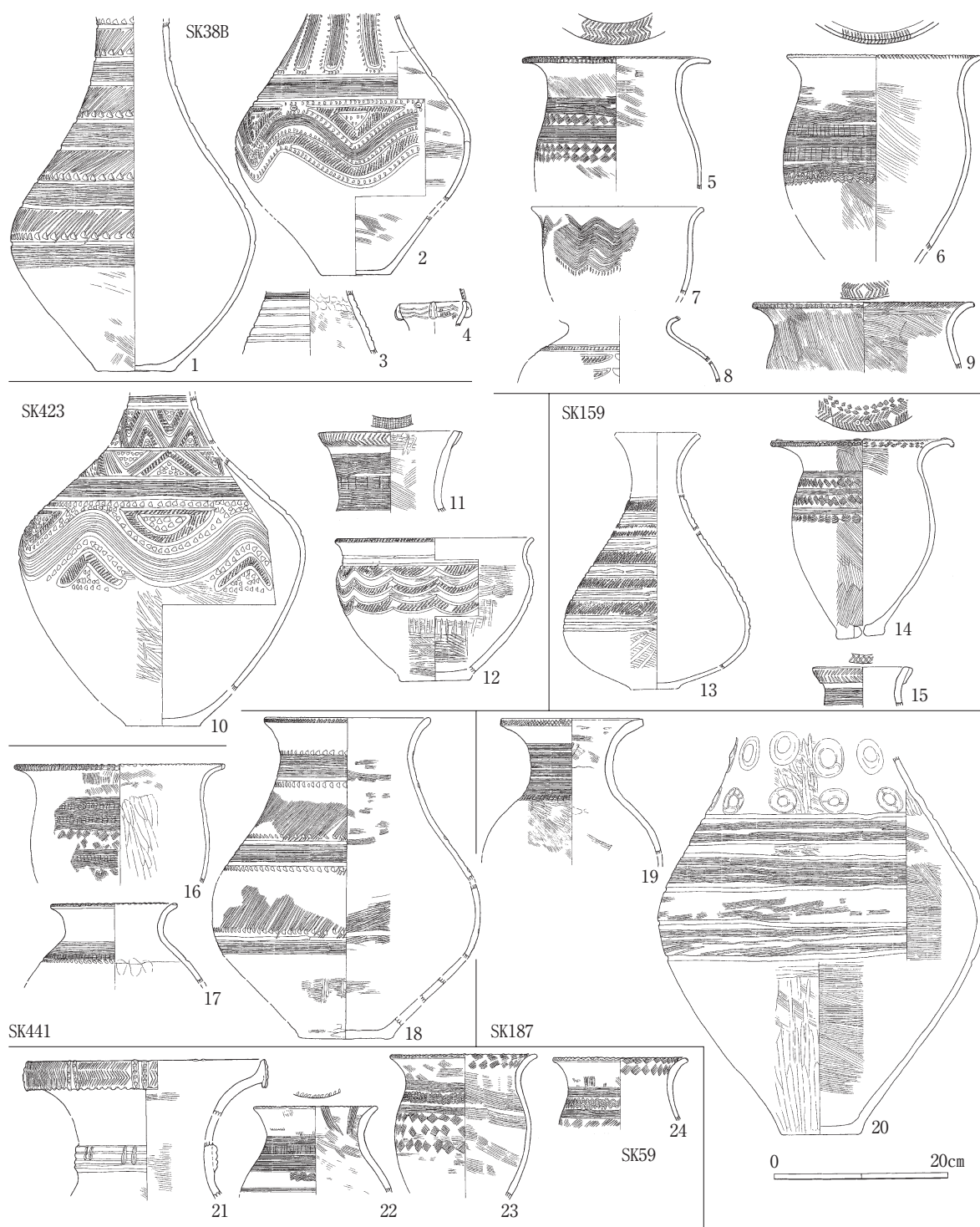


図11 吹上遺跡出土土器(吹上1期)

文化が進展しており、長野盆地南部のあり方と照らし合わせれば新相ということになる。しかしいっぽうで、1・2・10・20のように大形壺が複数例存在する点は、大形壺の組成が明瞭な境窪段階直後のあり方を示唆するものである。早い段階からの甕口縁部直下の無文化の進展は、小松式との接触が濃厚な日本海沿岸遺跡特有とも考えられ、中部高地内部とはその普及度に時間差があると理解する。ここでは大形壺の残存を評価し、栗林1式古段階に位置づける。

次に、吹上I期古段階に後続する資料として、SK159とSK441を検討する。双方の土坑からは栗林式の大形壺は認められない。SK159から出土した13の栗林式壺は、1のように太い沈線により装飾帯の区画は認められないが、均一な幅の装飾帯を基本とした縄文帯と篋描沈線が交互に施文される。それをもって先のSK38Bの次の段階に位置づけることは妥当である。共伴した14の小松式系甕は装飾帯の拡張と施文の単位の間隔が開き始め、斜行単線文の単位がより小形化する点から八日市地方8期に併行する。旧河道出土の報告書図版142-1596〔笹沢編2006〕など縄文帯の幅がより狭い2+4装飾帯構成の壺もこの段階に位置づけることが可能である。

また、SK441資料のうち18は1と同様に太描沈線が区画文様として採用されるいっぽう、1のように均一化された装飾帯幅が崩れ、広狭が顕著である。したがって、吹上I期古段階の後続型式に位置づけることができる。それに共伴した小松式の甕16は、櫛描直線文・簾状文・斜行短線文・半円文が幅広に施文される点で新たらしい要素であり、八日市地方様相8期併行の土器と理解できる。

さて、笹沢編年では「吹上I期中段階=SK159」,「吹上I期新段階=SK441」と示されているが、筆者は双方の土坑から出土した小松式系・栗林式系の土器に時間差を見いだすことは難しいと考える。本稿では同一段階とし、ここで笹沢編年吹上I期古段階を吹上1期古段階、同吹上I期中・新段階を吹上1期新段階と設定する。

なお、SK59は栗林式土器の共伴が認められないが小松式系の時期を考える上で定点となるので触れておきたい。本資料では22のように八日市地方様相7期併行と位置づけることが可能な土器も認められるが、23は胴部下半まで装飾帯が広がりより新しい例と理解できる。したがってSK59資料は八日市地方様相8期併行とするのが妥当である。

②笹沢編年「吹上II期」とされた資料の検討

次に笹沢編年の吹上II期の他型式との併行関係はどうか。吹上II期が小松式・栗林式のいずれの型式と時間的接点をもつかについては筆者と笹沢正史では見解が異なる。笹沢正史によると吹上II期土器は、笹沢浩編年の「栗林II式新段階・百瀬式」に併行する吉田式直前の土器群〔笹沢2006: 139頁〕であるという。

しかし、筆者が本稿において具体化した栗林式の最も新相の土器、すなわち栗林3式は、壺の[2+4・5]あるいは[2+4・0]類型の欠落、2a装飾帯の発達〔石川2002〕、5装飾帯幅の縮小および連弧文等の平行沈線化、縄文施文の著しい欠落、栗林2式古段階以降特徴的であった甕胴部の縦スリットの欠落、胴部中位に「くの字」状に屈曲する壺の顕在化⁽⁷⁾を挙げた。

吹上II期の壺をみると、図12-1・4・5のように2装飾帯と5装飾帯に縄文施文が明瞭であり、長野盆地南部の栗林3式の壺に特徴的に認められたような擬似簾状文や、5装飾帯に特徴的に認められた、縄文が完全に欠落し形骸化した連弧文が確認できない。佐久のように栗林3式に擬似簾状文が認められない地域も存在するが、それを除外したとしても、栗林2式新段階に後続する要素が吹

上遺跡出土の栗林式系には認められない。1・4・5の壺をみれば吹上Ⅱ期は栗林2式新段階相当とするのが妥当である。

ただし、吹上Ⅱ期の栗林式系の甕には胴部に波状文を多段に施文する例が顕著であるため、それは吉田式への後続関係を示す重要な材料ではないか、という指摘もあろう。しかし、胴部波状文の甕は、縦羽状文文甕とともに栗林2式古段階から栗林3式まで常に明瞭であり、それは栗林式の終末期段階を決定づける属性にはならない。そして波状文甕の比率をみた場合、吹上Ⅱ期の基準資料となる1号方形周溝墓では、栗林式系甕の胴部文様ごとに、縦羽状文19点、波状文13点、波状文+縦スリット3点であり、60%をラインとした高程度を若干割り込むものの、いまだ縦羽状文の比率は全体の54.2%と顕在である。それを根拠に筆者は吹上Ⅱ期資料のうち、栗林式系は栗林2式新段階に限定され则认为る。

では、吹上Ⅱ期と括られた土器群のうち、小松式土器の時期はどうか。笹沢は、1) 壺における頸部への文様の集中、2) 甕の無文化の2点を当該期の小松式の特徴として挙げた[笹沢2006:139頁]。2006年の段階では吹上遺跡に小松式系の磯部運動公園段階〔増山1988、八日市地方様相9期相当⁽⁸⁾〕は存在しないという見解であったのが、2007年に段階で「八日市地方様相8期新相(9期)=吹上Ⅰ期新段階」[笹沢2007:104頁]という若干の変更が加わった。

ここでの議論の争点は吹上Ⅰ期もしくは吹上Ⅱ期の資料に磯部運動公園段階が含まれるか否かであり、笹沢は、磯部運動公園段階併行は八日市地方様相9期ではなく、むしろ様相8期新相ではないかという問題点を示し、吹上Ⅰ期と磯部運動公園段階に接点があることを示唆した。

では磯部運動公園段階とは設定当初どのような内容をもって定義されたのか。ここで確認が必要である。設定者の増山仁によれば、金沢市磯部運動公園遺跡出土の土器を標式とした増山編年5期とは「小松式と戸水B式をつなぐ土器群である。櫛描文系土器だけで成立していた4期の土器群に、新たに凹線文系土器が入ってくる段階である」[増山1989:78頁]と言及した⁽⁹⁾。凹線文系土器が組成に加わると同時に、いわゆる「豆粒斜行短線文」の存在、くの字状口縁甕の存在、甕の口縁端部の強いナデ整形により口縁端部に5mmから10mm程度の面をもつものが現れる点などを挙げる。増山の指摘に従えば、凹線文系土器の出現とそれによる櫛描文系土器の変化という双方の要素が顕在化する点で、磯部運動公園段階と他の土器群との併行関係を論じることが可能である。

なお、増山は磯部運動公園段階の次に段階に専光寺養魚場段階を置く。その段階には「2ないし3条の凹線文甕と近江系の受口状口縁甕が新たに出現」[増山1992:33頁]するとし、そのほか「肩部・口縁内面に斜行刺突文が出現」[増山1992:34頁]も認められるという。そして次の戸水B式の段階には、口唇部に施文される「1本の凹線文甕」の消滅や凹線文系甕の増加を指摘した[増山1992:34頁]。

そうした増山編年の定義を踏まえた上で、再度、吹上Ⅱ期の土器群の編年的位置をより明確にするために、まず吹上遺跡出土土器と関連の深い柏崎・佐渡界隈の資料を点検しよう。

下谷地遺跡出土の土器は高橋保により下谷地Ⅰ期・Ⅱ期に分別された[高橋1979]。胴部有文の壺は図化で17点・拓本で4点、胴部有文の甕は図化で15点・拓本で14点出土し、小松式全体数約200点の25%を占める。また、壺頸部の装飾に3種類の手法があり、断面三角形の突帯を数条施文するA類が1点(図12-11)、突帯が断面横台形で隆起が明瞭であり、篋描の縦走・横走沈線を付加するB類が7点(12)、微隆起の断面横台形の突帯で篋描斜格子文を付加するC類が1点(13)である。甕の装飾は、施文の幅が胴部の上半・中位にあるもの(15)と、櫛描文や斜行短線文の単位自体が幅狭となるいっぽう、施文幅は胴部下半にまでやや拡張する例(14)がSK83で共伴する。ま

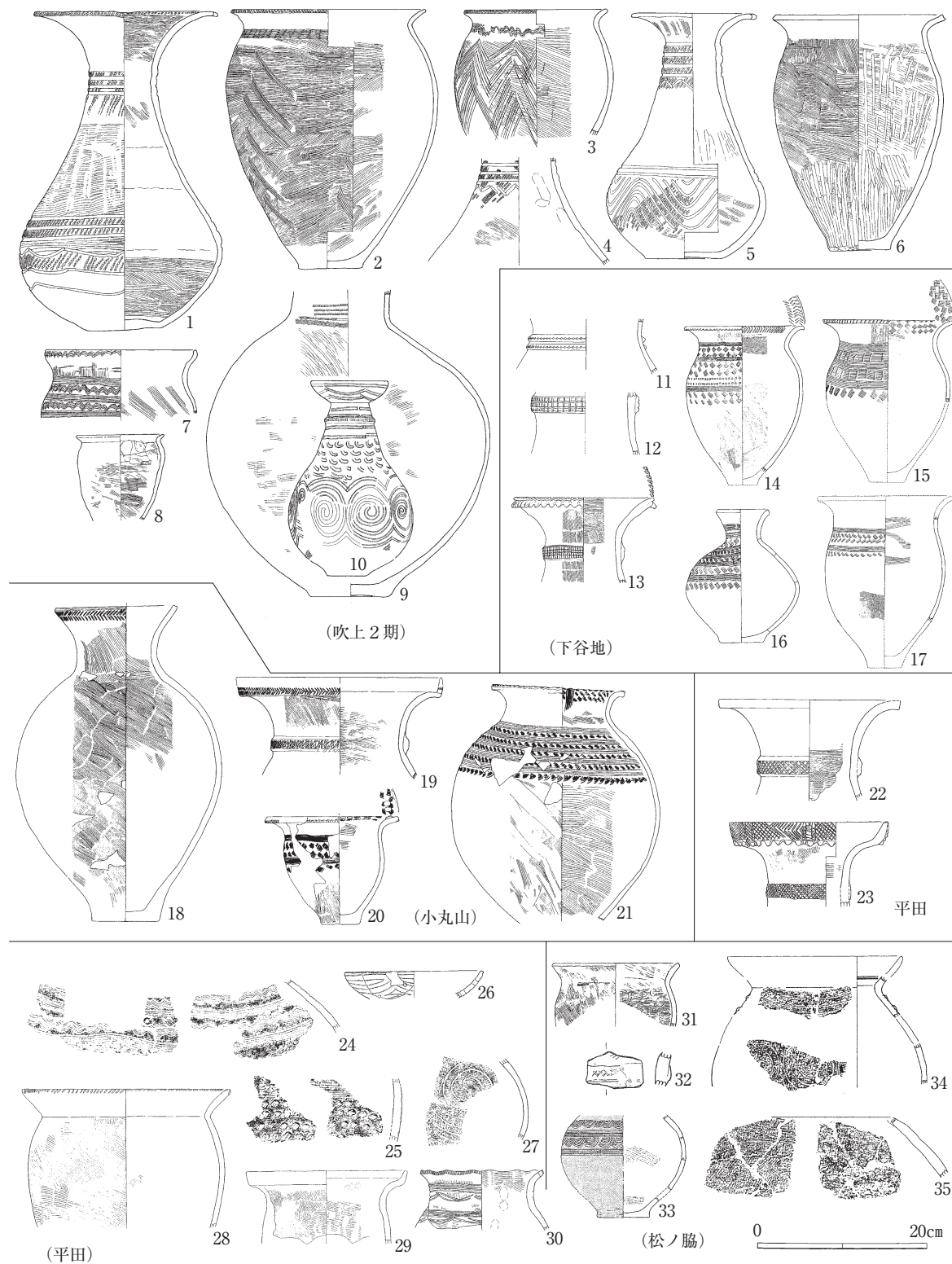


図12 吹上遺跡出土土器(吹上2期)と
下谷地・小丸山・平田・松ノ脇遺跡出土土器

た17は、斜行短線文が豆粒化しており、磯部運動公園段階との接点を示唆する。また壺・甕に施文される文様のうち、斜行短線文が装飾帯の最下段に施文されることが多く、14・16に代表されるように、全体的に斜行短線文の採用が顕著である。そうした小松式の諸特徴から、吹上1期新段階、すなわち八日市地方様相8期と併行関係にあるといえる。

また、下谷地遺跡から出土した栗林式土器は、図13-1・2・5のように栗林1式でも新段階の土器と、3・4のように横羽状文甕の施文幅が胴部下半にまで拡張した栗林2式古段階に下る土器の、おおむね2時期に跨る。

次に、小丸山遺跡〔品田1985〕では下谷地段階に比べ有文の壺・甕が激減する。その比率は、胴部表面に文様のあるものが壺で3個体、甕で2個体と小松式約120個体の1割にも満たず、無文化が著しい。また文様のある壺のうち、「豆粒斜行単線文」をもつ壺（図12-21）は磯部運動公園段階との併行関係を示す根拠となる。そして壺頸部の装飾方法はA類が認められず、C類に限定され（19）、下谷地段階からより頸部装飾の簡略化が進行していることがわかる。また、図13-10が栗林1式の短頸壺、6・7の甕は栗林2式古段階に相当する甕、11の甕は頸部単帯文様が明瞭な上、波状文の間隔が若干開き気味な点から栗林2式中段階に比定できる。すなわち、小丸山遺跡では栗林1式が若干、栗林2式古段階・中段階が主体である。栗林2式新段階まで下る資料は確認できない。

では佐渡の平田遺跡〔田海・坂上2000〕ではどうか。これまでの遺跡と同様に無文化の程度を分析すると、小松式で胴部有文の壺が図化14点、拓本で10点であり、胴部に文様のある甕は拓本資料で2点(24)に限られる。小松式系が上層から下層に個体・拓本にして合計約500個体出土しており、有文の比率は小丸山遺跡と同様に5%程度である。また壺頸部の装飾手法では、B類が1点、C類が6点で、A類がなく、C類の比率が高いことは小丸山遺跡と共通する。

注目したいのは、他系統の外來系土器や要素が顕在化する点であり、そのあり方は下谷地・小丸山両遺跡以上である。図12-24は、直線文と波状文を交互に重畳する壺で、凹線文系土器の戸水B式との併行関係を示し、29は8近江系受口状甕の影響を受けた土器、26・27は福島県の会津盆地を中心に分布する川原町口式、30は日本海側の東北北部に分布する宇津ノ台式である。

このように、小松式系土器の装飾の無文化が進展していること、そして凹線文系・近江系の影響がより濃密となる点を根拠とすれば、平田遺跡出土土器は小丸山遺跡出土土器より一段階新しい土器と位置づけられる。つまり専光寺養魚場段階から戸水B式に併行と考えるのが妥当である。

なお、平田遺跡出土の栗林式は破片のため位置づけが困難ではあるが、図13-16の胴部下半資料は、5装飾帯に縄文帯と列点帯の交互施文がみられ、栗林2式中段階以前であることは確かである。12の壺の受口状口縁部破片は、受口部の屈曲が明瞭であることから、栗林2式中段階に比定できるかもしれない。17の甕は口縁部分が伸長し、そこに振幅の大きい波状文が施文される。伸長した口縁部に大振りの波状文を施文する手法は佐久盆地の直路遺跡で明瞭で〔馬場2006：図7-25〕、栗林3式に比定できよう。そのほか13から15は栗林2式新段階と思われる。したがって、平田遺跡出土の栗林式土器は、おおむね栗林2式中段階・新段階、栗林3式に幅広くまたがると考えられる。なお、松原遺跡SA118では川原町口式が東北系土器が栗林3式と共伴しており〔石川2000：22頁、飯島・寺島1993：報告書写真89-23・24〕、平田遺跡における交差年代と齟齬はない。

次に、平田遺跡と同じく、小松式土器の壺の頸部装飾がB類1点とC類1点で、壺・甕とも胴部有文の比率が5%程度である柏崎市箕輪遺跡〔小野塚ほか2002〕では、出土した栗林式系土器に図13-19の甕のようなやや古手のもの、21のように振幅が小さく間隔が密な「波状文＋縦スリット」

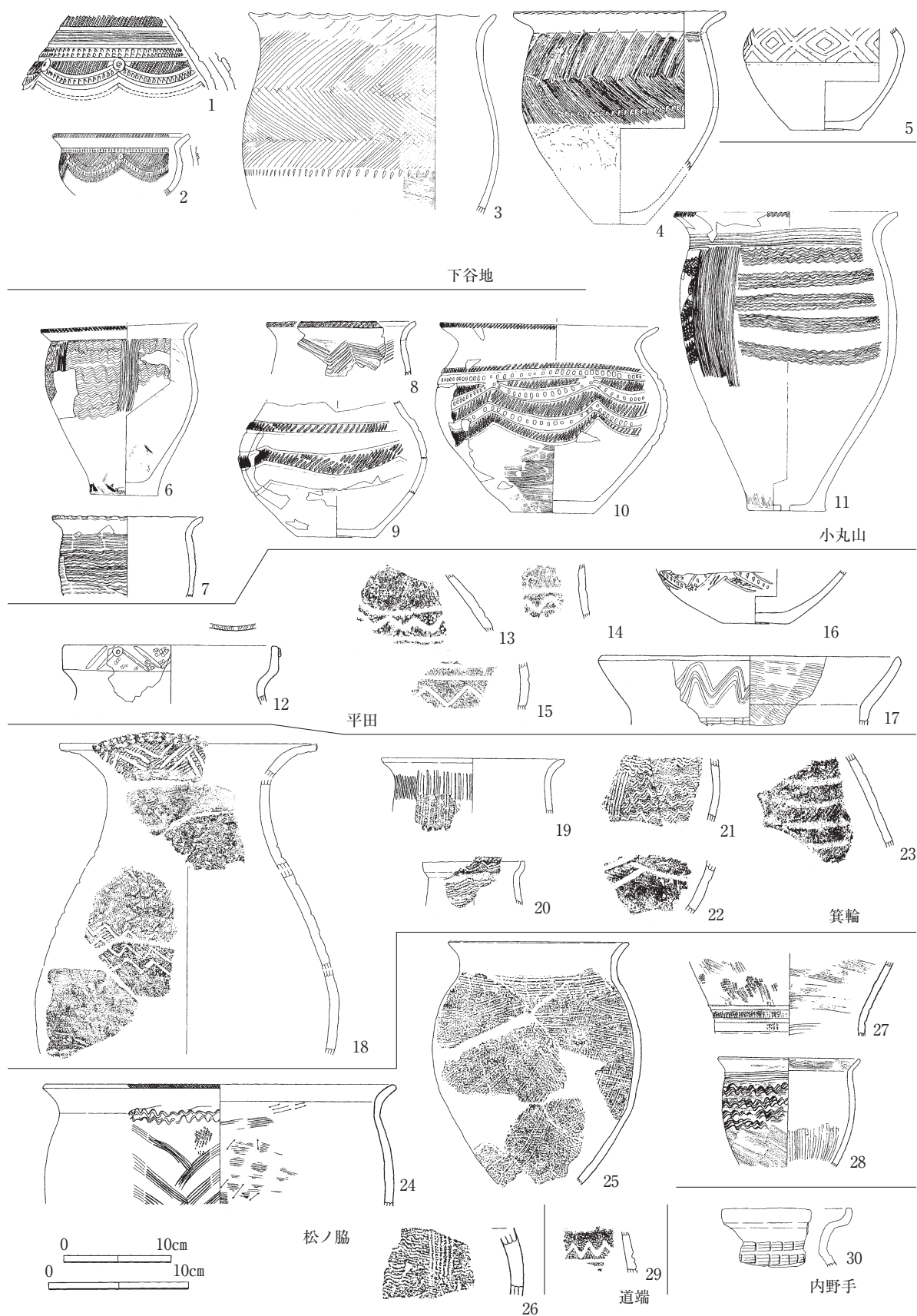


図13 越後・佐渡の栗林式関連土器

文様、23のように2+4装飾帯構成を推定させる資料の存在から、栗林2式古段階あるいは中段階が含まれていることは確かである。18は、器形的に栗林式の典型例からやや逸脱しながらも、装飾帯構成と文様のあり方から栗林2式新段階ないしは栗林3式に比定できる資料である。平田遺跡と同様に、古相と新相の栗林式系土器が本遺跡では混在する。

上越から離れ、中越の事例となるが、和島村松ノ脇遺跡出土土器〔和島村1998〕の小松式は、壺頸部にC類の突帯装飾をもつ土器（図12-32）が2点と、胴部に扇形文と直線文を交互に施文する小形壺（33）が1点の、計3点に有文土器に限られ、甕は全て無文化する（31）。有文土器の比率は全体約60点のわずか5%であり、平田遺跡と比率はほぼ同じである。出土した栗林式土器をみると、図13-24・25は縦走羽状文の間隔が広く開いている点から栗林3式に下る可能性をもちながらも、いっぽうで26のように縦スリットを有する甕が出土しており、栗林2式新段階以前の要素も認められる。本遺跡では吹上Ⅱ期同様に、長野盆地南部や松本盆地で典型的に認められる栗林3式が出土しておらず、その点を考慮すれば出土した栗林式の多くは栗林2式新段階あるいは栗林3式直前・直後あたりに対比できよう。また、共伴する東北系土器は、図12-34・35といった川原町口式に後続する御山村下式〔中村1993〕⁽¹⁰⁾が出土し、特に35は胴部縄文帯の上端に結節回転が用いられ、典型的な御山村下式に対比できる資料である。東北系土器の時期を考慮すれば、松ノ脇遺跡平田・箕輪両遺跡より一段階新しい時期の遺跡であるといえることができる。

以上の結果、下谷地、小丸山、平田・箕輪、松ノ脇の各遺跡出土土器の小松式土器を相互比較すると、土器属性の変遷過程が明確であり、なおかつ変遷過程は共伴する栗林式や東北系土器の時期とも矛盾がない。そのため各遺跡を段階として設定することが可能である。

これまでの上越・佐渡界隈の小松式土器の変遷段階を踏まえた上で、改めて吹上Ⅱ期の典型例となる資料を再点検しよう。1号・2号・3号方形周溝墓とSK223では胴部有文の壺が図化資料で8点、同甕が図化資料で1点あり、有文土器の比率は全体数約70点の1割程度を占める。その比率は下谷地遺跡より低く、小丸山・平田両遺跡とおおむね共通すると見てよいであろう。なお、壺頸部の突帯装飾手法のうち、吹上2期の土器にはA類が2点、B類が2点確認でき、C類は一切認められない。

注目したいのは、「くの字」に屈曲する口縁と口唇部に面と弱い凹線をもつ2号方形周溝墓出土の甕（図12-6）、口縁部が短く「くの字」に外反する1号方形周溝墓の甕（8）であり、そこには凹線文系土器の影響を認めることができる。また1号方形周溝墓の壺（9）のように頸部櫛描文の単位幅の縮小、SK223の報告書図版103-935〔笹沢2006〕のように崩れた配置の斜行単線文を幅広の文様帯に複数段施文する手法からは、小松式系の文様の崩れが看取である。

また、吹上Ⅱ期において栗林式を除いた有文甕はわずか2点であり、その甕のうち1点（7）は1号方形周溝墓SD30下層からの出土で、受口状口縁部外面に波状文を施文し、胴部に直線文と波状文を交互に施文する凹線文系甕に相当する。まさに戸水B式と吹上Ⅱ期の併行関係を示す資料である。甕の無文化の比率を基準とすれば、平田段階の様相と吹上Ⅱ期は共通する。また、10の川原町口式は栗林2式新段階の甕〔報告書図版129-1529〕とSX342にて共伴する。

こうした所見を総合的に判断し、吹上Ⅱ期の編年の位置付けを考察すると、小松式系の土器は、壺頸部の突帯装飾手法にA類が含まれる点から、下谷地段階の様相に近いいっぽう、壺の装飾の崩れや甕の徹底した無文化が認められることから、小丸山・平田の各段階の様相にも近い。また、図12-7のような明瞭な凹線文系土器の出土は、平田段階との併行関係を示唆する。そして、吹上Ⅱ期に伴う栗林式は栗林2式新段階に限定された。したがって、吹上Ⅱ期を構成する土器は栗林2

式新段階併行で、小松式の平田段階とその前段階の土器を含むと理解するのが妥当である。笹沢編年吹上Ⅱ期の時間的位置付けが笹沢とは異なるため、「吹上2期」と以後表記する。

次に、吹上Ⅱ期資料と北陸西部各型式との併行関係について触れておきたい。磯部運動公園段階との併行関係を示唆する資料が下谷地・小丸山両遺跡にあり、また磯部運動公園遺跡で栗林2式新段階の無頸壺（図16-17）が共伴している事例を踏まえれば、「豆粒斜行短線文」こそ抽出できないものの、論理的には吹上遺跡に磯部運動公園段階に併行する土器群が含まれる可能性が十分に考えられる。また、図12-7が示すように、吹上Ⅱ期は戸水B式にも併行する。吹上Ⅱ期の北陸系土器は、栗林式系とは対照的に、小松式磯部運動公園段階・専光寺養魚場段階、戸水B式にまたがり、時期幅があるとみてよい。

栗林式と北陸に分布する型式・段階との併行関係が明らかになったので、次に栗林式と関東地方諸型式の併行関係を点検したい。

2. 栗林式と北関東・北武蔵諸型式の併行関係

①栗林式といわれる上野「竜見町式」の併行関係

杉原莊介・乙益重隆により設定された竜見町式〔杉原・乙益1939〕が栗林式と強い類似性をもつことは、多く研究者により説かれている〔井上・柿沼1977, 平野1986, 外山1996, 石川1998〕。そのなかで平野進一は、井上・柿沼編年を批判した上で竜見町式およびその前後の編年を再考した。ここでは「竜見町式に先行する部分→竜見町式の古い部分→竜見町式の新しい部分→竜見町式に後出する部分」の4段階の変遷を提示し、それぞれ該当する遺跡として「八束脛洞窟遺跡→（+）→高崎市浜尻Ⅱ遺跡など→浜尻Ⅰ遺跡など」を挙げた。器形・文様の種類・装飾帯の位置に着目した平野編年はその変遷過程に矛盾はなく、筆者もそれを支持する。ただし、平野編年発表後、より具体的内容を伴った単位資料も存在するため、それを取り上げながらこれまでの栗林式編年と対比する。

平野が「竜見町式に先行する部分」とした資料は、中之条町五十嵐遺跡（図14-1～3）と、月夜野町八束脛洞窟遺跡出土土器（4）である。五十嵐遺跡資料には2+4装飾帯構成の壺胴部破片と（1・2）、胴部上半から中位に横羽状文の施文が限定された、列点を有する甕破片（3）があり、栗林1式に相当する。八束脛遺跡資料の4は、胴部中位の列点をもつため、栗林1式か栗林2式古段階に該当するが、横方向の器面調整はあまりみられず、注意を要する土器である。「竜見町式の古い部分」とされた5の旧箕郷町（現・高崎市）室田出土の壺は、2+4装飾帯構成に大きく3装飾帯が貫入し、舌状文を形成する。栗林2式古段階相当と考えてよいであろう。ただし、本段階に相当する資料は上野内で著しく少ない。

「竜見町式の新しい部分」とされた段階の資料は、上野内に豊富である。そのなかでも基準となる良好の資料が、高崎市浜尻B地点遺跡1号住居跡出土土器（8～16）である〔中村ほか1981, 柿沼・神戸1999a〕。壺は全て〔2・0・0・0〕類型で、頸部縄文帯が明瞭である。また9・10のように一部に2a装飾帯が伴う。2+4装飾帯構成の壺が組成しない点から、栗林2式新段階に該当する資料と考えられる。なお、竜見町式の標式資料とされた高崎市竜見町遺跡出土土器（6・7）は、壺口縁部の開きが先端が平坦になるほど強く、縦羽状文甕の胴部の張りも強い。本稿の栗林式編年に照らし合わせれば、栗林2式中段階かもしくは新段階に該当する資料である。また、環濠集落遺跡である富岡市小塚遺跡〔井上1987〕の多くの土器は本段階に該当し、そのなかでも7号住居跡出土土器は基準となりうる良好な資料である。

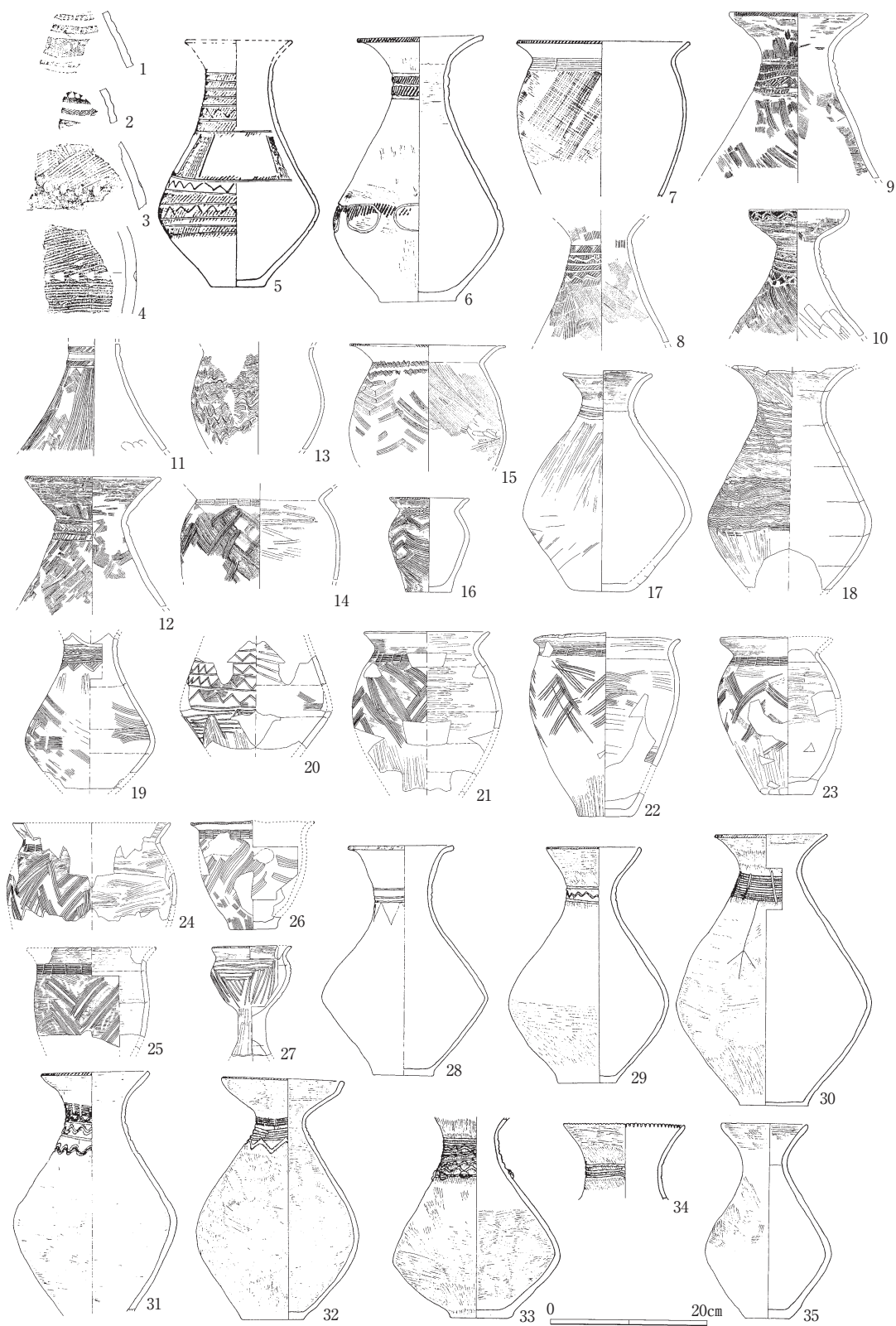


図14 上野(群馬)出土の栗林式関連土器

1～3:五十嵐 4:八束脛 5:室田 6・7:竜見町 8～16:浜尻B1住
17～27:清里・庚申塚17住 28～35:浜尻A1土坑

ところで、平野が「竜見町式に後出する部分」とした全ての土器が、はたして「竜見町式の新しい部分」の直後に該当するものか、やや検討が必要と考える。平野が挙げた高崎市浜尻A地点1号土坑（平野の浜尻I遺跡資料）出土土器〔柿沼・神戸1999b〕、(28～35)はいずれも縄文が装飾から欠落し、装飾帯構成は〔2・0・0・0〕類型か、あるいは〔2・2a・0・0・0〕類型に限られる。頸部のみ装飾帯が限定されること、30のように頸部に複帯構成の櫛描文が施文され、それに縦位の篋描沈線を付加する手法は、吉田式の手法と共通する。したがって、後期初頭に位置づけることが妥当である。また、同じく「竜見町式に後出する部分」の資料として平野が挙げた高槻市林製作所遺跡出土土器〔柿沼・神戸1999c〕は工事中出土のため出土遺構情報が不明であり、単位資料とするには条件が不充分である。

そのため、筆者は「竜見町式の新しい部分」直後の資料として、清里・庚申塚遺跡17号住居跡〔相京1981〕、(17～27)を挙げたい。壺の頸部・胴部装飾や甕の口唇部からの縄文施文の欠落が明瞭であるいっぽう、18や20のように2+4装飾帯構成や、4装飾帯あるいは5装飾帯の残存が確認できる。また、甕は胴部に最大径をもつ資料が高い比率で存在し、胴部は縦羽状文一色であること、そして縦羽状文の間隔が開き、やや粗雑である。したがって、栗林3式に相当する単位資料である。なお、清里・庚申塚遺跡の住居跡の多くは栗林3式に該当し、その上、住居跡を圍繞する環濠も栗林3式である。信濃に栗林3式の環濠集落が認められず、本地に出現する点は、松原遺跡などの大規模集落解体後の動向を探究する上で重要な材料である。

これまでの検討の結果、従来竜見町式と呼ばれてきた土器は、器形・文様・装飾帯構成とも栗林式の範疇であり、型式変化の方向性も長野盆地南部の栗林式と共通する。五十嵐遺跡は栗林1式に、室田遺跡は栗林2式古段階に、浜尻B地点1号住居跡出土土器は栗林2式新段階に、清里・庚申塚遺跡17号住居跡出土土器は栗林3式にそれぞれ対比可能である。

なお、上野の栗林式前段階には石川日出志の設定した長根安坪式がある〔石川2003〕。石川によれば、神保富士塚式の特徴とは遊ヶ崎式の壺に特有の単位文様が崩れ始め、胴部文様が横帯化し、頸部・胴部文様に篋描波状文の採用が顕著になるという。池上式も神保富士塚式と同様な特徴を有し、また栗林1式古段階にも看取できることを先に確認している。それを根拠に「栗林1式古段階－長根安坪式－池上式」という併行関係が成立する。

②栗林式と北武蔵諸型式の併行関係

次に北武蔵に分布する池上式、御新田式、上敷免（新）式、北島式、用土・平段階との併行関係を考えたい。北関東諸型式の設定の多くは石川により進められ、互いに隣接する同一集落遺跡である池上遺跡〔中島・杉崎ほか1984〕と小敷田遺跡〔吉田1991〕では、出土土器に時期差があるとする〔石川2001〕。石川は、池上地区の古段階の土器群（1号環濠出土）、新段階の土器群（小敷田44号土坑出土）、そして小敷田地区でより新しい土器群（小敷田1号方形周溝墓出土）を提示し、3段階の土器の変遷を示した。それぞれの3段階の変遷は、菱形・三角・四角などの単位文が明瞭な段階、前文様構図が崩れることで横帯化が目立ち、波状が顕著となる段階、構図の簡素化と帯の重層化がさらに進行する段階の特徴をもつ。本稿ではそれぞれの段階を、「池上式古段階・池上式新段階、小敷田段階」と呼ぶことにする。

次に、御新田式とは池上式に系譜を引く型式であり、埼玉県北部から栃木県中央部付近に分布する。御新田式を設定した石川は、御新田式に採用される2条から4条の櫛描手法を、中部高地系条

痕文甕の櫛描手法に由来するものであると指摘した〔石川1998：87頁〕。その後、萩野谷正宏は近年の御新田式の地域差・細分をめぐる諸問題を整理し、「広義の御新田式は複数段階に細分できることは間違いない」〔萩野谷2003：110頁〕とし、鈴木正博が上敷免（新）式〔鈴木2001〕とした上敷免遺跡出土の土器〔瀧瀬ほか1993〕は、特徴的な刺突列区画を用いつつ各文様帯の区画が明確化しており、広義の御新田式を特徴づける段階であると評価した。また上敷免遺跡出土土器の各文様帯区画の明確化は栗林式成立期のあり方とも共通するという。また、壺胴下半に相当する栗林式の5装飾帯と広義の御新田式の3文様帯がそれぞれ顕在である点は、それが縮小傾向にある東海や南関東との大きな違いであるとも指摘される〔安藤2002〕。

このように栗林式が御新田式成立に大きく関与することが指摘される中、北島遺跡の報告書が刊行され〔吉田編2003〕、吉田稔は「北島式」を提唱した。北島遺跡では栗林式・栗林式系土器が合計2割前後の割合で出土し、その量は周辺地域一帯のなかで明らかに突出する。萩野谷が池上式に後続すると指摘した刺突列区画や条線の多条化が明瞭であるため、北島式が上敷免（新）式に後続する型式であることは明らかである。

ただし北島式の設定によりかつて石川が設定した御新田式との関係が曖昧となった。御新田式と北島式との差とは明確に分別できる存在ではなく、池上式・小敷田式系の要素を共有基盤としつつ、栗林式の影響の多寡により違いをみせる「広義の御新田式」の地域性と筆者は理解する。

では北武蔵の諸型式は栗林式のいずれに併行するのか。池上式古段階から新段階の土器を出土した池上遺跡1号環濠では栗林1式が出土した（図15-1）、〔石川2001、安藤2005〕。池上遺跡ではそれ以上を絞り込むことはできないが、深谷市宮ヶ谷戸遺跡Y-1号住居跡で池上式新段階（3）と栗林1式の無頸壺（4）が相伴しているため〔埼玉県考古学会 2003：262頁〕、「池上式新段階－栗林1式」という併行関係が成立する。

いっぽう、池上・小敷田遺跡の最新段階と栗林式との接点は、小敷田遺跡4区河川跡出土の2の土器が示す。小形壺の例ではあるが、装飾帯構成は〔2・0・0・0〕類型であり、口縁部は短く開きは弱い。したがって栗林2式古段階に該当する可能性が高い。後述する上敷免（新）式との関係を考慮すれば、小敷田遺跡の下限は栗林2式古段階併行期に求められよう。

では、池上・小敷田両遺跡から出土した小松式土器の時期はどうか。石川が既に指摘するように、小松式は池上式新段階が多い小敷田遺跡にてより多く確認できる。〔石川2001：86頁〕。扇形文・小形化した斜行短線文・胴部施文帯の拡張という特徴から、全て八日市地方様相8期に該当する（図20-25～27）。池上遺跡A地区出土〔中島・杉崎ほか1984：報告書第28図-1〕の小松式土器も八日市地方様相8期に相当するものであり、それらが池上式新段階から小敷田段階と、八日市地方様相8期が併行関係にある根拠材料である。

次に、上敷免（新）式とされた上敷免遺跡Y-3号・Y-4号住居跡出土土器は、小敷田段階に後続する土器群であることは既に指摘されている。壺における各装飾帯区分が明確化される本段階の土器に、遺構外出土例ではあるが栗林式特有の舌状文が施文された壺破片（5）が相伴する可能性が高い。栗林2式中段階もしくは新段階に伴う舌状文は6単位である場合が多いが、本例は単位が幅狭の上、8単位と多く、より古相を呈する。したがって、栗林2式古段階に該当するものと考えられる。

では、上敷免（新）式に後続する北島式と栗林式との併行関係はどうであろうか。出土した栗林式系土器を概観すると、図15-6・7・8・10・11・15のように搬入品かあるいは忠実な模倣品の部類とともに、9・14のように異系統土器との折衷が認められるものも多数出土した。9は、胴部文

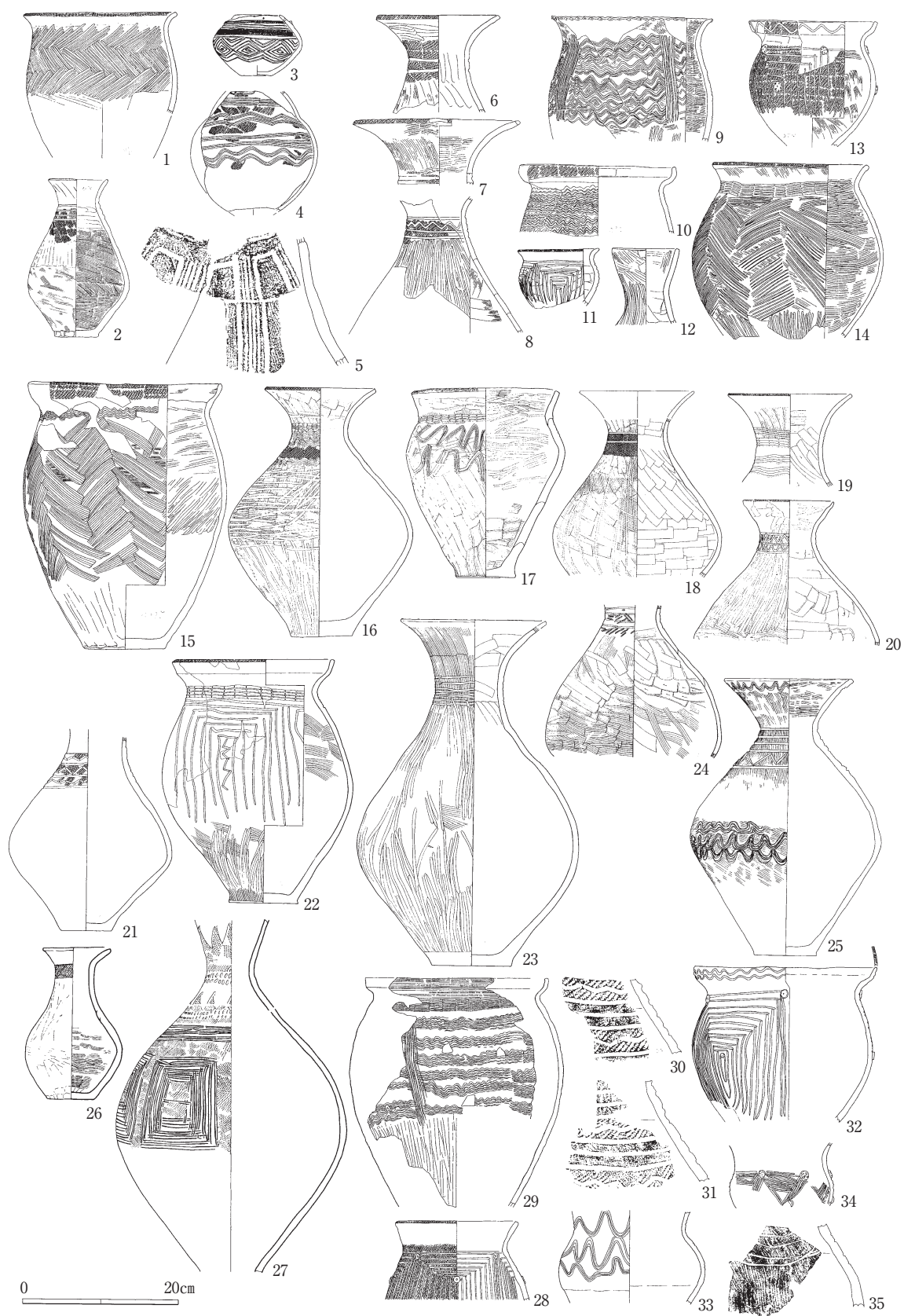


図15 北武蔵・南関東出土の土器

1:池上 2:小敷田 3・4:宮ヶ谷戸 5:上敷免 6~15:北島 16~25:用土・平
26・27:大塚 28・29:明花向B 30・31:上野田西台 32~35:大北

様が栗林式特有であるにもかかわらず、口縁部の処理が宮ノ台式特有の工具押引きになっている。
また14は口唇部先端が若干外側に肥厚し付きだした例で、栗林式の口唇部処理からは外れる。

出土した栗林式の時期を検討すると、壺の装飾帯構成のうち、2+4装飾帯構成が拓本のわずか1点であり、甕の最大径が胴部にあるものが極めて高い比率で存在する(9・10・15)。「コの字重ね文」台付甕は縄文地文が欠落し、「コの字」の最も外の沈線が横一本の沈線で単位間で共有され、簡略化が明瞭である(11)。したがって、北島遺跡出土の栗林式およびその系統の土器の大多数は栗林2式新段階に該当することが濃厚である。それはかつて青木一男・石川日出志が栗林2式新段階に相当すると発言と一致する。⁽¹¹⁾

ただし、若干ではあるが、口縁部の開きが弱い壺口縁部(6)、振幅が小さく帯の重層が密な波状文甕(10)が含まれることを考慮すれば、北島遺跡出土の栗林式系土器は栗林2式中段階を少数含む可能性がある。なお、安藤は12の赤彩壺口縁部資料を自身の編年の宮ノ台式SiIII期とし、11と12が同一遺構で共伴することから、「栗林式中段階でも新相」[安藤2005:115頁]とSiIII期の併行関係を指摘する。したがって、「栗林2式新段階－北島式の大多数－宮ノ台式SiIII期」という併行関係が成立する。

さて、北島式に後続する段階の土器が熊谷市前中西遺跡出土土器[吉野2002・2003]に含まれる可能性が濃厚だが、中期北島式から後期初頭まで長期継続する遺跡である上に、良好な単位資料が欠落している。そのため、ここでは北島式とは直接的系譜関係にはないが、中部高地系土器が主体の用土・平遺跡出土土器[丑野1983]を検討したい。用土・平遺跡出土の土器は、富田和夫・中村倉司により百瀬式併行と位置づけられており[富田・中村1986]、壺では縄文施文・篋描沈線文が残存しつつも櫛描文が目立ち、甕では頸部の等間隔止めの簾状文が特徴であると指摘する。富田・中村の理解は今なお有効と考えるが、用土・平遺跡出土の全ての土器が栗林3式のなかでも最新相であるとは限らない。例えば、18のように7号住居跡出土土器の壺は、頸部の縄文帯が明瞭であり、栗林3式までは下らない。また21から24は12号住居跡出土土器も同様に、21・24の栗林式系の壺はやはり栗林3式までは下らないものである。いっぽう、1号住居跡出土の16の壺は、縄文帯が頸部に認められるものの、頸部装飾に等間隔止めの簾状文や波状文が採用され、胴部最大径が胴部中位にある。9号住居跡出土の19の壺も16と同様に櫛描文のみが頸部装飾に採用されている。また25も櫛描文の採用が明瞭な壺であり、その上、頸部装飾から縄文帯が欠落し、4装飾帯もしくは5装飾帯に乱れた波状文を施文する。16・19・25の壺は栗林3式と同内容の土器であり、北関東の清里・庚申塚遺跡17号住居跡段階に併行する。したがって、用土・平遺跡出土土器は、栗林2式新段階から栗林3式に該当する。なお、本遺跡には頸部から完全に縄文が欠落した単位資料が認められないため、後期に該当する土器群は存在しないと考える。

これまでの検討により、長野盆地南部の栗林式土器の編年を基軸として、信濃各地・上野・北武蔵の諸型式・諸段階の併行関係を検討した。次に宮ノ台式土器との併行関係を整理し、広域編年網を提示したい。

3. 栗林式と宮ノ台式の併行関係

栗林式およびその系統の土器は南関東の宮ノ台式土器分布圏にまで及ぶ。既に安藤[安藤1991]・柿沼[柿沼2003]の先行研究で併行関係は整理されており、筆者もそれに異論はない。ここでは出土した栗林式土器を、筆者の栗林式編年にもとづき確認するにとどめる。

宮ノ台式土器の編年は安藤編年〔安藤1990〕に依拠するが、安藤は小敷田遺跡出土土器にSiII期相当の土器が多いと言及し、先に触れたように北島式とSiIII期の宮ノ台式細頸壺が共伴することを指摘した。また、SiIII期に限定される横浜市大塚遺跡B環濠中・下層出土土器に、北島式の壺（図15-27）と栗林2式の壺（26）・甕〔武井1994：報告書第39図-22〕が共伴した〔安藤2005〕。南関東の事例と照らし合わせても、「宮ノ台式SiIII期－北島式－栗林2式」という併行関係は成立する。

次に、大宮台地の宮ノ台式土器編年の基準となる柿沼編年I-2期（SiIIIa期併行）には、宮ノ台式と栗林式の共伴事例が多数確認できる。事例を以下に挙げると、明花向B遺跡〔剣持1984〕6号住居跡出土の甕29は、間隔の開くやや乱れた波状文の採用と頸部に等間隔止めの簾状文を採用している点から栗林2式新段階であり、28の「コの字重ね文」台付甕は地文に縄文が施文される上に、円形浮文の貼付、整った沈線の間隔という点から、栗林2式新段階までは下ならず、栗林2式中段階とするのが妥当であろう。柿沼編年I-3期（安藤編年SiIIIb期併行）の上野田西台遺跡〔小倉1987・大塚1988〕では、2+4装飾帯をもつ壺破片30・31が出土したが、無文帯内に沈線を一条施文する手法を新しいものと理解すれば、栗林2式中段階まで下がる可能性も充分ある。

柿沼編年II-1期からII-2期〔安藤編年SiIV期とその直後〕の大和田本村北遺跡〔笹森ほか1998〕や大北遺跡〔青木・小倉ほか1982〕で出土した「コの字重ね文」台付甕（32）は、地文の縄文が完全に欠落し、沈線も乱れ気味であるため、柿沼の指摘どおり栗林3式とするのが妥当である。したがって「宮ノ台式SiIV期あるいはその直後－栗林3式」という併行関係を得ることができる。

なお、他地域とつながりを示す資料に33から35の土器を挙げる。大北遺跡の33の短頸壺は二本単位の工具により3段の大振り波状文を胴部に施文しており、同じく短頸壺の飛驒の高山市サネンガ洞や山口平遺跡〔田中ほか1993〕とのつながりを想起させる。34の台付甕も33と同様の工具が用いられ、山形文を施文後に空白部を横条痕で充填する。二本単位の工具による波状文や山形文は、弥生III期初頭の松本南部の境窪遺跡〔竹原ほか1998〕や、詳細な時期は不明ながら飛驒の高山市界限で散見できる。33から35の土器にみられる手法は栗林式および宮ノ台式成立以前から中部高地や関東山地一帯に広がる中部高地系条痕文土器の手法に元々由来するものと推定される。また、大北遺跡の35の壺破片は、やや乱れながらも同心円状の文様が確認でき、川原町口式かあるいはその直後の土器と推定される。大北遺跡における栗林3式と川原町口式の併行関係と、先に北陸の平田遺跡や松原遺跡で確認できた栗林式と東北系土器の併行関係には矛盾がない。

4. 広域編年対応表の提示

これまで検討した各型式・段階の併行関係と、尾張の石黒立人・宮腰健司の編年〔石黒・宮腰1996〕の対応関係を示すと表2のようになる。加賀の八日市地方編年と尾張編年との併行関係は福海貴子〔福海2003〕に従う。また、尾張と三河・遠江・駿河の併行関係は加納・石黒の案に従った〔加納・石黒編2002〕。

なお、本稿では個体でも時期の識別がある程度可能な段階を画期とする。尾張編年の様式区分を基軸とし、栗林式直前段階を弥生III期初頭、栗林1式古段階を弥生III期前半、栗林1式新段階を弥生III期後半、栗林2式古・中段階を弥生III期終末、栗林2式新段階を弥生IV期前半、栗林3式を弥生IV後半とする。

ここまでの編年論的研究を基盤とし、次章では本稿第二の課題である栗林式と小松式の分布論的検討を行う。それにより、土器分布の動態の背景にある人の「うごき」に、一定の見通しを得るこ

とにする。

④……………小松式土器と栗林式土器の分布論的検討

1. 異型式土器分布圏内における栗林式とその系統の土器

栗林式およびその系統の土器は、北陸地方一帯と、飛騨・武蔵・相模・駿河にまで広がる。本章では土器の時期と可能な限り胎土に注目し、栗林式の分布の動態と信濃からの搬入品土器の有無について確認する。以下、地域別に資料を点検する。

①加賀・越中の事例

北陸各県において栗林式およびその系統の土器が出土した遺跡の探索にあたっては久田正弘の集成〔久田1991・1999〕を参照し、それに筆者が新たに収集したものを追加した。

北陸西部では加賀（現・石川県）が分布の最も西端となる。加賀出土の栗林式系土器は大多数が在地産の白色系胎土を使用しており、搬入品の可能性があるのは図16-19の下安原海岸遺跡例〔安1997〕のみである。まず加賀・能登の事例からみてみよう。

栗林1式あるいは栗林2式古段階に顕著に見られる2+4装飾帯は、図16-1・4の吉崎・次場遺跡〔福島1987〕、8の久江ツカノコシ遺跡〔安2003〕、10の東的場タケノハナ遺跡〔久田2004〕、14から16の恐らく同一個体であろう磯部運動公園遺跡〔増山1988〕で出土した。1の吉崎次場遺跡I-4号溝例は、2+4装飾帯構成でありながら縄文帯と無文帯が交互に重畳されず、より幅広に無文帯を2帯介在させる。また5装飾帯の連弧文に一部から充填縄文が欠落している。そのため新しい2+4装飾帯の手法と理解可能であり、栗林2式中段階に比定できる。4については器形が栗林式から逸脱しているが、装飾帯構成では1と同様に胴部装飾帯の幅が不均一であること、5装飾帯の波状沈線文内の充填縄文の欠落から栗林2式中段階と考える。8の久江ツカノコシ遺跡第10号土坑例は広口壺で、5装飾帯に相当する波状文が胴部上半中に押し込まれている点が新しい要素とも受け取れるが、約2cmという狭い幅の充填刺突帯と無文帯が交互に重畳している点から栗林1式新段階と考える。10の東的場タケノハナ遺跡例は胴部上半に縄文帯と充填刺突帯を交互に繰り返す、5装飾帯の連弧文内にも充填縄文がみられる。類例は吹上1期の旧河道〔笹沢2006：図版132-1596〕にあり、上越から飯山にかけてよくみられる手法である。栗林1式と考えて間違いはない。また、能登の高田遺跡出土〔四柳1999〕の無頸壺破片（5）も栗林1式に該当するものである。

次に、栗林2式中段階に該当する資料を点検しよう。19の下安原海岸遺跡の壺胴部下半の破片は、地文の縄文に幅広の連弧文と円形浮文が3単位が施されるため、栗林2式中段階か新段階である。なお北加賀の畝田西〔立原ほか2006：第52図-673〕は頸部破片だが、2+4装飾帯構成の一部が確認でき、栗林式の古相に該当することは間違いはない。

以上の例のうち、吉崎次場遺跡の1と久江ツカノコシ遺跡の8が八日市地方様相8期の土器と共存する。このように北陸西部における栗林1式から栗林2式中段階までの土器は南加賀では認められず、北加賀の金沢市界隈・能登の7遺跡に認められ、比較的限定された範囲に分布する（図17）。

次の段階の栗林2式新段階以降、分布範囲はより広がり、出土量も前段階を明らかに上回る。能

表 2 栗林式土器の編年と併行関係

	尾張	三河	加賀	上越	柏崎・佐渡	信濃北部	信濃中部	上野	北武蔵	南関東	西遠江	東遠江	西駿河	東駿河
弥生Ⅲ 期初頭	Ⅲ-1	Ⅳ（篠束）	八日市 6			（松節）	（境窪）	神保富士塚	（三ヶ尻上古）	遊ヶ崎	Ⅲ-1/Ⅲ-2 （梶子 D・D' 層）	Ⅲ-1/Ⅲ-2	有東 SK05	中手乱・ 鶴喰
弥生Ⅲ 期前半	Ⅲ-2	Ⅴ-1/Ⅴ-2 （瓜郷下層）	八日市 7				吹上 1 古	栗林 1 古 （篠ノ井 高速道）	（黒沢川右岸）	長根安坪				池上古（1 環）
	Ⅲ-3													
弥生Ⅲ 期後半	Ⅲ-4		Ⅴ-3 （瓜郷 1 亜）	八日市 8	吹上 1 新	下谷地 小丸山	栗林 1 新	（中城原の一部）	（五十嵐）	池上新 （小敷田 44 土）	大里東	Ⅲ-3	Ⅲ-3	Ⅳ-1
弥生Ⅲ 期終末	Ⅲ-5	磯部			磯部		吹上 2	栗林 2 古／2 中	（宮渚本村の一部）	（室田）	小敷田（1 号方周） 上敷免新			Sill
弥生Ⅳ 期前半	Ⅳ-1/Ⅳ-2		Ⅵ-1/Ⅵ-2	専光寺		平田・箕輪 松ノ脇						栗林 2 新	（県町 16・24 住）	
弥生Ⅳ 期後半	Ⅳ-3	Ⅶ	戸水 B				栗林 3	（百瀬・県町 7 住）	（清里庚申塚 17 住）	（用土・平の一部）	SiIV	Ⅳ	Ⅳ-3/ Ⅳ-4	Ⅳ-4

※各期の／は時期差、・は併行の型式または様式を示す。

※三河は前田清彦、鈴木とよ江、遠江・駿河は佐藤由紀男、萩野谷正宏、篠原和大の編年による。石黒・加納編2002参照。

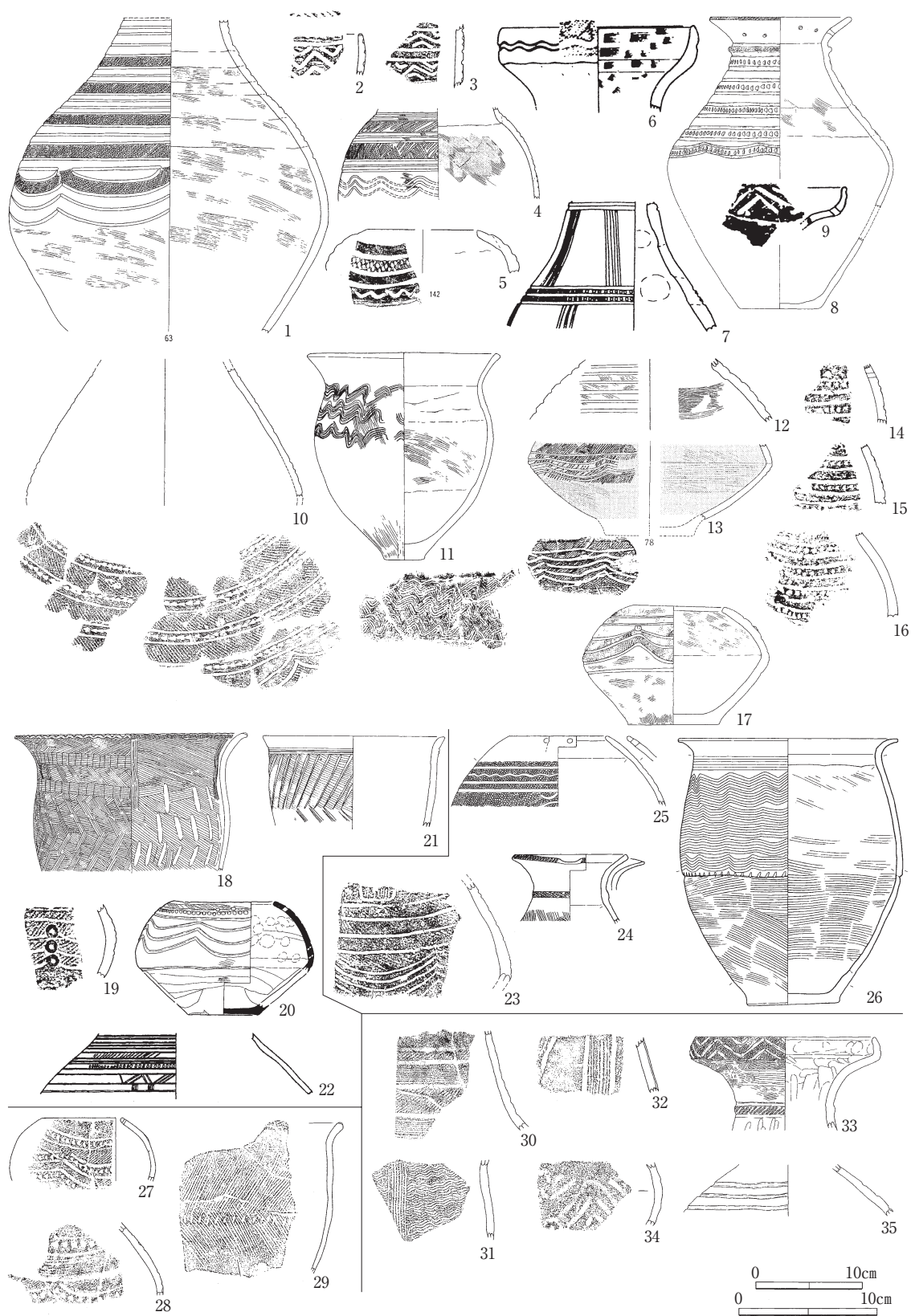


図16 加賀・能登・越中出土の栗林式関連土器

1～4: 吉崎・次場 5: 高田 6: 真脇 7: 藤野 8: 久江ツカノコシ 9: 千野高塚
10・11: 東の場タケノハナ 12: 上荒屋 13: 新保本町西 14～17: 磯部運動公園 18: 野本 19: 下安原海岸
20: 八日市地方 21: 浦田 22: 本田宮田 23～26: 石塚 27～29: 高島 30～35: 作道

登では、舌状文が簡略化した7の藤野遺跡例〔久田1993〕は栗林2式新段階と考えられる。11の東的場タケノハナ遺跡例は胴部上半に櫛描波状文があり、口縁部が伸長する例である。後期の器形に近く、栗林3式に下る可能性も考えられる。12の上荒屋遺跡〔小西1995〕、13の新保本町西遺跡III〔楠1992〕、17の磯部運動公園遺跡、18の野本遺跡〔前田1995〕の各例と、畝田西遺跡〔立原ほか2006：第53図-689〕は北加賀出土例であり、12の壺は2+4装飾帯が形骸化し、横走沈線が多条化した例、13の壺は5装飾帯にある連弧文の狭隘化と充填縄文が欠落し、18の甕は幅広装飾帯中に4段の横走羽状文が施される。12のみ栗林2式中段階から新段階と時期幅をもつが、そのほかはいずれも栗林2式新段階に該当する手法である。

以上の例のうち、12・13・17・18は土坑・溝資料であり、いずれも小松式磯部運動公園段階の土器と共伴した。なお、南加賀では20の八日市地方遺跡例〔福海2003〕が今のところ栗林系土器の唯一の例である。文様から栗林2式新段階に比定できる無頸壺であるが、共伴する在地土器の特定は難しい。

次に越中の事例を点検する。そこでは特に石塚遺跡・作道遺跡・高島A遺跡の、越中西部の3遺跡に事例が集中する。また越中から出土した栗林式系土器の胎土は在地産のものに限られ、信濃産と確実にいえるものはない。

22の越中の大門町本田宮田遺跡例〔尾野寺1998〕は、2+4装飾帯構成が残存しながらも文様の交互重畳が形骸化し、栗林2式中段階以降に該当する。石塚遺跡〔山口1987、山口1988、岡田・山口2001、藤田2003〕では破片・個体で合計17点出土した。23から26はSD101出土資料である。23は5装飾帯の連弧文の形骸化から栗林2式新段階に相当する壺の胴部である。24はSK05から出土した口縁部の外反の弱い壺で、わずだが3装飾帯に舌状文が認められる。しかし「栗林2式古段階から新段階」以上に時期を絞り込むことは困難である。25の無頸壺の縄文地文に篋描文を付加する手法は、栗林2式新段階より古い手法である。26の甕は胴部中央に段があり、刻目が付加される。25・26とも栗林2式新段階までは下らない。石塚遺跡ではこれまでのところ栗林1式に確実に該当する確実な例はなく、栗林2式古段階ないし栗林2式中段階以降の資料に限られる。

27から29は高島A遺跡〔金三津2007〕出土資料で、合計7点が出土した。壺および無頸壺は2+4装飾帯を基本とする装飾で、甕は横走羽状文に列点が付加される。いずれも栗林1式に該当する。

30から35は作道遺跡〔金三津2006〕出土資料で、合計6点が出土した。30は2+4装飾帯構成で、装飾幅がほぼ均一なことから栗林1式に該当し、31の縦スリットを有する波状文甕は、栗林2式古段階から新段階のいずれかに該当する。33の受口状口縁壺は、受口部の屈曲が明瞭な上、やや内傾気味な点から栗林2式新段階までは下らない。34・35は栗林2式新段階に該当する壺破片である。隣接する集落遺跡である作道遺跡と高島A遺跡では、合計13点と石塚遺跡に匹敵する出土が認められ、栗林1式から栗林2式新段階相当の土器が確認できる。

なお、21の立山町浦田遺跡〔池野1987〕出土の甕は、横走羽状文の装飾幅が胴部下半にまで及ぶ点で栗林2式新段階以降に相当する。そのほか大島町小林遺跡⁽¹²⁾で栗林1式の無頸壺〔田中2003：第34図-402〕と栗林2式新段階の相当する壺〔田中2003：第30図-310〕が出土した。

これまでの検討の結果、栗林2式新段階の土器を出土する遺跡は加賀・能登・越中で13遺跡に増加し、分布範囲もさらに広がりを見せ、出土点数も2倍以上になる。また越中では石塚遺跡と作道・高島A遺跡に栗林式系土器の出土が偏ることが明らかとなった（図17）。



図17 栗林式土器の分布(栗林式の要素をもつ土器も含む)

②越後の事例

越後出土の栗林式およびその系統の土器の時期については、「第3章第1節」にて既に触れている。ここでは胎土を中心に説明したい。

図13-1から5の下谷地遺跡例のうち1・2は赤褐色の胎土であり、なおかつ長石が土器表面に目立つ。信濃からの搬入品であることはほぼ間違いない。ただし、搬入品の栗林式の割合は在地胎土の栗林式に比べ少数派である。実見はしていないが下越の加治川村山草荷遺跡出土土器にも栗林1式新段階⁽¹³⁾に該当する土器が存在する。先述した小丸山遺跡と吹上遺跡を含め、栗林1式土器を出土した越後の遺跡はここに挙げた4遺跡に限られる。

次に、栗林2式古・中段階を出土する遺跡は小丸山遺跡に限られており、いっぽう吹上遺跡はこの間の土器が確認できないため、集落が断絶する。小丸山遺跡出土の栗林式土器は、色調が灰白色でチャートを多く含み、海浜部遺跡特有のあり方である。信濃からの搬入品と思われる栗林式土器は認められない。

さて、栗林2式新段階併行期になると、吹上遺跡では再び集落が再構築され、栗林式土器が約7割を占めるあり方となり、前段階とはうってかわって比率が逆転する。また栗林2式新段階の栗林式系土器を出土する遺跡が佐渡の平田遺跡・箕輪遺跡・道端遺跡〔沢田編2006〕と合計4遺跡存在し、その範囲も上越・佐渡および下越の荒川付近にまで拡大する。

ここで注目したいのは栗林2式新段階併行期に、信濃から搬入されたと考えられる栗林式土器の分布域のあり方が大きく変化する点である。まず吹上遺跡から出土した栗林式系土器の胎土を分類し、信濃から搬入された土器の比率をみてみよう。

当該期の吹上遺跡出土の土器胎土は、色調と胎土に含有される鉱物の種類により分類が比較的容易に可能である。まず胎土を以下のように分類した。焼成後の色調が白色系で流紋岩の粒を多量に含む胎土をWW類、灰白色系で流紋岩の粒を多量に含むW類、色調が灰白色と茶色の中間色で、角閃石・流紋岩が目立ち、長石を少々含むLW類、色調が茶系で長石が多量に含まれるL類、色調が赤褐色系でなおかつ表面が砂質で、角閃石や長石が目立つYL類、色調が特徴ある黒色系であるB類の6種類に分類した。本稿ではこれを「胎土グループ」と呼ぶことにする⁽¹⁴⁾。

ただし、分類された胎土グループの一つ一つを特定の胎土採取地と結びつけるためには、水沢教子が長野盆地南部で実践するように、土器をスライスした薄片を偏光顕微鏡を用い観察するという手続きが必要である〔水沢2007〕。確かに胎土の産地をより詳細に特定しようとした場合、肉眼観察には自ずと限界がある。しかし、海浜部と沖積平野主体の上越の高田平野の在地産か、山間部の信濃産かという大枠での産地の特定の場合、含有される鉱物の組成から判断が可能である。長石や角閃石は火成岩や変成岩のほとんどの含有される鉱物であり、火成岩系石材が多量に出土する山間部ほどその比率が高くなるのは当然のことである。また、胎土が茶系・赤褐色系となるのは、胎土に鉄分が多く含まれることも影響しており、やはり鉄分質が多い山間部と関係が深い。土器の朱の原料である紅殻（ベンガラ）は鉄鋼石の一種である酸化鉄であり、山間部の土器型式である栗林式と箱清水式にそれが顕著であることは、山間部の鉄分質鉱物の豊富さを如実に示す。

そうした鉱物分布の偏在性を根拠に、吹上遺跡の胎土グループを産地と結びつけると、白色あるいは灰白色系で、長石を含まないW類とWW類は高田平野産、茶系または赤褐色系で、長石や角閃石の含有が目立つL類とYL類は信濃産と推定される。色調そして含有鉱物組成上、L類は両産地の中間的様相である。色調が特徴ある黒色系のB類は、少数派であるものの飯山の小泉遺跡群の小形壺でみられ〔望月ほか1995：第134図-191〕、信濃産の可能性が高い。

では、吹上遺跡における栗林2式新段階の栗林式土器の産地を検討しよう。吹上遺跡から出土した栗林式土器は、器形・文様とも千曲川流域とほとんど大差ない（図12-1～5）。拓本の除く図化資料に対し、器種別に推定産地を示すと、壺は高田平野産が16点・信濃産が12点、甕は高田平野産が33点・信濃産が34点、台付甕は高田平野産が4点・信濃産が5点、鉢は6点全てが高田平野産、高坏は高田平野産が5点・信濃産が1点、蓋は高田平野産が3点・信濃産が3点、赤彩小形壺は3点全てが信濃産という結果を得た。鉢と赤彩小形壺がいずれかの産地に偏る結果が認められるが、壺と甕という主要器種では比率は拮抗する。吹上遺跡は、栗林2式新段階の栗林式土器の出土が図化総点数にして127点であり、それは同時期の他遺跡に比べ、明らかに突出した出土量である。それとともに、図化全総数127点のうち、45.7%が信濃産に相当し、搬入品の出土量も多量である。吹上1期の栗林1式段階が図化全総数41点で、48.8%が信濃産に相当する結果を得ているが、前後する段階を比較した場合でも、栗林2式新段階の搬入品量は増加しているという傾向は変わらない。

いっぽうで、平田遺跡・箕輪遺跡など吹上遺跡と同時期の遺跡では、栗林式およびその系統の土器は流紋岩を多分に含む灰白色系土器であり、信濃からの搬入品と推定される土器は一切認められない。

すなわち、栗林2式新段階併行期の高田平野・柏崎界隈・佐渡では、栗林式およびその系統の土器を出土する遺跡が増加するいっぽうで、信濃からの搬入品土器が著しく吹上遺跡に偏るという実態が存在するのである。その背景に、栗林2式新段階併行期の人々の「うごき」が、以前にくらべ大きく変化することを推察することは妥当であろう。

さて、次の段階の栗林3式併行期には、栗林式およびその系統の土器の分布域が再び変化する。まず挙げたいのは、栗林1式から栗林2式新段階まで分布が濃密であった高田平野・柏崎市界隈に栗林3式土器が認められない点である。いっぽうで栗林3式は、信濃川を下った平野部の三条市や海岸部の和島村、山草荷遺跡など中越・下越に多く認められるようになる(図17)。三条市内野手遺跡〔金子1999〕では、壺の頸部に2段の簾状文を施文する壺破片が方形周溝墓から出土した。縄文地文が欠落していることから、栗林3式とするのが妥当である。また、その土器は方形周溝墓の周溝内で東北部系の御山村下式と共伴しており、いままでの編年と矛盾がない。笹沢は栗林3式段階の分布の変化を、「信州系(栗林)集団の海岸ルート開拓から内陸ルート重視への方向転換」と評価している〔笹沢2005〕。

③飛騨・美濃・尾張の事例

次に、飛騨・美濃・尾張の栗林式系土器はどうか。決して数は多くないものの、山岳地域の飛騨でも確認できる。現在の高山市を中心とする高山盆地には、弥生中期後葉に「内垣内式」が分布し、南飛騨の下呂市までその分布は確認できる。型式を設定した石川日出志によると内垣内式に特徴的である横羽状文甕は、口縁部を肥厚させるものが卓越し、一・二本、櫛描きの横羽状文、小口板によるナデとハケ整形が明瞭であるとする。したがって櫛条痕甕(美濃型条痕文甕)の範疇から外れる属性内容であると指摘する〔石川1995〕。

内垣内式に共伴して、高山市薬師野遺跡〔石原・吉朝1981〕で搬入品の栗林式土器が2点、高蔵式とともに出土している点を石川は指摘し、各型式の併行関係の論拠とした。薬師野遺跡出土の栗林式土器(図18-1・2)は破片資料だが、栗林式でも中・新相に該当する土器である。同市赤保木遺跡でも、近年、内垣内式とともに栗林1式に該当するであろう土器片が出土し〔平田編2007〕、内垣内式が弥生III期まで遡る可能性を示唆する。

さらに筆者は、上宝村内出土(蔵柱小中学校保管)の栗林式系小形壺(図18-6)〔本永・吉朝2005〕を実見にて確認し、飛騨の高山盆地のみならず、飛騨東部の山岳地帯に栗林式系土器が分布している確証を得た。保管先の蔵柱小中学校は高山盆地から神通川支流の高原川へ抜ける峠道沿いにあり、そこは高山盆地との交流では通過点になる場所である。つまり、「信濃の松本盆地－上宝村内－高山盆地」の間は、峠をまたぎつつ、異集団間交流が行われていた地域と考えられる。

蔵柱小中学校保管土器の出土地に関する詳細は不明だが、残存した部分の器高約15cmで口縁部が欠けている。器形は胴部下半に最大径をもち、胴部上半と下半の境がやや強く屈曲する。頸部に3条の篋描沈線を引き、沈線間には列点を施文する。施文順序は「列点→沈線」の順である。ここまでの属性で栗林式でも後半に該当する土器と判明する。ただし、頸部最上部分には横方向にやや押し引き気味長い列点が施文される。それは典型的な栗林式には認められない文様であり、むしろ境

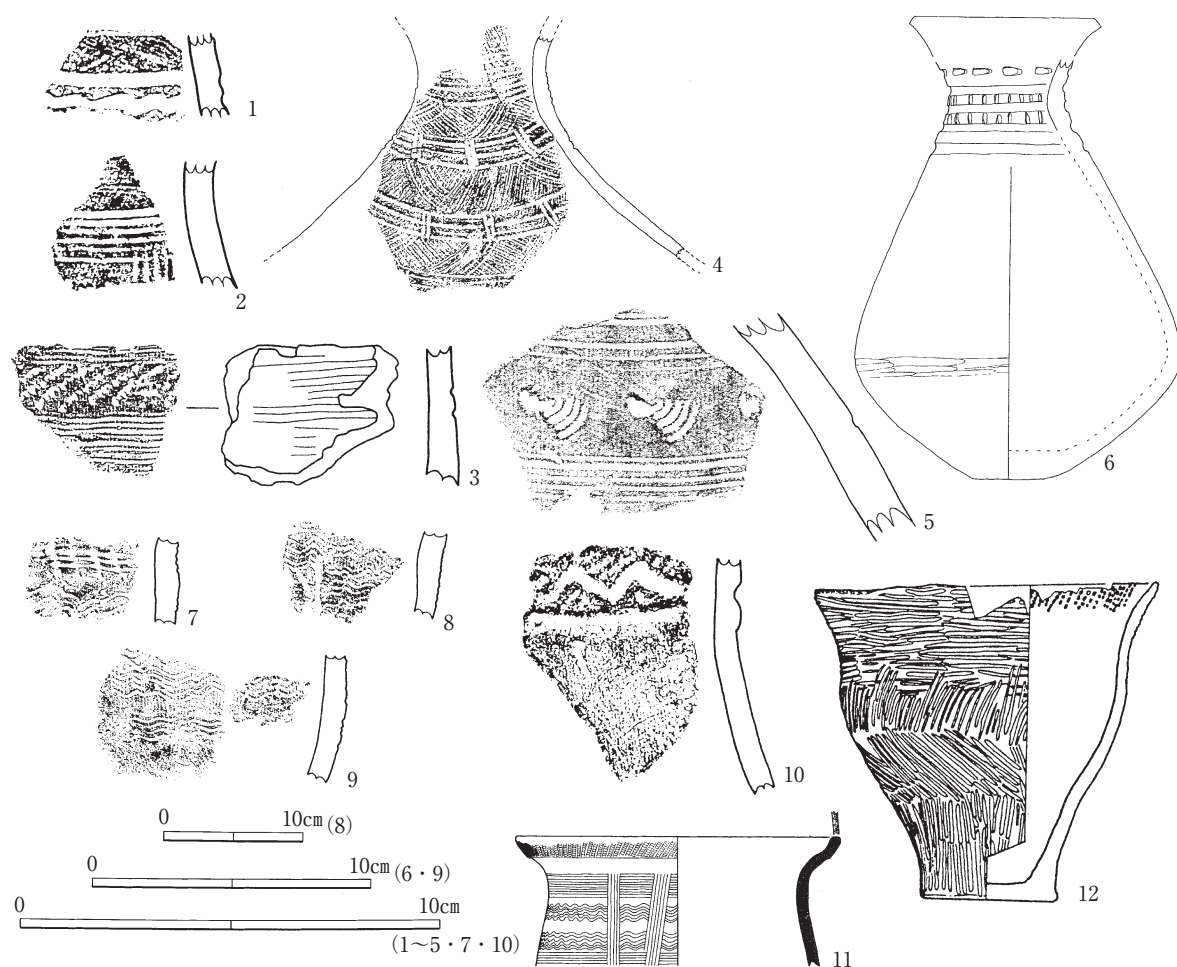


図18 飛騨・尾張中出土の栗林式関連土器など
1・2:薬師野 3:赤保木 4・5:亀ヶ平 6:上宝村内 7~9:丸山
10:上ヶ平 11:朝日 12:福松砥沢

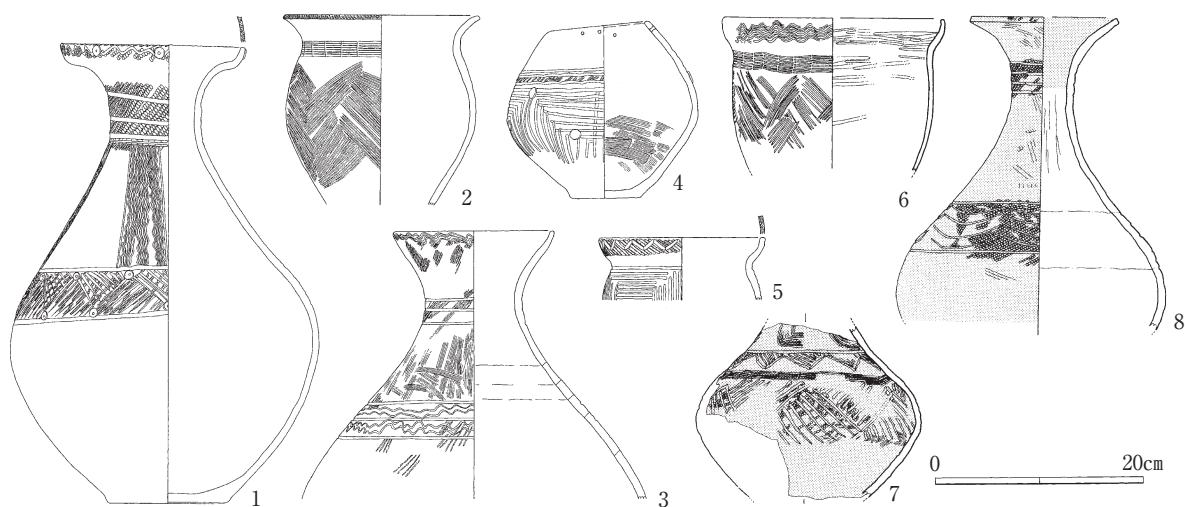


図19 信濃南部・駿河出土の栗林式関連土器
1~5:恒川 6~8:川合

窪段階の壺頸部を横走る円形刺突文に系譜を辿ることができるだろう。時期は栗林2式新段階か、あるいは栗林3式に該当する。胎土を見る限り積極的に搬入品とはいえず、在地の施文手法を取り入れた栗林式系土器である。

また、上宝村から南へ8kmほどの飛騨東部山岳地帯にある丹生川村の丸山遺跡では、頸部に等間隔止めの簾状文と胴部に波状文をもつ甕（7～9）が出土した〔伊藤編1998〕。全て破片資料であるが栗林3式に比定できる。上宝村内出土土器とともに丸山遺跡の栗林式系土器は、高山盆地と信濃の中間地帯に残された貴重な交流の足跡である。

そうした栗林式新相の土器の分布と連動するかのようになり、変質輝緑岩製の榎田型太形蛤刃石斧が高山・国府・宮村地区の赤保木・ひじ山〔田中・吉朝ほか1993〕、荒城神社・立石〔吉朝2007〕、亀ヶ平〔吉朝2004〕の各遺跡で出土する⁽¹⁵⁾。したがって、栗林2式新段階前後から飛騨と信濃が頻繁に交流していたことを想起させる。信濃の諏訪市福松砥沢遺跡では栗林2式中段階ないし新段階の土器とともに、東美濃地域に特徴的に分布する櫛条痕甕（美濃型条痕甕）が出土した（図18-12）。信濃ではいまだその1例に留まる。高山盆地界隈に分布する内垣内式そのものの発見はないものの、信濃と飛騨・東美濃に双方向の交流が存在することを示す貴重な土器である。

ところで、高山市界隈は栗林式集団との交流にとどまらず、尾張・三河方面との交流も確認できる。高山市（旧宮村）の亀ヶ平遺跡では、在地型式の内垣内式甕とともに、三河に分布する長床式（図18-4）と尾張に分布する高蔵式（5）が共伴した。すなわち、多方面の異系統土器の出土に示されるように、高山盆地一帯は「文化の交差点」の様相下であり、内垣内式集団は、東の栗林式、南の高蔵式・長床式と交流していることが明らかである。上宝村本郷地区ではサヌカイト製打製尖頭器が表採されており〔石黒2002〕、それがサヌカイト製石材を石器用石材として多用する高蔵式集団によりもたらされたものであることは充分可能性がある。

次に、南飛騨・美濃・尾張に目を移すと、高山盆地界隈ほど事例は多くはないものの、下呂市上ヶ平遺跡で搬入品かあるいは忠実に模倣された栗林式の壺が出土した（図18-10）、〔八賀編2002〕。また尾張の朝日遺跡出土の栗林式系甕（11）、〔大参ほか1975〕は、受口状口縁部の先端部の外反が明瞭なことから、栗林2式新段階にまで下がる資料と推定する。

④北武蔵の事例

第3章第2項の②で、北武蔵の深谷・熊谷市界隈、南武蔵から出土する栗林式およびその系統の土器の時期について触れている。ここでは胎土の問題を中心に触れ、信濃産栗林式土器の搬入品量の推移を考えたい。

土器編年上の重要な遺跡として度々登場する池上遺跡は、石川によれば個体数にして2点、拓本数にして7点の「栗林式系土器」が出土するという〔石川2001〕。石川の集計には栗林式直前の段階の土器を含むものだが、栗林2式にまで下がる資料は池上遺跡には認められない。胎土は確認することができなかった。

小敷田遺跡では個体数にして2点、拓本数にして11点が出土した〔石川2001〕。時期は栗林1式新段階から栗林2式古段階と幅がある。小敷田遺跡の栗林式系の、特に甕の胎土は2mm前後の大きな石英、チャートに雲母片岩の粒を含有し、焼成後の色調は褐色を基調とする（写真1）。特に雲母片岩は光沢を帯びるため、肉眼でも観察が容易である。千曲川流域からの搬入品と推定される資料は認められなかった。

次に、北島遺跡では67点の栗林式系土器を抽出することができ、全ての胎土を観察した。時期は栗林2式新段階相当が大多数であり、一部、栗林2式中段階相当を含む。先述したように、周辺一帯の遺跡のなかで、最も栗林式・栗林式系・栗林式の要素を取り込む土器が出土する遺跡である。胎土は大きく、A類：角閃石と長石を表面に1%程度微量に含み、色調が褐色ないし赤褐色（写真2）、B類：1mmあるいはそれ未満の小さな石英・チャート粒を表面に1%程度含有し、色調は灰白色、C類：2mm程度の石英・チャート粒を表面に5%程度含有し、色調は灰白色（写真3）、D類：Dに雲母片岩を含む、の4つにグループ化できる⁽¹⁶⁾。集計の結果、A類は1点、B類は4点、C類とD類の合計は62点であった。D類は小敷田遺跡の栗林式系に認められた胎土（写真1）と同類であり、B・C・D類の胎土は寄居・深谷・熊谷一帯の櫛引台地・妻沼低地の遺跡によく認められる。在地の胎土であることは間違いなからう。A類の胎土のみ、千曲川流域の可能性が残されたが、そう仮定したとしても搬入品の量は極めて少ない。

また上敷免遺跡では先述したように包含層から栗林2式古段階相当の壺破片が1点出土した（図15-5）。胎土は北島遺跡のA類に該当し、搬入品の可能性が高い。そのほか、前中西〔吉野2002・2003〕、木曾免・塚越渡戸〔埼玉県考古学会2003〕の各遺跡で栗林2式新段階に相当する壺・甕が各1個体ずつ報告されている。

このように、越中の事例と同様に、異系統土器分布圏である北武蔵の北島遺跡において、栗林2式新段階の栗林式系土器が集中出土することが判明した。

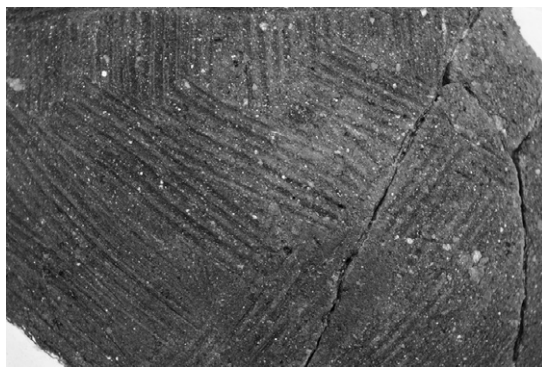


写真1 小敷田遺跡 甕（白色で光沢のある粒が雲母片岩）

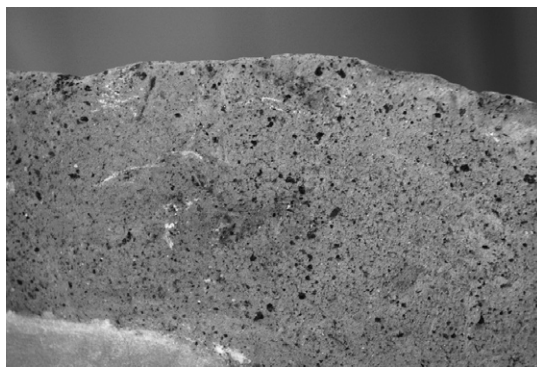


写真2 北島遺跡 壺

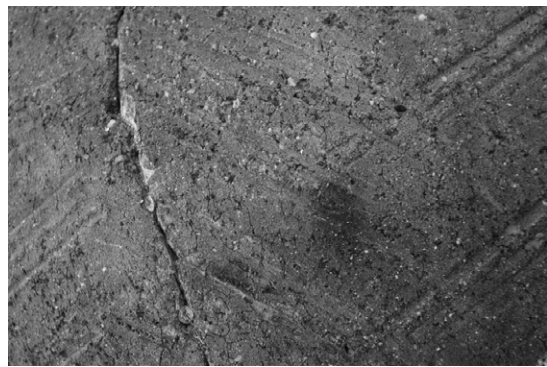


写真3 北島遺跡 甕（白色の粒が石英）

⑤信濃南部の事例

天竜川下流域の飯田盆地では、北原遺跡〔神村1972〕と恒川遺跡群〔佐々木ほか1986〕で栗林式系土器が出土する。特に恒川遺跡群では個体数にて少なくとも10個体は出土し、器種は壺・甕・台付甕・無頸壺である。北原遺跡出土の栗林式系土器は2+4装飾帯構成をもつ栗林2式古段階相当の破片〔神村1972：報告書第22-8〕のほか、栗林2式新段階前後の甕・台付甕が主体である。胎土は確認していないが、少なくとも忠実に模倣された土器は含まれる。

恒川遺跡群出土の栗林式系およびその系統の土器をみると、図19-1の壺はかなり忠実に模倣された壺だが、5装飾帯に施文されるべき複合鋸歯沈線文が4装飾帯にあり、さらに上下を沈線で区画する。長野盆地南部では認められない手法である。3は受口状口縁部が稜をもたず緩やかに内湾し、その部位に櫛描波状文を施文する。そこからは松本盆地との共通性がむしろ看取できる。2の甕は搬入品か、忠実な模倣品である。4の無頸壺は搬入品か忠実な模倣品であり、5の「コの字重ね文」甕は、篋描による「コの字」の単位が不明瞭で、施文が形骸化している。胎土は確認していないが、2のように搬入品の可能性が高い土器が含まれる。信濃南部において栗林式・栗林式系土器が認められるのは上記の2遺跡に限られるが、3が栗林3式、そのほかは栗林2式新段階相当と考えられる。

⑥駿河の事例

駿河では静岡市川合遺跡で栗林式系土器が出土した〔静岡県1992〕。図19-6の甕は、受口状口縁部に屈曲が認められず、緩やかに内湾して立ち上がるあり方、縦羽状文が粗雑な点から栗林2式新段階ないし栗林3式相当である。7は有東式との折衷が明瞭で、胴部装飾に栗林式特有の手法である縄文地文と複合鋸歯文が施文される。8の器形は有東式の細頸壺であるが、胴部上半の縄文地文と連弧文は栗林式の文様である。ただ、本来であるならば胴部下半の5装飾帯に施文される文様であるが、4装飾帯相当の部位に施文されている。7・8とも、栗林2式新段階前後とみて間違いなさであろう。

以上、異型式土器分布圏内における栗林式・栗林式系土器の分布の動態を検討した結果、栗林2式新段階併行期にいずれの地域もその出土量が増し、分布域が拡大する傾向を確認できた。またその時期、吹上遺跡と北島遺跡のように、1遺跡に栗林式・栗林式系土器が集中する傾向が認められた。異系統土器分布圏内における栗林式系土器増加と、その1遺跡集中出土という一見矛盾する現象をどのように歴史的に評価すべきであろうか。

そうした課題の解決の前に、小松式系土器についてもこれまでと同様な観点から、分布の動態を確認しておきたい。

2. 異型式土器分布圏内における小松式とその系統の土器

①信濃・北武蔵における小松式系土器の分布

栗林式土器の成立に小松式土器が関与するという指摘は、先述したように笹沢浩〔笹沢1987・1996〕の指摘以後、まず石川日出志〔石川1997・2002a〕により具体化された。石川は、栗林式直前段階の松節・境窪段階の土器をベースとし、そこに口縁部横ナデとハケメの全面的普及、無頸壺の採用などの丹後系櫛描文土器・北陸小松式土器からの影響が加わることで栗林1式は成立したと、影響関係をより具体化した。また栗林式に採用された小松式要素として、文様の類似性ととともに、壺頸部の貼付突帯に付加される縦位浮文あるいは縦位沈線に注目している。

次に安藤は、壺の口縁部文様帯の消失あるいは口縁部への収縮、甕の口縁直下の無文化に小松式の関与を指摘し、栗林式の成立を画する重要な変化属性と指摘した〔安藤1999〕。こうした編年学的研究とは別に、久田は長野県内で出土する小松式およびその系統の土器に搬入品はないとの指摘をしており、ここから北陸系遺物の搬入は栗林式集団の手によって行われているとの見解を示した〔久田1999〕。このように三者により長野県内出土の小松式土器は既に検討されているが、そこで検討対象となった土器は遺跡数の多い長野盆地南部にはほぼ限られている。本節では栗林式土器分布圏の全範囲を対象に小松式およびその系統の土器、小松式の要素を取り込む土器を集成し、その分布とその動態を明らかにする。

図20は長野県・埼玉県内から出土した小松式およびその要素を取り込む土器である。1と2は飯山の小泉遺跡〔望月ほか1995〕出土の小松式の壺・甕で、胎土は先述の高田平野産とした胎土グループと同じである。口唇部の刺突波状口縁が特徴的である。3の中城原遺跡資料は無頸壺の口縁部であり、搬入品とみて差し支えないであろう。それらは栗林1式から栗林2式古段階に伴う。4は高山村湯倉洞窟遺跡出土品〔永峯編2001〕で、小松式と推定される。栗林式の古相・新相のいずれの土器も出土するため、共伴関係が押さえられない。5と6は栗林遺跡出土土器〔中島2001〕で、5の受口状口縁下端に押捺突帯があり、小松式の手法と判断できる。6は壺頸部に微隆起の二条の突帯がめぐり、その二条を跨ぐ縦位の篋描沈線が認められる。数条の突帯上に縦位沈線を施す例は吉崎・次場遺跡でも確認でき〔石川2002〕、小松式の手法と理解してよい。栗林2式新段階に共伴した。7の須坂園芸高校校庭遺跡資料〔石川2002a〕は器形および装飾帯構成は栗林式であるが、胴部上半の篋描直線文と波状文の系譜を在地で追うことは難しく、むしろ後述する10の例から小松式系譜の手法と考えられる。共伴した筒形土器の存在から、栗林1式と共伴関係にあると考えてよいであろう。

次に長野盆地南部の事例を検討する。8から14は松原遺跡高速道地点資料〔青木・賛田ほか1998・2000〕である。栗林式との共伴関係は、栗林2式中段階と3点、栗林2式中段階ないし新段階が5点、栗林2式新段階が9点、共伴関係不明が6点で、栗林2式中段階から新段階にかけ集中することが明らかである。9・13は搬入品ではないものの棒状浮文を複数付加する手法が認められ、頸部と胴部上半が忠実に模倣される。11は栗林式の器形に斜格子等の篋描文を施文するなど折衷した土器である。12は斜格子の直下に波状文と直線文の交互施文が認められ、その手法が条痕文甕の系譜ではなく、小松式系譜であることを想起させる。8も頸部に斜格子、頸部直下より波状文と簾状文の交互施文が確認でき、小松式の系譜である。直線と波状を交互に施文した10の無頸壺も小松式の影響と考えられる。松原遺跡出土の小松式およびその系統の胎土は、久田が既に指摘した通り、信濃特有の胎土グループに該当し、高田平野産を想起させるものはない。

15の牟礼バイパスD地点資料は縦位の棒状浮文が2列並列する点を小松式要素と見ることができ〔石川2002a〕、栗林1式に共伴する数少ない例である。16の宮西遺跡資料〔千野1994〕には頸部貼付突帯上に縦位の沈線が認められ、15の例と同様の手法である。栗林1式に共伴した。17の吉田古屋敷遺跡〔遠藤2005〕出土の甕の口縁部押捺は、小松式要素と見ることができ、いっぽうで胴部の篋描直線文と波状文の交互施文は境窪・松節段階にも認められる条痕文系甕の系譜である。同遺跡18の甕は、胴部に直線文と斜行短線文が施文され、小松式の要素を取り込む土器である。17・18は栗林1式から2式古段階に共伴した。牟礼バイパスD地点・宮西・吉田古屋敷の各遺跡の小松式の要素を取り込む土器の胎土は、信濃特有の胎土グループに該当する。

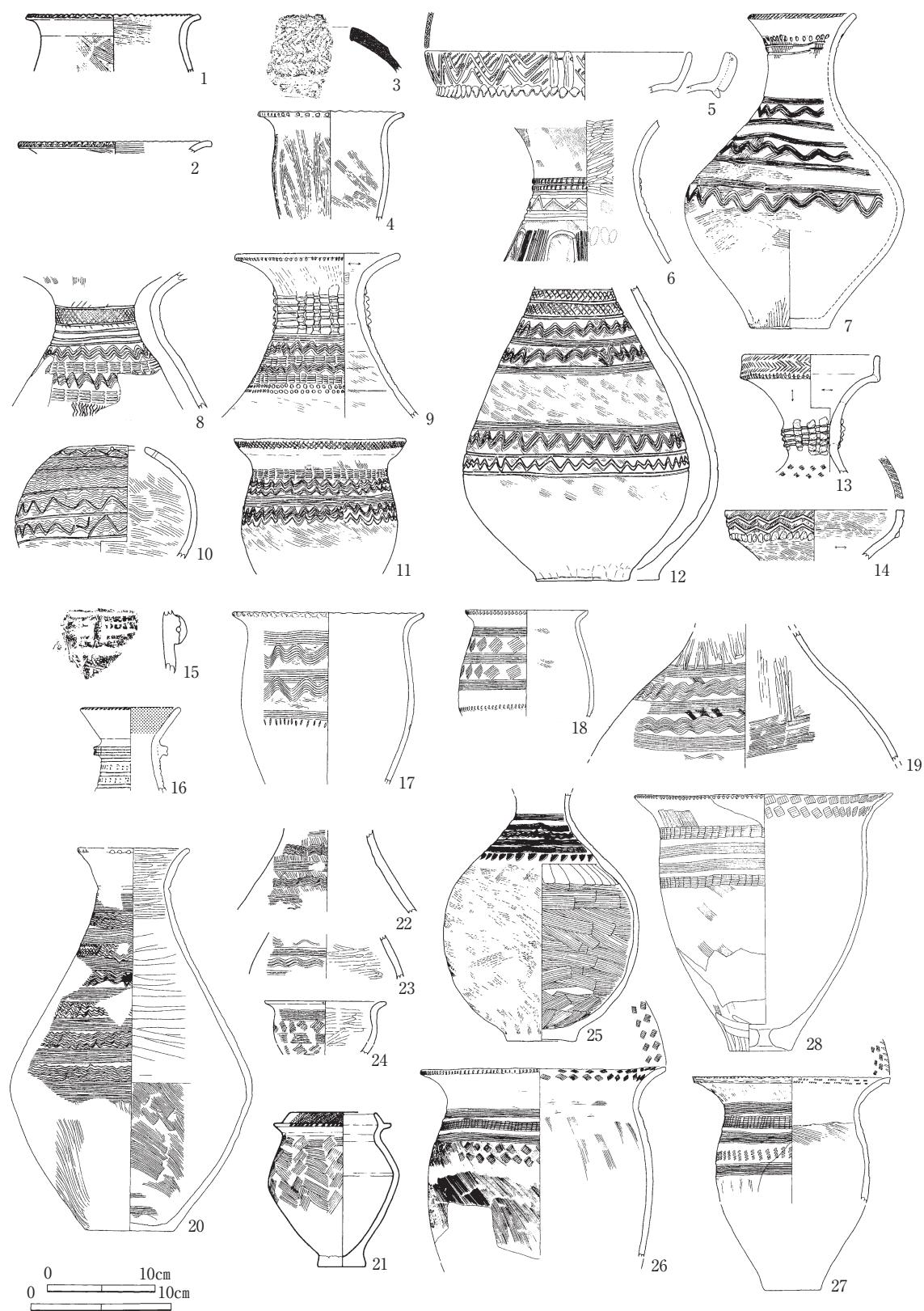


図20 信濃・北武蔵出土の小松式関連土器

1・2:小泉 3:中城原 4:湯倉 5・6:栗林 7:須坂園芸高校校庭 8~14:松原 15:牟礼 16:宮西
17・18:吉田古屋敷 19・21:北西の久保 20:根々井芝宮 22~24:箕輪 25~27:小敷田 28:古宮

佐久盆地では、19・21の北西の久保資料〔林1984・小山1987〕、20の根々井芝宮資料〔羽毛田1998〕がある。いずれも栗林2式新段階に伴った。19・20は7の例と同様で、栗林式の器形・装飾帯構成に櫛描直線文と波状文の交互施文手法が採用される。21は鐺付きの口縁部をもつ甕であり、栗林式土器分布圏では本例1例のみである。河合・林によれば、石川の専光寺養魚場遺跡で同様の口縁部をもつ壺が中期後葉の土器とともに相伴しているという。本例と専光寺養魚場例は時期的に併行する。系譜については不明な点が多いが、同時期の類例が山口県にあり、西日本系であることが指摘されている〔河合・林1999〕。

22から24は上伊那郡箕輪遺跡出土土器〔市川編2005〕で、栗林2式新段階に伴った。22・23は7・19・20と同例である。24は台付甕と推定され、小松式特有の櫛描直線文と斜行短線文の交互施文が明瞭である。佐久盆地の諸遺跡、および箕輪遺跡の小松式系土器の胎土は、全て信濃宅特有の胎土グループに該当する。

北武蔵の事例のうち、池上遺跡と小敷田遺跡については「第3章 第2節」にて先述した。それら以外として、28の熊谷市古宮遺跡出土の甕〔鈴木2004〕は、様相8期とされた八日市地方遺跡報告書第83図-545と同類で、様相7期にまでは遡らない。

しかし、北武蔵の諸々の遺跡から出土した小松式土器は、北陸地方に分布する小松式土器を器形・文様とも忠実に模倣したものであるにもかかわらず（図20-25～28）、実見できなかった池上遺跡・古宮遺跡以外は全て北島遺跡の胎土D類に該当しており、搬入品とは積極的に言及できない資料である。

以上の信濃・北武蔵出土の小松式に関連する土器のあり方の推移を整理すると、栗林1式新段階から栗林2式古段階併行期の北武蔵に、八日市地方様相8期に相当する小松式土器が出現する。それは胎土こそ在地である可能性が高いものの、北陸地方に分布する小松式土器を忠実に模倣した時期で占められていた。搬入品は、飯山の小泉遺跡例や大町の中城原遺跡例が示すように、信濃北部のみで散見できる。長野盆地南部ではその時期、搬入品・模倣品が認められず、栗林式に小松式の要素を一部取り込むに留まっている。

しかし、栗林2式新段階の時期、信濃出土の小松式系土器の出土量は栗林1式の段階に比べ明らかに増加しているのにもかかわらず（図21）、信濃・北武蔵において小松式の搬入品・忠実な模倣品は姿を消し、模倣品は松原遺跡の1遺跡に限られ、多くの遺跡は小松式の要素を取り込む土器が出土するという結果を得た。

そうした栗林2式新段階の現象的な変化・画期をより具体化するために、信濃における小松式系土器の出土量を点検してみよう。

②出土点数

ここでは小松式の搬入品・模倣品・要素を取り込む土器について、図化資料と拓本資料別に出土点数を点検する。

III期後半とした栗林1式から栗林2式古段階では、先述したように小松式土器の搬入品は小泉遺跡・中城原遺跡の信濃北部のみに限られ、また忠実な模倣品が池上・小敷田・古宮の北武蔵の各遺跡に限られる（表3）。特に小敷田遺跡では拓本資料を含め21点の出土が確認でき、突出した量である。搬入品土器の器種は壺・甕・無頸壺である。小松式の要素を一部取り込む土器は長野盆地南部の6遺跡で出土が認められるが、栗林1式の遺跡が23遺跡〔馬場2007b〕と比較的多い長野盆地南部に小松式土器の搬入品の出土が認められない。

小松式の搬入品土器を出土した小泉遺跡は栗林1式段階の大規模集落であり、当該期にそれに比肩する規模の遺跡は長野盆地北部・南部や佐久盆地では確認できない。その小泉遺跡と、小松式の忠実な模倣品を出土した池上・小敷田・古宮の各遺跡を結ぶ直線上の間には、湯倉洞窟・有笠山洞窟〔松島1986〕・八束脛洞窟〔外山ほか1986〕といった洞窟遺跡や、五十嵐遺跡など栗林1式土器を出土する遺跡が点在する（図22）。

いっぽうIV期前半の栗林2式新段階になると、小松式関連の土器は千曲川流域の広範囲に分布域を広げ、栗林式土器分布圏最南端の箕輪遺跡のまで到達する（図21）。その時期は吹上遺跡において栗林式の比率が小松式を上回る時期である。そして千曲川流域における最大級の大規模集落で、10万㎡から最大15万㎡の集落規模をもつ松原遺跡では、小松式の忠実な模倣品が7点、その一部要素を取り込む土器が図化資料で15点、拓本資料で8点の合計30点が出土した。興味深いことに、千曲川流域上において松原遺跡とほぼ同規模の集落規模をもつと推定する〔馬場2006a・2007a〕栗林遺跡と西一本柳遺跡・北西の久保遺跡では、小松式の要素を取り込む土器が出土するにもかかわらず、それは松原遺跡の10分の1程度の出土量である（表3）。

したがって、IV期前半の栗林2式新段階の時期、吹上遺跡にて栗林式の比率が小松式の比率を上回り、それに連動して信濃からの搬入品土器も増すこと、また千曲川流域最大級の集落遺跡である松原遺跡で忠実な小松式の模倣品やその要素を取り込む土器が同水系の大規模集落以上に出土すること、そして栗林式関連の土器が集中して出土する遺跡が北島遺跡にて確認できること、それら3つの現象は無関係な歴史的事実ではないことは十分に考えられる。次章の考察にて、その事実の歴史的意義を解明したい。

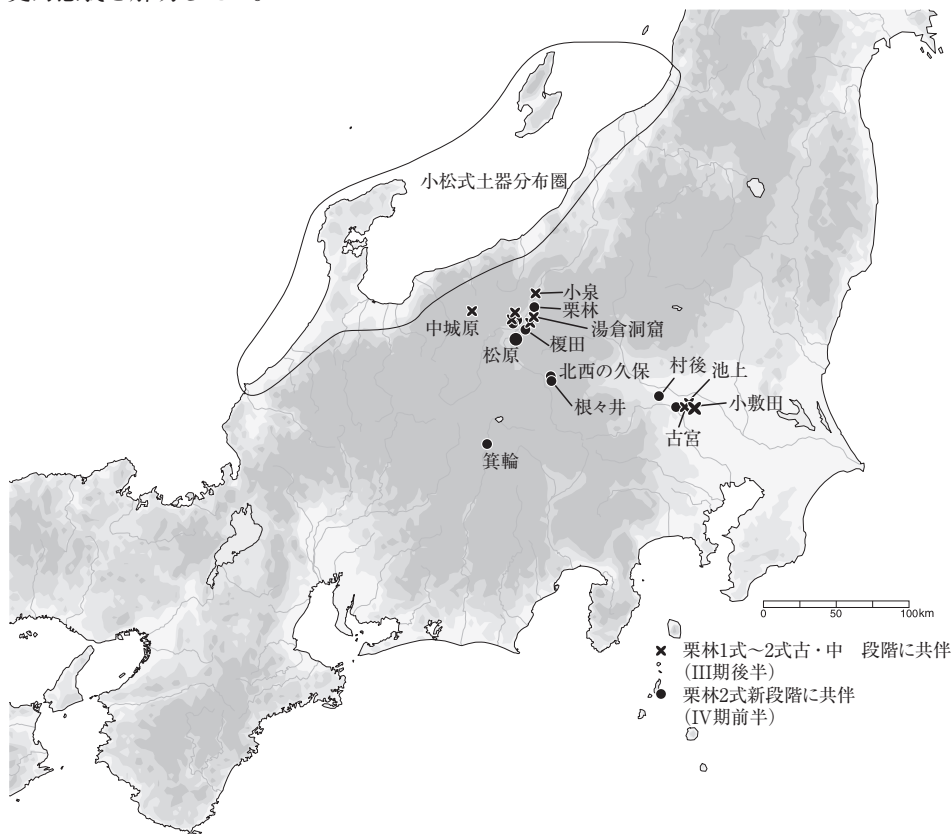


図21 小松式土器の分布（小松式の要素をもつ土器も含む）

表 3 小松式関連土器出土点数

エリア	時期	遺跡	模倣 (搬入)	同左 拓本	要素取 込図化	同左 拓本	合計	文献
飯山	Ⅲ 期前半～後半	小泉	2(2)		2		2	望月ほか 1995
//	Ⅲ 期前半～後半	上野			1		1	望月 1980
中野	Ⅲ 期前半～後半 orⅣ 期	湯倉洞窟	1(1?)				1	永峯編 2001
//	Ⅲ 期前半～後半	須坂園芸高校校庭			1		1	石川 2002a
長野盆地南部	Ⅲ 期前半～後半	牟礼バイパス D				2	2	田中ほか 1986
//	Ⅲ 期前半～後半	宮西			1		1	千野 1994
//	Ⅲ 期終末	本堀			1	1	2	千野 1992
//	Ⅲ 期前半～終末	吉田古屋敷 (1)	1				1	飯島 1997
//	Ⅲ 期前半～後半	吉田四ッ谷			1		1	寺島 1996
//	Ⅲ 期前半～後半	屋代土口 BP			1		1	青木ほか 2000
大町	Ⅲ 期前半～後半	中城原		1(1)			1	島田 1992
北武蔵	Ⅲ 期前半～後半	池上	1			1	2	石川 2001
//	Ⅲ 期後半～終末	小敷田	5	16			21	石川 2001
//	Ⅲ 期後半	古宮	2			6	8	鈴木 2004
長野盆地北部	Ⅳ 期前半	栗林			3		3	金井 1980, 赤塩ほか 1994, 檀原ほか 1992, 中島 1997, 中島 2001
長野盆地南部	Ⅳ 期前半	榎田			1		1	広田・賛田 1999
//	Ⅲ 期終末、Ⅳ 期前半主	松原	7		15	8	30	青木・賛田ほか 1998
//	Ⅳ 期	辰巳池		1			1	矢口ほか 2004a
//	Ⅳ 期前半	吉田古屋敷 (2)			2		2	遠藤 2005
佐久	Ⅳ 期前半	北西の久保			3		3	小山ほか 1987
//	Ⅳ 期前半	根々井芝宮			4		4	羽毛田 1998
//	Ⅳ 期前半	西一本柳 XIII			1		1	小林 2006
上伊那	Ⅳ 期前半	箕輪			3		3	市川編 2005
北武蔵	Ⅳ 期?	村後			1		1	細田 1984

図化: 報告書掲載図化資料の点数 拓本: 同左拓本資料の点数

⑤……………考察

筆者はまず議論の基本となる栗林式土器の編年を再構築し、それを基軸とした広域編年案を設定した。次に構築した編年案にもとづき、栗林式土器と小松式土器の分布の動態を明らかにした。その結果、異系統土器分布圏における栗林式土器の分布は、Ⅳ 期前半の栗林2式新段階が様相の画期であることを確認した。

最初に、III期の分布のあり方から人の「うごき」を復元する。III期前半から終末の段階、栗林1式を含む古手の栗林式系土器が北陸西部や東部で認められる。また、北陸東部の高田平野・柏崎境界では信濃からの搬入品土器が少なからず含まれていることを確認した。

栗林1式や栗林2式古段階の古相の土器は北武蔵の深谷市・熊谷市界限にも存在し、信濃からの搬入品土器が上敷免遺跡にて確認でき、忠実に模倣された栗林式甕が池上遺跡にて出土した。また、小敷田遺跡では小松式土器が合計21点と突出しており、搬入品こそ認められないものの、忠実な小松式の模倣品が認められた。対照的に当該期、千曲川上流域の佐久盆地には小松式およびその系統の土器が出土しない。

栗林1式段階の佐久盆地で小松式に関連する土器が皆無であること、群馬西部の山間部に栗林1式の遺跡が点在すること、小松式の搬入品・模倣品土器が長野盆地には一切認められず、「高田平野－飯山－北武蔵」の各地域で顕著に出土していることを踏まえれば、その段階の主要交流ルートは、千曲川を經由せず、飯山盆地から白根山近辺を経て上野の吾妻川を抜け、北武蔵へと向かう「白根山－吾妻川ルート」が推定できる（図22）。その段階、千曲川流域で最大規模の集落遺跡である小泉遺跡などの長峰丘陵一帯が、日本海側の高田平野にある吹上遺跡と北関東方面へ向かう主要交流ルートの要所であったと考えられる。なお、「白根山－吾妻川ルート」上の洞窟・岩陰遺跡は栗林2式以後、後期後半の樽式段階まで継続的に使用されている。洞窟・岩陰遺跡はそうした交流ルートの目印として継続的に利用されていたのではないだろうか。

次に、IV期前半の分布のあり方から人の「うごき」を復元する。分析の結果、北陸の加賀・能登・越中、そして越後・佐渡のいずれの地域でもIV期前半の栗林2式新段階に栗林式およびその系統の土器を出土する遺跡が増加し、出土する範囲も連動して拡大した。同様に、北武蔵や南関東でも同様な傾向が看取できた。また、飛騨の内垣内式、信濃南部の北原式、駿河の有東式の各土器分布圏でも栗林2式新段階から栗林式系土器が出土する。

いっぽう、そうした栗林式関連の土器の増加、分布域拡大とは逆に、その搬入品・模倣品が1遺跡に極端に集中する現象が吹上遺跡と北島遺跡にて顕著であった。搬入品の出土は認められないが、越中の高島A・作道遺跡、石塚遺跡もやや集中して栗林式土器が出土した。栗林式土器の中心的分布域である千曲川流域から離れた場所にそのような遺跡が出現することは、当該期の人々の「うごき」が以前とは大きく変化したことを示しているに他ならない。

そこで示唆的なのは、IV期前半の信濃における小松式関連土器の分布のあり方である。吹上遺跡が栗林式主体の遺跡へと変貌する栗林2式新段階、千曲川流域で最大級の集落遺跡である松原遺跡では、7点の小松式模倣土器と23点の小松式の要素取り込む土器が出土した。また本段階から千曲川流域全域に小松式の要素を取り込む土器が出土するため、長野盆地南部から佐久盆地方面へ小松式関連土器を介在した交流ルートが延長されている。また、その交流ルートは、上野の竜見町式の成立に栗林式が大きく関与している実態から、さらに上野西部の碓氷川沿いへも延びるルートであったと推定される。

すなわち、IV期前半は「千曲川－碓氷川ルート」の形成期であり（図23）、折しもその時期は佐渡産の緑色凝灰岩製・鉄石英製管玉〔馬場2006b〕、長野盆地南部産の太形蛤刃石斧と扁平片刃石斧が流通を開始する時期〔馬場2004・2007a〕に相当する。「千曲川－碓氷川ルート」ではそうした流通物質量が格段に上昇することから、「白根山－吾妻川ルート」以上に往来頻度が高い状況にあったことを想起させる。

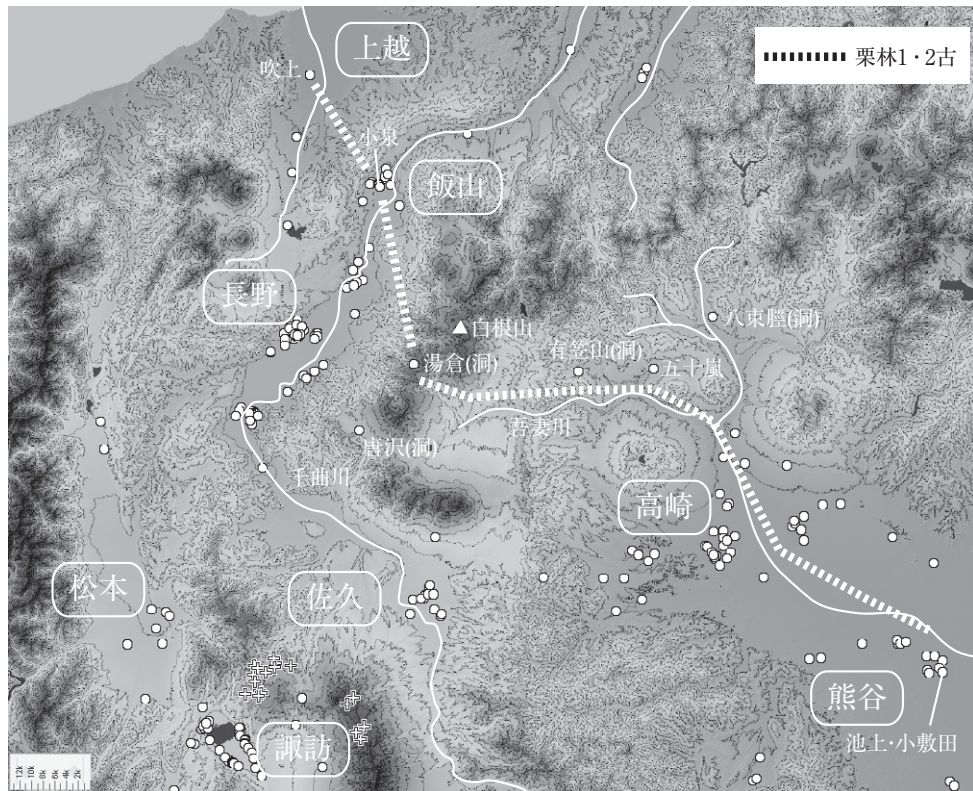


図22 栗林1式から栗林2式古段階の交流ルート

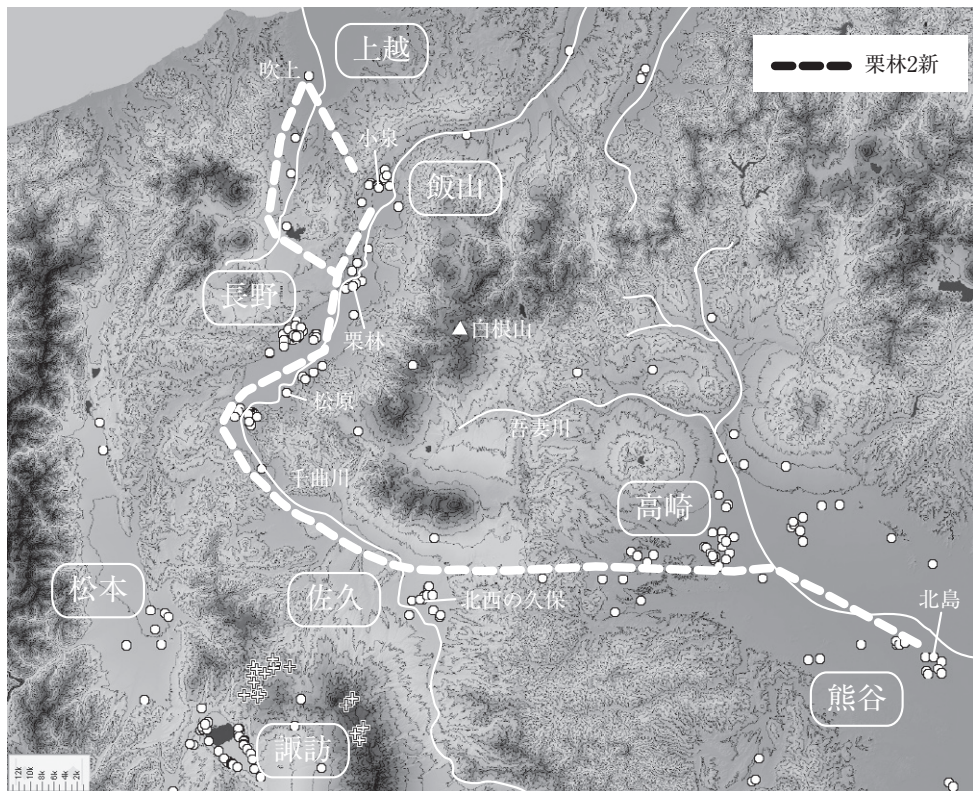


図23 栗林2式新段階の交流ルート

また、栗林式土器分布圏の最南端遺跡である上伊那郡箕輪町でも小松式の要素取り込む土器が出土しているため、IV期前半には信濃北部・東部・中部と南部の一部に広く交流ネットワークが形成されていたことがわかる。その範囲はIII期後半のそれより格段に広い範囲に形成されたものであった。

では、IV期前半の広域ネットワーク形成時、吹上遺跡や北島遺跡、松原遺跡で顕著にみられたように、異系統土器の搬入品や忠実な模倣品が特定の遺跡でなぜ極端に上昇するのか。まず栗林2式新段階併行期に栗林式土器を多数出土する遺跡は、交通路的な特徴をもつ点を挙げることができる。吹上遺跡は信濃と日本海沿岸を通過する交通ルートの交差点付近に所在し、高島A・作道遺跡は能登半島東岸の最も奥まった内湾付近にある遺跡でやはり海上交通の要所である。北島遺跡一帯の深谷市・熊谷市境界は信濃と関東を結ぶ東山道ルート上にある〔酒井1993〕。

そうした交通路的特徴のある遺跡で、栗林式土器が多量に出土することは、人々の往来の仕方、例えば互酬性的交換活動のあり方が、以前とは異なっていることを示すのではないか。すなわちの栗林2式新段階は、吹上・北島の各遺跡のほか、越中の高島A・作道遺跡、石塚遺跡という特定の遺跡を核として、人々が往来する仕組みが形成される交流史的な画期に相当する。そのなかでも上越一帯から栗林式の搬入品土器が消滅し、逆にその比率が高まる吹上遺跡は、往来する人々が活動を吹上遺跡に集中、もしくは限定するような状況が考えられる。吹上遺跡は佐渡産管玉や北陸西部の物資が信濃方面へ南下する際、あるいは信濃からの長野盆地産磨製石斧が北上する際、通過する位置にある〔馬場2006b・2007a〕。そうした特定産地の物資が一端集約された可能性の高い吹上遺跡は、異系統土器をもつ集団同士が互いの物資を交換するために設定した「交易場」と考えられる。

とすれば、小松式関連の土器を千曲川流域内で多量に出土した松原遺跡を、磨製石斧の分業生産のなかでの研磨・仕上げを担当する遺跡であるとともに〔町田2001, 馬場2004・2007b〕、完成した磨製石斧を媒介とした異系統土器集団の「交易場」と推定することは、あながち的外れとは思えない。

IV期前半の栗林式集団による広域ネットワークの形成と「交易場」の設定、そして長野盆地南部の磨製石斧分業生産の確立は、まさにパラレルに進展した歴史的事象であり、集団間の互酬性的交易活動の極度の発達を示す歴史的意義をもつと考えられる。

おわりに

考古学的手法により「交易」論をより具体化するためには、流通する物資、その生産・流通のあり方の詳細な検討が必要であることは言うまでもない。北陸・信濃・関東の間を流通する弥生中期の物資では、管玉・勾玉・磨製石斧があり、筆者は数回にわたりそれを検討してきた。ただし、冒頭にも触れたように、文化・社会の復元を射程に入れるのなら、まず基本となる土器編年の細分、広域編年の構築が必要であり、本稿ではまずそれを実践した。紙幅の多くを事実関係の点検に費したが、今後、流通する物資の詳細な検討を行い、これまでの地域間交流論を「交易」論へと具体的に発展させたいと考えている。

本稿の執筆にあたり、次の諸氏からはご教示を賜り、諸機関には便宜を図っていただいた。記して感謝申し上げる。石川日出志・石黒立人・大石崇史・大竹憲昭・設楽博己・金三津英則・栗岡潤・笹沢浩・笹沢正史・佐藤由起男・永井宏幸・中島透・萩野谷正宏・林大智・福海貴子・久田正弘・藤田慎一・吉朝則富・埼玉県埋蔵文化財調査事業団・長野県埋蔵文化財センター・長野県立歴史館・柏崎市立博物館・位山交流会館・上宝村ふるさと歴史館・高山市教育委員会・上越市埋蔵文化財センター・松本市立考古博物館

註

(1)——石川が文様帯でなく「装飾帯」の語を用いるのは、文様帯という語を用いるには縄文土器の各文様帯とのつながりに十分な配慮が必要であり、栗林式の各装飾帯は縄文土器とは無縁な水神平式・丸子式という条痕文系土器の装飾原理を踏襲するからであるという〔石川 2002, 55 頁〕。筆者のその見解に同調し、以後、「装飾帯」という用語を用いることにする。

(2)——本文の「栗林式系土器」とは、栗林式特有の器形・文様・装飾帯を部分的に採用した土器を指す。ただし、その区分は定量的分析に基づくものではなく、あくまで感覚的なものに過ぎない。土器 1 個体が千曲川流域に分布する栗林式と全くの同一であれば「栗林式」であり、それからかけ離れる程度により「栗林式系」か、あるいは「栗林式系」をも逸脱する。栗林式とは明らかに異系統の土器ではあるが、そこに栗林式特有の属性が採用されていた場合、「栗林式の要素を取り込む土器」と本稿では表記する。

(3)——最初の指摘は 1986 年の三県シンポジウム『東日本における中期後半の弥生土器』であると石川日出志は触れる〔石川 2002〕。

(4)——安藤広道が宮ノ台式土器編年で用いた用語でもある〔安藤 1990〕。

(5)——かつて筆者〔馬場 2006a〕は胴部の徹底した無文化と頸部への文様の集中を理由に栗林 3 式に併行する土器としたが、本稿編年の基準に従い、見解を訂正する。

(6)——馬場 2006a では円正坊Ⅱ遺跡出土土器も栗林 3 式に位置づけたが、出土量が限られているとはいえ、円正坊遺跡の壺の場合、縄文施文率は高い。栗林 2 式新段階に位置づけることも可能な土器である。ここで見解を訂正したい。

(7)——石川はそのほか栗林 3 式の特徴として、徹底し

た胴部の無文化、2 装飾帯への途切れる沈線の充填（擬似簾状文のことか）、壺口縁部が水平に拡張することを挙げたが〔石川 2002: 58 頁〕、それは本稿の栗林 2 式新段階の特徴として理解する。

(8)——増山仁 1988『金沢市磯部運動公園遺跡』（金沢市教育委員会）を基準資料とする段階。

(9)——なお、磯部運動公園遺跡出土土器をもって「磯部運動公園式」と呼ぶ研究者がいるが、小松式との分離は以下に論述するように容易ではなく、属性の多寡により前後の段階を決定できる程度である。したがって、筆者は「磯部運動公園段階」と表記する。「専光寺養魚場段階」も同様な趣旨で使用する。

(10)——石川日出志より文献をご教示頂いた。感謝申し上げます。

(11)——埼玉県考古学会 2004「シンポジウム『北島式土器とその時代－弥生時代の新展開－』の記録」『埼玉考古』第 39 号の 109 頁参照。

(12)——田中明 2003『小林遺跡』大島町教育委員会

(13)——高橋保 1979『下谷地遺跡』新潟県教育委員会の 50 頁参照のこと。

(14)——吹上遺跡出土土器の胎土については、笹沢正史から多くのご教示を賜った。記して感謝申し上げます。

(15)——変質輝緑岩製の榎田型両刃石斧の分布等については別稿を準備している。

(16)——土器表面にて確認できる岩石・鉱物の密度の表記については、大久保雅弘・藤田至則編『地学ハンドブック 第 6 版』掲載の「94. カラーインデックス」(126-128 頁)を使用した。また小敷田・北島・上敷面の各遺跡の胎土については埼玉県埋蔵文化財調査事業団の栗岡潤から多くのご教示を賜った。感謝申し上げます。

引用・参考文献

(論文)

- 安藤広道 1990「神奈川県下末吉台地における宮ノ台式土器の細別－遺跡群研究のためのタイムスケールの整理－
上・下『古代文化』第42巻第6号・第7号 28-38頁・13-24頁
- 安藤広道 1991「南関東地方における弥生時代中期後半～後期の土器編年と外来系土器」『各地期の編年』弥生土器を
語る会 74-95頁
- 安藤広道 1999「『栗林式土器』の成立をめぐる諸問題」『長野県考古学会誌』92号 1-17頁
- 安藤広道 2002「静岡県沼津市東椎路久保出土の弥生土器について」『民俗考古』第6号 83-107頁
- 安藤広道 2005「宮ノ台式の地域差と周辺 報告(1)」『南関東の弥生土器』考古学リーダー5 107-115頁 六一書房
- 青木一男 1996「『松原遺跡弥生編』整理中間報告」『長野県埋蔵文化財センター紀要』5 10-17頁
- 池谷信之 2005「『海の黒曜石』から『山の黒曜石へ』－見高段間遺跡の消長と黒曜石交易－」『考古学研究』第52巻
第3号 12-28頁
- 石川日出志 1994「東日本の大陸系磨製石器－木工具と穂摘み具－」『考古学研究』第41巻第2号 14-26頁
- 石川日出志 1995「飛驒の弥生中期横羽状文甕」『飛驒と考古学』194-206頁 飛驒考古学会
- 石川日出志 1996「東日本弥生中期広域編年の概略」『Y A Y !』弥生土器を語る会 151-161頁
- 石川日出志 1997「六日町飯綱山遺跡採集土器片と北陸中・北部の栗林式土器」『越佐補遺些』第2号 54-58頁
- 石川日出志 1998「弥生時代中期関東の4地域の併存」『駿台史学』第102号 83-109頁
- 石川日出志 2000「天王山式土器弥生中期説への反論」『新潟考古』第11号 5-31頁
- 石川日出志 2001「関東地方弥生時代中期中葉の社会変動」『駿台史学』第113号 57-93頁
- 石川日出志 2002a「栗林式土器の成立過程」『長野県考古学会誌』99・100号 54-80頁
- 石川日出志 2002b「東日本から見た併行関係と実年代資料」『日本考古学協会2002年度 榎原大会 研究会発表資料』
143-150頁
- 石川日出志 2003「神保富士塚式土器の提唱と弥生中期土器研究上の意義」『土曜考古』第27号 27-53頁
- 伊藤秀雄編 1998『丸山遺跡』岐阜県文化財保護センター
- 井上唯雄・柿沼恵介 1977「入門講座 弥生土器－北関東2－」『考古学ジャーナル』No.141
- 上田典男 1995「栗林式土器研究の一視点－松原遺跡の整理作業から－」『長野県埋蔵文化財センター紀要』4 37-44頁
- 柿沼幹夫 2003「芝川流域の宮ノ台式土器」『埼玉考古』第38号 61-103頁
- 加納俊介・石黒立人編『弥生土器の様式と編年 東海編』木耳社
- 河合忍・林大智 1999「弥生時代中期の複合口縁壺について」『石川県埋蔵文化財情報』第2号 75-84頁
- 櫛木謙周 2004「生産・流通と古代の社会編成」『日本史講座』2 123-152頁 東京大学出版会
- クック(増田義郎訳 1992・1994)『太平洋探検』上・下 17・18世紀大旅行記叢書3・4 岩波書店
- 古城泰 2000「縄文時代の交換組織」『交流の考古学』180-198頁 朝倉書店
- 近藤義郎 1962「弥生文化論」『岩波講座日本歴史』1 141-188頁 岩波書店
- 小山岳夫 1986「佐久地方における弥生時期中期後半の土器」『第7回三県シンポジウム 東日本における中期後半の
弥生土器』179-197頁
- 小山岳夫 1987「弥生中期後半の土器について」『北西の久保遺跡－南部台地上の調査』337-356頁 佐久市教育委員会
- サーリンズ(山内昶訳 1984)『石器時代の経済学』法政大学出版会
- 酒井清治 1993「武蔵国内の東山道について－特に古代道路との関連から－」『国立歴史民俗博物館研究報告』第50
集 165-193頁
- 坂上有紀 2000「平田遺跡出土土器の編年の位置づけ」『平田遺跡』新潟県埋蔵文化財調査事業団 72-74頁
- 笹沢浩 1968「善光寺平における栗林式土器直前の土器」『信濃』第20巻第4号 51-59頁
- 笹沢浩 1970a「箱清水式土器の再検討－長野市内発見土器を中心として－」『信濃』第22巻第4号 26-33頁
- 笹沢浩 1970b「箱清水式発生に関する一試論」『信濃』第22巻第11号 163-179頁
-

-
- 笹沢浩 1971「善光寺平における弥生時代中期後半の土器」『信濃』第23巻第11号 47-63頁
- 笹沢浩 1974a「第3章 弥生式時代」『上水内郡誌』歴史編 82-115頁
- 笹沢浩 1974b「藤森栄一先生と荒山式土器」『長野県考古学会誌』19号・20号合併号 101-103頁
- 笹沢浩 1977「弥生土器-中部 中部高地1~3」『考古学ジャーナル』131・133・134 16-23頁・20-27頁・19-25頁
- 笹沢浩 1978「中部高地型櫛描文の系譜」『中部高地の考古学』長野県考古学会 159-169頁
- 笹沢浩 1987「中部高地型の櫛描文土器」『弥生文化の研究』4 弥生土器Ⅱ 112-118頁 雄山閣
- 笹沢浩 1996「栗林式土器」『日本土器事典』雄山閣出版 504-505頁
- 笹沢浩 2004「吹上遺跡と玉作り」『上越市史』通史編1 283-298頁
- 笹沢正史 2005「頸城地域における弥生時代後期から古墳時代前期の集落動態」『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』35-58頁 新潟県考古学会
- 笹沢正史 2006「第4節 土器・石器・特殊遺物等について」『吹上遺跡』134-146頁 上越市教育委員会
- 笹沢正史 2007「I期弥生土器の編年の位置づけ」『吹上遺跡範囲確認調査報告書』99-105頁 上越市教育委員会
- 佐藤由起男・萩野谷正宏・篠原和大 2002「遠江・駿河地域」『弥生土器の様式と編年 東海編』517-700頁 木耳社
- 設楽博己 1986「竜見町式土器をめぐって」『第7回三県シンポジウム 東日本における中期後半の弥生土器』413-416頁
- 杉原莊介・乙益重隆 1939「高崎市附近の弥生式土器」『考古学』第10巻第10号 492-512頁
- 杉山浩平 2006「縄文時代・弥生時代の石器流通論比較考」『西相模考古』第15号 47-62頁
- 鈴木正博 2001「弥生中期「雲間式」と「富士前式」の間」『栃木県考古学会誌』第22集 17-38頁
- 大工原豊 2002「黒曜石の流通を巡る社会-前期の北関東・中部地域-」『縄文社会論(上)』67-131頁 同成社
- 大工原豊 2007「黒曜石交易システム-関東・中部地方の様相-」『縄文時代の考古学』6 164-177頁 同成社
- 千野浩 1986「北信濃における中期後半の様相」『第7回三県シンポジウム 東日本における中期後半の弥生土器』138-178頁
- 都出比呂志 1968「考古学からみた分業の問題」『考古学研究』第15巻第2号 43-54頁
- 都出比呂志 1989『日本農耕社会の成立過程』岩波書店
- 寺島孝典 1993「第3節 弥生時代中期後半の土器様相」『松原遺跡Ⅲ』229-234頁 長野市埋蔵文化財センター
- 寺島孝典 1999「長野盆地南部の様相」『99シンポジウム 長野県の弥生土器編年』長野県考古学会 67-75頁
- 照林敏郎 1997「朝霞市向山遺跡の調査-弥生時代から古墳時代前期-」『東日本における鉄器文化の受容と展開』第4回鉄器文化研究集会 2-22頁
- 富田和夫・中村倉司 1986「埼玉県における中期後半の櫛描紋土器について」『第7回三県シンポジウム 東日本における中期後半の弥生土器』11-24頁
- 外山和夫 1996「竜見町式土器」『日本土器辞典』雄山閣 530頁
- 直井雅尚 1986「松本平における中期後半の弥生土器について」『第7回三県シンポジウム 東日本における中期後半の弥生土器』198-212頁
- 直井雅尚 1991「松本平における百瀬式土器の実態」『長野県考古学会誌』63号 1-24頁
- 直井雅尚 1999「松本盆地南部における弥生中期後半~後期の土器編年」『99シンポジウム 長野県の弥生土器編年』67-75頁 長野県考古学会
- 長崎元廣 1984「縄文の黒曜石貯蔵例と交易」『中部高地の考古学』Ⅲ 108-126頁 長野県考古学会
- 中村五郎 1993「第5章 まとめ」『屋敷遺跡』会津若松市教育委員会
- 中山誠二 1993「甲斐弥生土器編年の現状と課題-時間軸の設定-」『研究紀要9』86-121頁 山梨県立考古博物館
- 賛田明 2000「第1章 壺形土器の文様帯構造と変遷」『松原遺跡 弥生総論7 弥生時代・考察 検索』1-12頁 長野県埋蔵文化財センター
- 萩野谷正宏 2003「関東中期弥生土器の展開過程における一様相-埼玉県上敷免遺跡住居跡等の出土土器群分析から-」『法政考古学』第30集 107-131頁
- 馬場伸一郎 1999「縄文時代の石器研究史-戦前の研究を中心に-」『駿台史学』第107号 71-89頁
-

-
- 馬場伸一郎 2004「弥生時代長野盆地における榎田型磨製石斧の生産と流通」『駿台史学』120号 1-47頁
- 馬場伸一郎 2006a「佐久盆地における栗林式土器の編年と弥生中期集落」『長野県考古学会誌』112号 33-55頁
- 馬場伸一郎 2006b「考察 吹上遺跡の玉作りについて(1)~(5)A」『吹上遺跡』75-118頁 上越市教育委員会
- 馬場伸一郎 2007a「弥生時代の物流とその背景-弥生 III 期後半から IV 期の北陸・信濃北部・関東を事例に-」『中部弥生時代研究会大会(南山大学) 発表要旨』
- 馬場伸一郎 2007b「大規模集落と手工業生産にみる弥生中期後葉の長野盆地南部」『考古学研究』第54巻第1号 47-67頁
- 馬場伸一郎 2007c「弥生時代中部高地における黒曜石石材流通の復元」『日本考古学』第24号 51-73頁
- 林大智 2007「弥生鉄器からみた中部地域の地域間交流」『中部弥生時代研究会大会(南山大学) 発表要旨』
- 久田正弘 1993「能登における弥生時代の一様相(1)」『石川県考古学研究会々誌』第34号 33-48頁
- 久田正弘 1999「弥生時代中期の北陸と長野の関係」『長野県考古学会誌』92号 19-30頁
- 久田正弘 2004「南加賀地方における弥生時代の一様相」『石川県埋蔵文化財情報』第11号 石川県埋蔵文化財センター 52-61頁
- 平野進一 1986「竜見町式土器の分析について」『東日本における中期後半の弥生土器』第7回三県シンポジウム 241-257頁
- 広瀬和雄 1998「弥生都市の成立」『考古学研究』第45巻第3号 34-56頁
- 藤森栄一 1968「中部高地地方」『弥生式土器集成 本編2』96-100頁 東京堂出版
- 保坂和博 1997『油田遺跡』山梨県埋蔵文化財センター
- 本多勝一 1973『ニューギニア高地人』ずずさわ書店
- 増山仁 1992「第4章 まとめ」『専光寺養魚場遺跡』31-36頁 金沢市教育委員会
- 水沢教子 2007「屋代遺跡群出土煮沸具の胎土分析(上)-分析資料とその概要-」『長野県立歴史館研究紀要』第13号 37-52頁
- 山下誠一 1986a「2. 弥生中期土器」『恒川遺跡群』遺物編 101-116頁 飯田市教育委員会
- 山下誠一 1986b「下伊那地方における弥生時代中期後半から終末の土器」『第7回三県シンポジウム東日本における中期後半の弥生土器』213-240頁
- 八幡一郎 1938「先史時代の交易 上・中・下」『人類学・先史学講座』第2巻・第3巻・第5巻 1-28頁・29-58頁・59-73頁
- 和田和哉 1999「シンポジウム「長野県の弥生土器編年」を終えて」『信濃考古』No.157 5頁
- 和田晴吾 2003「古墳時代の生業と社会-古墳の秩序と生産・流通システム-」『考古学研究』第50巻第3号 43-56頁

(報告書)

- 相京建史ほか 1981『清里・庚申塚遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 赤塩仁ほか 1994『栗林遺跡・七瀬遺跡』長野県埋蔵文化財センター
- 青木一男・賛田明ほか 1998『松原遺跡』弥生中期・土器図版 長野県埋蔵文化財センター
- 青木一男・賛田明ほか 2000『松原遺跡』弥生中期・土器本文 長野県埋蔵文化財センター
- 青木一男ほか 2000 国道403号土口バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書 屋代遺跡群 長野県埋蔵文化財センター
- 青木義脩・小倉均ほか 1982『井沼方・大北・和田北・西谷・吉場遺跡発掘調査報告書』浦和市教育委員会
- 飯島哲也 1991『松原遺跡』長野市教育委員会
- 飯島哲也 1993『松原遺跡 II』長野市教育委員会
- 飯島哲也・寺島孝典 1993『松原遺跡 III』長野市教育委員会
- 飯島哲也 1994『松原遺跡 IV』長野市教育委員会
- 飯島哲也 1997『吉田古屋敷遺跡』長野市教育委員会
- 飯島哲也 1998『松原遺跡 V』長野市教育委員会
- 石原哲彌・吉朝則富 1981『薬師野遺跡』高山市教育委員会

-
- 市川隆之編 2005『箕輪遺跡』長野県埋蔵文化財センター
- 伊藤雅文 1988『下安原海岸遺跡』石川県埋蔵文化財センター
- 伊藤秀雄編 1998『丸山遺跡』岐阜県文化財保護センター
- 池野正男ほか 1987『辻遺跡・浦田遺跡発掘調査報告』立山市教育委員会
- 井上太 1987『小塚・六反田・久保田遺跡』富岡市教育委員会
- 白井直之・町田勝則 1999『春山遺跡・春山B遺跡』長野県埋蔵文化財センター
- 白井直之・町田勝則 1999『春山遺跡・春山B遺跡』長野県埋蔵文化財センター
- 丑野毅 1983「用土・平遺跡」『寄居町史』原始・古代・中世資料編 180 - 260 頁
- 遠藤恵美子 2005『吉田古屋敷遺跡 (2)』『桐原宮西遺跡・権現堂遺跡 (2)・吉田古屋敷遺跡 (2)・返目遺跡』長野市教育委員会
- 大江傘・下形武 1956『上宝村の先史時代』
- 大塚和男ほか 1988『上野田西台遺跡 (第4次) 発掘調査報告書』浦和市教育委員会
- 大参義一ほか 1975『朝日遺跡群第一次調査報告』愛知県埋蔵文化財センター
- 岡田一広・山口辰一 2001『石塚遺跡・東木津遺跡調査報告』高岡市教育委員会
- 小倉均ほか 1987『上野田西台遺跡発掘調査報告書』浦和市教育委員会
- 小野塚徹夫ほか 2002『箕輪遺跡』I 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 尾野寺克実 1998『本田宮田遺跡発掘調査報告』大門町教育委員会
- 柿沼恵介・神戸聖語 1999a「浜尻 B 地点遺跡」『新編高崎市史』資料編 1 (原始・古代 1) 229 - 237 頁
- 柿沼恵介・神戸聖語 1999b「浜尻 A 地点遺跡遺跡」『新編高崎市史』資料編 1 (原始・古代 1) 227 - 228 頁
- 柿沼恵介・神戸聖語 1999c「林製作所遺跡遺跡」『新編高崎市史』資料編 1 (原始・古代 1) 390 頁
- 金井汲次 1980『栗林遺跡確認緊急調査報告書』中野市教育委員会
- 金子正典 1999『内野手遺跡・経塚山遺跡』三条市教育委員会
- 金三津英則 2006『作道遺跡』射水市教育委員会
- 金三津英則 2007『高島 A 遺跡』射水市教育委員会
- 神村透 1972『北原遺跡』高森町教育委員会
- 楠正勝 1992『金沢市新保本町西遺跡 III』金沢市教育委員会
- 剣持和夫ほか 1984『明花向・明花上ノ台・井沼方馬堤・とうのこし』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 小西昌志 1995『上荒屋遺跡 I』金沢市教育委員会
- 小林真寿 2002『深掘遺跡 II・III・V』佐久市教育委員会
- 小林真寿 2006『西一本柳遺跡 XIII』佐久市教育委員会
- 小山岳夫 1987『北西の久保 南部台地上の調査』佐久市教育委員会
- 埼玉県考古学会 2003『北島式土器とその時代 - 弥生時代の新展開 -』
- 佐々木嘉和・山下誠一・桜井弘人 1986『恒川遺跡群』飯田市教育委員会
- 笹沢正史編 2006『吹上遺跡』上越市教育委員会
- 笹沢正史編 2007『吹上遺跡範囲確認調査報告書』上越市教育委員会
- 笹森紀己子ほか 1998『大和田本村北 - 第2次調査 -』浦和市教育委員会
- 沢田敦編 2006『道端遺跡 V』新潟県教育委員会
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1992『川合遺跡 遺物編 1 土器・土製品図版編』
- 品田高志 1985『刈羽大平・小丸山遺跡』柏崎市教育委員会
- 島田哲男 1992『中城原』大町市教育委員会
- 鈴木孝之 2004『古宮・中条河原・上河原』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 高橋保 1979「出土土器について」『下谷地遺跡』新潟県教育委員会 44 - 53 頁
- 瀧瀬芳之ほか 1993『上敷免遺跡 (第1分冊)』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 竹原学・直井雅尚・太田圭郁 1998『境窪遺跡・川西開田遺跡 I・II 緊急発掘調査報告書』松本市教育委員会
-

-
- 立原秀明・安英樹 2006『畝田西 III』石川県埋蔵文化財センター
田中明 2003『小林遺跡』大島町教育委員会
田中彰・石原哲彌・吉朝則富 1993『前平山稜遺跡・赤保木遺跡』高山市教育委員会
田中寿賀子ほか 1986『浅川扇状地遺跡群 牟礼バイパスB・C・D地点』長野市教育委員会
千野浩ほか 1988『浅川端遺跡』長野市教育委員会
千野浩ほか 1991『中俣遺跡・押鐘遺跡・檀田遺跡』長野市教育委員会
千野浩 1992『二ツ宮遺跡・本堀遺跡・柳田遺跡・稲添遺跡』長野市教育委員会
千野浩 1993『本村東沖遺跡』長野市教育委員会
千野浩 1994『宮西遺跡』長野市教育委員会
寺島孝典 1996「吉田四ッ屋遺跡」『吉田四ッ屋遺跡・三輪遺跡（6）・棗河原遺跡』長野市教育委員会
田海義正・坂上有紀 2000『平田遺跡』新潟県埋蔵文化財調査事業
外山和夫・宮崎重雄・飯島義雄 1986「八束脛洞窟遺跡」『群馬県史』資料編2 579-584頁
直井雅尚ほか 1990『県町遺跡』松本市教育委員会
中島庄一 1997『栗林遺跡発掘調査報告書』中野市教育委員会
中島庄一 2001『栗林遺跡発掘調査報告書』中野市教育委員会
中島宏・杉崎茂樹ほか 1984『池上・池守』埼玉県教育委員会
永峯光一編 2001『湯倉洞窟』高山村教育委員会
中村正人ほか 1981『浜尻遺跡』高崎市教育委員会
小林真寿 1999『西一本柳遺跡 III・IV』佐久市教育委員会
西山克己編 1997『篠ノ井遺跡群』長野県埋蔵文化財センター
羽毛田卓也 1998『根々井芝宮遺跡』佐久市教育委員会
八賀哲夫編 2002『上ヶ平遺跡 II』岐阜県文化財保護センター
浜崎悟司 2004『八日市地方遺跡』石川県埋蔵文化財センター
林幸彦 1984『北西の久保遺跡 第1次発掘調査報告書』佐久市教育委員会
久田正弘 2004『東的場タケノハナ遺跡』石川県埋蔵文化財センター
平田篤志編 2007『赤保木遺跡』岐阜県教育文化財団文化財保護センター
広田和穂・賛田明 1999『榎田遺跡』長野県埋蔵文化財センター
福島正美 1987『吉崎・次場遺跡 第1分冊』石川県埋蔵文化財センター
藤沢宗平 1951「長野県東筑摩郡寿村百瀬弥生式遺跡調査概報」『信濃』第3巻第8号 1-12頁
藤田真一 2003『石塚遺跡調査概報 VI』高岡市教育委員会、
福海貴子 2003『八日市地方遺跡 I』小松市教育委員会
細田勝 1984『向田・権現塚・村後』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
前田清彦 1995『松任市野本遺跡』松任市教育委員会
増山仁 1988『金沢市磯部運動公園遺跡』金沢市教育委員会
松島榮治 1986「有笠山遺跡」『群馬県史』資料編2 529-535頁
檀原長則ほか 1992『栗林遺跡第 IX 次発掘調査報告書』中野市教育委員会
三石宗一 1999『五里田遺跡』佐久市教育委員会
本永義博・吉朝則富 2005「第1章 原始」『上宝村史』上巻 1-62頁
望月静雄 1980『小沼湯滝バイパス関連遺跡発掘調査報告書 上野・大倉崎遺跡』飯山市教育委員会
望月静雄ほか 1995『小泉弥生時代遺跡』飯山市教育委員会
森泉かよ子ほか 2003『佐久駅周辺土地区画整理事業埋蔵文化財発掘調査報告書』佐久市教育委員会
矢口忠良ほか 2004a『篠ノ井南条遺跡・辰巳池遺跡・本郷前遺跡』長野市教育委員会
矢口忠良ほか 2004b『天神木遺跡・樋爪遺跡・権現堂遺跡』長野市教育委員会
安英樹 1997『金沢市下安原海岸遺跡』石川県埋蔵文化財センター
-

-
- 安英樹 2003『久江ツカノコシ遺跡』石川県埋蔵文化財センター
山口辰一 1987『石塚遺跡調査概報 I』高岡市教育委員会
山口辰一 1988『石塚遺跡調査概報 II』高岡市教育委員会
吉朝則富 2004「弥生時代の遺跡」『宮村史』宮村教育委員会 87-97 頁
吉朝則富 2007「弥生時代概説と国府町の弥生遺跡」『国府町史』国府町教育委員会 101-117 頁
吉田稔 1991『小敷田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
吉田稔編 2003『北島遺跡 VI』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
吉野健 2002『前中西遺跡 II』熊谷市教育委員会
吉野健 2003『前中西遺跡 III』熊谷市教育委員会
四柳嘉章 1999『高田遺跡』富来町教育委員会
和島村教育委員会 1998『松ノ脇遺跡』

図の出典

図 1 は石川 2002a から引用。図 2 から図 8 は青木・賛田ほか 1998 から作成。図 9 は田中ほか 1986, 千野 1988, 西山編 1997 に筆者拓本を合成。図 10 は直井 19991 掲載図版から作成。図 11 は笹沢編 2006 から作成。図 12 は笹沢編 2006 と高橋 1979, 品田 1985, 田海・坂上 2000 から作成。図 13 は金子 1999, 高橋 1979, 品田 1985, 田海・坂上 2000, 小野塚ほか 2002, 和島村 1998 から作成。図 14 は相京ほか 1981, 平野 1986, 柿沼・神戸 1999a・1999b・1999c, 外山ほか 1986, 中村 1981 から作成。図 15 は青木・小倉 1982, 丑野 1983, 大塚 1988, 小倉 1987, 剣持 1984, 瀧瀬ほか 1993, 中島・杉崎 1984, 平野 1986, 吉田 1991, 吉田編 2003 から作成。図 16 は伊藤 1988, 池野 1987, 岡田・山口 2001, 金三津 2006・2007, 楠 1992, 小西 1995, 田中 2003, 浜崎 2004, 前田 1995, 福島 1987, 増山 1988, 安 1997・2003, 山口 1987・1988, 四柳 1999 より作成。図 18 は 6 は筆者作図。それ以外は石川 1995, 大参ほか 1975, 田中・石原・吉朝 1993, 八賀編 2002, 吉朝 2004 から作成。図 19 は佐々木・山下・桜井 1986, 静岡県 1992 から作成。図 20 は石川 2002a, 青木・賛田ほか 1998, 飯島 1997, 遠藤 2005, 小山 1987, 島田 1992, 鈴木 2004, 田中 1986, 千野 1994, 中島 1997・2001, 永峯編 2001, 羽毛田 1998, 市川編 2005, 吉田 1991 から作成。上記以外の図・表は全て筆者作成。写真 1-3 は筆者撮影。

(国立歴史民俗博物館機関研究員)

(2007年11月30日受理, 2008年 7 月29日審査終了)

Reconsidering the Chronology of Pottery Styles of Mid-Yayoi, and Theories of Distribution : Putting into Perspective the Possibility of Yayoi Period Trading

BABA Shin'ichiro

The aim of this article is to obtain clues for fleshing out the “movements” of people through reconsideration of the chronology of Kuribayashi-style pottery from the mid-Yayoi Period found in the Chubu highlands; identifying that pottery in a broad chronological context; and clarifying the dynamics of that distribution. An overall study of Yayoi society/culture requires establishing and classifying pottery styles and creating a broad chronology.

As a result of such analysis, I was able to confirm that the latter stage of Kuribayashi style 2, located in the earlier half of the Yayoi IV Period, was a period during which the distribution of Kuribayashi-style potteries was maximized, and also that Kuribayashi-style potteries and their variations were excavated in large numbers from the Fukiage site of Joetsu Takada Plain and the Kitajima site of the Kitamusashi Tsumanuma lowlands, both far from the watershed of the Chikuma River, the center of the Kuribayashi style. Also, during this period, the major communication route passing from Takada Plain to Northern Kanto changed from the “Mt. Shirane-Azuma River route” to the “Chikuma River-Usui River route”, as can be deduced from the distribution of Komatsu-style potteries and their variations. Komatsu-style potteries and their variations are excavated mainly from Matsubara site, the largest colonial site in the watershed area of Chikuma River.

The dynamics of such pottery distribution is considered to indicate change in the way people intercommunicated, especially the way they reciprocally exchanged supplies produced in particular places. It so happens that the latter stage of Kuribayashi style 2 has been identified as a period of production of kudatama beads in Sado, and a division of labor for the production of polished stone axes became established between the Enokida site and Matsubara site in the southern Nagano Basin. Several sites from which various pottery types were excavated are considered to have been “trading points” for groups with different pottery types.

That is to say, formation of a wide-area network by Kuribayashi-style groups during the earlier half of the IV Period, the establishment of “trading points”, and of a division of labor for the production of polished stone axes in the southern Nagano Basin are historical phenomena that developed in parallel, and they are considered to possess historical significance in their indicating the extent of the development of reciprocal exchange activities between groups.

Key words: Mid-Yayoi, Kuribayashi-style, Komatsu-style, dynamics of distribution, movement of people
